

IBM EMM Reports
バージョン 9 リリース 0
2013 年 1 月 15 日

インストールおよび構成ガイド



お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、129 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

このエディションは、新しいエディションで明記されない限り、IBM Marketing Platform のバージョン 9、リリース 0、モディフィケーション 0、および以降のすべてのリリースとモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM EMM Reports
Version 9 Release 0
January 15, 2013
Installation and Configuration Guide

発行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2013.12

© Copyright IBM Corporation 1999, 2012.

目次

第 1 章 レポートのインストール 1

レポートのインストールに関するロードマップ	1
レポート・コンポーネントのインストール	4
ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーのセ ットアップ (必要な場合)	4
ステップ: IBM EMM システムへのレポート・ス キーマのインストール	5
ステップ: JDBC データ・ソースの作成	6
レポート・ビューまたはテーブルのセットアップ	6
ステップ: レポート SQL ジェネレーターテンプ レートロード	7
ステップ: ビューまたはテーブルの作成スクリプト の生成	7
ステップ: レポート・ビューまたはテーブルの作成 テーブルおよび実体化ビューのためのステッ プ: データ同期のセットアップ	8
IBM Cognos BI のインストールおよびテスト	13
IBM Cognos BI、IBM レポート、およびドメイン IBM Cognos BI アプリケーション	13
IBM Cognos BI のインストール・オプション	14
IBM Cognos BI Web アプリケーションと Web サーバー	14
IBM Cognos BI とロケール	15
IBM Cognos BI インストールのテスト	15
Cognos システムへの IBM EMM 統合コンポーネン トおよびレポート・モデルのインストール	15
インストール・チェックリスト: IBM Cognos 統 合	16
ステップ: Marketing Platform システム・テー ブル用の JDBC ドライバーの入手	16
ステップ: IBM Cognos システムへのレポート・ モデルおよび統合コンポーネントのインストール	17
ステップ: IBM EMM アプリケーション・デー タベースに対応する IBM Cognos データ・ソースの 作成	17
オプションのステップ: E メール通知のセッ アップ	19
ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファ イアウォール構成	19
ステップ: Cognos Connection へのレポート・フ ォルダーのインポート	20
ステップ: データ・モデルの構成および公開 (必 要な場合)	21
ステップ: レポート内の内部リンクを有効にする ステップ: データ・ソース名の確認と公開	22
ステップ: Marketing Platform での Cognos レポ ート・プロパティの構成	23
ステップ: レポート・フォルダー権限の設定	23
ステップ: 認証を有効にしない状態での構成のテ スト	24

IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する	25
ステップ: 認証を構成した状態での構成のテスト	30
レポートの次のステップ	31

第 2 章 レポートのアップグレード 33

レポート、すべてのサポートされているバージョ ン、すべての製品のアップグレードのための初期ス テップ	33
ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーの存 在の確認	33
ステップ: 必要に応じて、IBM Cognos BI をアッ プグレードする	34
ステップ: Cognos モデルおよびレポート・アー カイブのバックアップ	34
テーブルを削除する SQL の生成および製品デー タベースでの SQL の実行	34
ステップ: Marketing Platform でのレポート・スキ ーマのアップグレード	35
ステップ: Marketing Platform でのレポート・テン プレートのアップグレード	36
ステップ: ルックアップ・テーブルの更新 (eMessage および Interact のみ)	37
ステップ: 新規 SQL の生成および製品データベ ースでのビューまたはテーブルのアップグレード	37
ステップ: Cognos Content Manager のマシンでの インストーラーの実行および IBM EMM 統合コ ンポーネントのアップグレード	38
バージョン 7.5.1 からのレポートのアップグレード	39
ステップ: 7.5.1 モデルのアップグレードおよび新 しいレポートのインストール	39
ステップ: 古い「セル別のキャンペーン・パフォ ーマンス」レポートの更新	43
ステップ: 古い「キャンペーン別のオファー・パ フォーマンス・サマリー」レポートの更新	46
バージョン 8.x からのレポートのアップグレード	50
ステップ: 8.x モデルのアップグレードおよび新 規レポートのインストール	50

第 3 章 レポート作成の構成 55

IBM EMM スイートのレポートについて	55
レポートおよびセキュリティについて	56
レポート・スキーマについて	60
Framework Manager データ・モデルについて	62
Report Authoring レポートについて	63
レポート・スキーマのカスタマイズ	65
使用するレポート・スキーマ	65
コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メ トリックの追加方法	65
カスタム属性の追加方法	66
レスポンス・タイプの追加方法	67

コンタクト・ステータス・コードを追加するには	67
パフォーマンス・レポートのカレンダー期間の指定方法	68
パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴のオーディエンス・レベルを構成するには	68
追加のオーディエンス・レベルまたはパーティションのレポート・スキーマの作成	69
キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳スキーマの作成方法	69
キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳スキーマを作成するには	70
オファー実績スキーマの作成方法	71
キャンペーン実績スキーマの作成方法	72
キャンペーン・カスタム属性スキーマの作成方法	73
対話実績スキーマを作成するには	73
更新されたビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成	74
ビューまたはレポート・テーブルの更新の前に	74
レポート・ビューまたはテーブルの更新済み SQL スクリプトの生成	74
ビューまたはレポートテーブルの更新	75
データソース別の SQL スクリプト	76
「レポート SQL ジェネレータ」ページのリファレンス	77
IBM Cognos モデルのカスタマイズ	78
例: データ・モデルにある既存のビューまたはテーブルへの属性の追加	78
例: IBM Cognos データ・モデルへの新規ビューの追加	79
IBM EMM アプリケーション用の Cognos レポートのカスタマイズまたは作成	80
新しい Campaign レポートの作成に関するガイドライン	81
インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードの構成	82
新規カスタム・ダッシュボード・レポートの作成に関するガイドライン	82

第 4 章 複数パーティション用のレポートの構成 85

複数パーティション用の IBM Cognos レポートの構成	85
始める前に	85
レポート・パーティション・ツールを実行してレポート・アーカイブ .zip ファイルのコピーを作成する	86
Campaign 用の Cognos モデルのコピーの作成	87
eMessage 用の Cognos モデルのコピーの作成	88
IBM EMM 「構成」ページでのパーティションのレポート・プロパティの更新	89
パーティションのレポート・プロパティを更新するには	89

付録 A. レポート構成プロパティ 91

Reports 統合 Cognos [バージョン]	91
-------------------------------	----

レポート スキーマ [製品] [スキーマ名] SQL 構成	94
レポート スキーマ キャンペーン	95
レポート スキーマ キャンペーン オファー実績	96
レポート スキーマ キャンペーン [スキーマ名] カラム [コンタクト・メトリック]	97
レポート スキーマ キャンペーン [スキーマ名] カラム [レスポンス・メトリック]	98
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーン・パフォーマンス	99
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細	101
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 カラム [レスポンス・タイプ]	101
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳	102
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳 カラム [コンタクト・ステータス]	103
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーン・カスタム属性 カラム [キャンペーン・カスタム・カラム]	104
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーン・カスタム属性 カラム [オファー・カスタム・カラム]	105
レポート スキーマ キャンペーン キャンペーン・カスタム属性 カラム [セルカスタムカラム]	105
レポート スキーマ Interact	106
レポート スキーマ Interact 対話実績	107
レポート スキーマ eMessage	108
Campaign partitions partition[n] reports	108

付録 B. Cognos レポートの書式設定 113

グローバル・レポートのスタイル	113
レポートのページ・スタイル	115
リスト・レポート・スタイル	116
クロス集計レポートのスタイル	118
チャートのスタイル	119
ダッシュボード・レポートのスタイル	120

付録 C. 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ 121

eMessage レポートおよびレポート・スキーマ	123
Interact レポートおよびレポート・スキーマ	123

IBM 技術サポートへの連絡 127

特記事項 129

商標	131
プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項	131

第 1 章 レポートのインストール

この章では、IBM® EMM アプリケーション用のレポート作成機能をインストールおよびセットアップする方法について説明します。カスタマイズされたレポートのアップグレードと構成に関する情報は、本書の別の箇所に記載されています。

レポート作成機能のために、IBM EMM はビジネス・インテリジェンス・アプリケーション IBM Cognos® BI と統合します。レポート作成は、以下のコンポーネントに依存します。

- IBM Cognos BI のインストール済み環境
- IBM Cognos のインストール済み環境と統合する IBM EMM コンポーネントのセット
- Campaign、eMessage、および Interact の場合、アプリケーションのシステム・テーブルでレポート・ビューまたはテーブルを作成するためのレポート・スキーマ
- IBM EMM アプリケーションのサンプル・レポート (IBM Cognos Report Authoring で作成)

レポート作成機能をインストールするには、以下を行ってください。

- IBM Cognos システムへの IBM EMM 統合コンポーネントおよびレポート・モデルのインストール
- Marketing Platform がインストールされているマシンへのアプリケーション・レポート・パッケージからのレポート・スキーマのインストール
- レポート・ビューまたはテーブルのセットアップ

レポートのインストールに関するロードマップ

次の表には、IBM EMM レポートのインストール・プロセスの概要と、関係するステップの要旨、および詳細な説明が記されている場所についての情報が記載されています。アップグレードの場合、このガイドのアップグレードに関する章を参照してください。

ステップ	説明	詳細の参照先
レポート・コンポーネントのインストール		
IBM EMM 製品のインストール。	レポートで使用するデータを提供する製品をインストールします。	個別の製品インストール・ガイドを参照。
IBM Cognos のインストール。	サポート対象バージョンの IBM Cognos をインストールします。これは、すべてではないものの多くの IBM EMM レポートで必須です。	IBM Cognos 資料を参照。
システム・ユーザーのセットアップ。	「設定」>「構成」および「設定」>「レポート SQL ジェネレーター」ページにアクセスできるユーザーを構成し、レポート・プロパティを構成して、レポート・スキーマの作成に使用する SQL を生成する必要があるときにこのユーザーとしてログインできるようにします。	4 ページの『ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーのセットアップ (必要な場合)』を参照。

ステップ	説明	詳細の参照先
Marketing Platform がインストールされているマシンへのレポート・スキーマのインストール。	IBM マスター・インストーラーとレポート・バック・インストーラーを同じディレクトリーに配置し、マスター・インストーラーを起動します。	5 ページの『ステップ: IBM EMM システムへのレポート・スキーマのインストール』を参照。
JDBC データ・ソースの作成。	Marketing Platform が配置されているアプリケーション・サーバーで、レポートに使用する製品用のシステム・テーブル・データベースに対する JDBC データ・ソース接続を作成します。	6 ページの『ステップ: JDBC データ・ソースの作成』を参照。
レポート・ビューまたはテーブルのセットアップ		
レポート SQL ジェネレーターのテンプレートのロード。	Campaign、eMessage、および Interact にレポートを実装するには、レポートがレポート可能データを抽出するレポート・ビューまたはテーブルを作成します。これらのビューまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成する際にレポート SQL ジェネレーターが使用するテンプレートは、レポート・バックに含まれています。このステップでは、こうしたテンプレートを Marketing Platform システム・テーブル・データベースにロードします。	7 ページの『ステップ: レポート SQL ジェネレーターのテンプレートのロード』を参照。
ビューまたはテーブル作成スクリプトの生成。	いくつかの必要な構成プロパティを設定し、レポート SQL ジェネレーターを使用して、レポート・ビューまたはレポート・テーブルを作成するための SQL を生成します。	7 ページの『ステップ: ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成』を参照。
レポート・ビューまたはレポート・テーブルの作成。	IBM EMM 製品システム・テーブル・データベースにビューまたはテーブルを作成します。	8 ページの『ステップ: レポート・ビューまたはテーブルの作成』を参照。
データ同期のセットアップ。	レポート用に実体化ビューまたはテーブルを作成した場合、データベース管理ツールを使用して、データ同期を定期的にスケジュールしてください。	13 ページの『テーブルおよび実体化ビューのみのためのステップ: データ同期のセットアップ』を参照。
IBM Cognos BI のインストールおよびテスト		
IBM Cognos BI のインストール	IBM Cognos 資料の指示に従ってインストールを行ってから、システムをテストします。	15 ページの『IBM Cognos BI インストールのテスト』を参照。
Cognos システムへの IBM EMM 統合コンポーネントおよびレポート・モデルのインストール		
Marketing Platform システム・テーブルで使用する JDBC ドライバーの入手。	Marketing Platform で使用する JDBC ドライバーを、Cognos Content Manager がインストールされているマシンにコピーします。IBM 認証が実装されている場合、Cognos はユーザー情報を入手する際にこの認証を使用します。	16 ページの『ステップ: Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手』を参照。
Cognos システムへのレポート・モデルと統合コンポーネントのインストール。	IBM EMM マスター・インストーラー、Marketing Platform インストーラー、および製品レポート・バック・インストーラーを、Cognos Content Manager がインストールされているマシンで同じディレクトリーに配置し、マスター・インストーラーを起動します。	17 ページの『ステップ: IBM Cognos システムへのレポート・モデルおよび統合コンポーネントのインストール』を参照。

ステップ	説明	詳細の参照先
IBM EMM アプリケーション・データベース用の Cognos データ・ソースの作成。	Cognos アプリケーションでは、レポートのために IBM EMM アプリケーション・データ・ソースに対する接続が必要です。Cognos Connection の「管理」セクションを使用して、こうしたデータ・ソースを作成します。	17 ページの『ステップ: IBM EMM アプリケーション・データベースに対応する IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照。
E メール通知のセットアップ (オプション)。	レポートを E メール添付ファイルとして送信するオプションを有効にする場合、Cognos Configuration で通知を構成します。	19 ページの『オプションのステップ: E メール通知のセットアップ』を参照。
Cognos ファイアウォールの構成。	Cognos Configuration で、IBM EMM システムを有効なドメインまたはホストとして指定します。	19 ページの『ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成』を参照。
レポート・フォルダーのインポート。	Cognos Connection で、レポートの圧縮ファイルをインポートします。	20 ページの『ステップ: Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート』を参照。
データ・モデルの構成および公開 (必要な場合)。	Cognos データ・ソースの作成時に使用したデータ・ソース・ログインが IBM EMM システム・テーブルの所有者ではない場合は、このステップを実行します。	21 ページの『ステップ: データ・モデルの構成および公開 (必要な場合)』を参照。
レポート内の内部リンクの有効化。	IBM EMM レポートには、標準リンクがあります。それらを有効にするには、Cognos データ・モデルでリダイレクト URL を構成する必要があります。	21 ページの『ステップ: レポート内の内部リンクを有効にする』を参照。
データ・ソース名の確認と公開。	このステップは、Cognos Connection でデフォルトのデータ・ソース名を使用したかどうかによって異なります (そのステップの説明を参照)。	22 ページの『ステップ: データ・ソース名の確認と公開』を参照。
IBM EMM での Cognos レポート・プロパティの構成。	IBM EMM にログインし、Cognos レポート・プロパティを設定します。	23 ページの『ステップ: Marketing Platform での Cognos レポート・プロパティの構成』を参照。
レポート・フォルダー権限の構成。	ユーザーに IBM EMM アプリケーション内からレポートを実行する権限を付与するには、デフォルトの ReportsUser 役割を適切なユーザー・グループまたはユーザーに割り当てます。	23 ページの『ステップ: レポート・フォルダー権限の設定』を参照。
認証を有効にしない状態での構成のテスト。	レポートをインストールして構成した後で、認証を有効にする前に、いくつかのレポートを実行してセットアップをテストします。	24 ページの『ステップ: 認証を有効にしない状態での構成のテスト』を参照。
IBM EMM 認証を使用するための Cognos の構成。	IBM EMM Authentication Provider を使用すると、Cognos アプリケーションは IBM EMM 認証を使用して、スイート内のもう 1 つのアプリケーションであるかのように Marketing Platform と通信できるようになります。このステップには、いくつかのサブステップがあります。	25 ページの『IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』を参照。
認証が構成された状態での構成のテスト。	IBM EMM 認証を使用するように Cognos を構成した後、システムを再びテストします。	30 ページの『ステップ: 認証を構成した状態での構成のテスト』を参照。

ステップ	説明	詳細の参照先
カスタマイズ・ステップの実行。	この時点では、レポートは適切に機能しており、サンプル・レポートはデフォルトの状態にあります。 Campaign、Interact、または Marketing Operations のレポートやレポート・スキーマをカスタマイズしなければならない場合があります。	31 ページの『レポートの次のステップ』を参照。

レポート・コンポーネントのインストール

IBM EMM 製品レポート・パッケージのインストールおよび構成は、複数のステップから成るプロセスです。このセクションのタスクを実行してインストールを行ってください。

ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーのセットアップ (必要な場合)

IBM EMM 「設定」>「構成」および「設定」>「レポート SQL ジェネレーター」ページにアクセスできるユーザーを構成し、レポート・プロパティを構成して、レポート・スキーマの作成に使用する SQL を生成する必要があるときにこのユーザーとしてログインできるようにします。

これを行う最も簡単な方法は、**platform_admin** ユーザーに **ReportSystem** 役割を割り当てることです。この役割は、「ユーザーの役割と権限 (User Roles and Permissions)」ページの「レポート」>「PartitionN」の下にあります。

このタスクの実行に関する一般情報については、『ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除』を参照してください。

ユーザーへの役割の割り当て、またはユーザーからの役割の削除

この手順を使用して、役割の割り当てまたは削除を行います。

1. 「設定」>「ユーザ」をクリックします。
2. 作業対象のユーザー・アカウントの名前をクリックします。
3. 「役割の編集」をクリックします。

ユーザーに割り当てられていない役割が、左側の「使用可能な役割」ボックスに表示されます。ユーザーに現在割り当てられている役割が、右側の「役割」ボックスに表示されます。

4. 「利用できる役割」ボックスの役割名をクリックして選択します。
5. 「追加」または「削除」をクリックして、役割名を一方のボックスから他方のボックスに移動します。
6. 「変更を保存」をクリックして変更を保存します。
7. 「OK」をクリックします。

ステップ: IBM EMM システムへのレポート・スキーマのインストール

IBM EMM スイート・マスター・インストーラーおよびレポート・パッケージ・インストーラーを使用して、Marketing Platform がインストールされているマシンに希望のレポート・スキーマをインストールします。

レポート・パッケージ・インストーラーを起動する際、以下のガイドラインに従います。

1. 「**ReportsPackProduct** コンポーネント (**ReportsPackProduct** Components)」ウィンドウで、「レポート・スキーマ」を選択します。
2. 「スキーマ・タイプ選択」ウィンドウに複数のオプションが表示される場合、それは IBM アプリケーションにカスタム属性がプリパッケージされていることを意味します。以下のいずれかを行います。
 - a. カスタム属性を含むレポート・スキーマをインストールするには、「**カスタム**」を選択します。Campaign のサンプル・レポートは、カスタム属性を使用するように構成されています。そのため、Campaign レポート・パッケージをインストールし、サンプル・レポートを正しく機能させるには、このオプションを選択する必要があります。
 - b. カスタム属性を含まないレポート・スキーマをインストールするには、「**基本**」を選択します。

インストーラーはレポート・スキーマをファイル・システムに配置し、スキーマを Marketing Platform に登録します。

3. 以下のようにして、レポート・スキーマが Marketing Platform に登録されていることを確認します。
 - a. IBM EMM システムに **platform_admin** ユーザーとしてログインします。
 - b. 「設定」>「構成」を選択します。
 - c. 「レポート」>「スキーマ」>「<製品名>」を展開します。

アプリケーションのスキーマ構成プロパティーが表示される場合、インストールが完了したことを意味します。

アプリケーションのスキーマ構成プロパティーが存在しない場合、レポート・パッケージは登録されていないことを意味します。そのため、次のステップの説明に従って、手動で登録する必要があります。

4. スキーマ構成プロパティーが存在しない場合のみ、以下のように手動で登録します。
 - a. `import_all` スクリプトを開き、以下のように編集します。

スクリプトは、レポート・パッケージ・インストール済み環境の下の `tools` ディレクトリーにあります。

`MANAGER_TOOLS_BIN_DIR` 変数の値を、Marketing Platform インストール済み環境の下の `tools/bin` ディレクトリーのパスに設定します。

- b. スクリプトを実行します。

このスクリプトによって、Marketing Platform configTool ユーティリティーが起動され、スキーマが登録されます。

- c. スキーマ構成プロパティが存在することを確認します。

ステップ: JDBC データ・ソースの作成

IBM EMM レポート SQL ジェネレーター・ツールは、レポート・テーブルを作成する SQL スクリプトを生成するために、IBM EMM アプリケーション・データベースに接続できなければなりません。SQL ジェネレーターは、ビューまたは実体化ビューを作成する SQL スクリプトをそれらのアプリケーション・データベースにアクセスせずに生成することができますが、データ・ソース接続がなければ SQL を検証できません。

Marketing Platform をホストするアプリケーション・サーバーで、レポートを有効にする IBM EMM アプリケーションごとに JDBC データ・ソースを構成します。以下にリストしたデフォルトの JNDI 名を使用します。以下の表に示したデフォルトの JNDI 名を使用しない場合は、SQL ジェネレーター・ツールを実行するときにデータ・ソースの正しい名前を指定できるように、使用した名前を書き留めておいてください。

IBM アプリケーション	デフォルトの JNDI 名
Campaign	campaignPartition1DS パーティションが複数存在する場合は、パーティションごとにデータ・ソースを作成します。
eMessage	campaignPartition1DS (システム・テーブル用) eMessagePartition1TrackingDS (トラッキング・テーブル用)
Interact	campaignPartition1DS (設計時データベース用) InteractRTDS (実行時データベース用) InteractLearningDS (学習テーブル用)

このタスクに関してさらにヘルプが必要な場合は、アプリケーション・サーバーの資料を参照してください。

レポート・ビューまたはテーブルのセットアップ

Campaign、eMessage、および Interact にレポートを実装するには、レポートがレポート可能データを抽出するレポート・ビューまたはテーブルを作成します。このセクションでは、レポート SQL ジェネレーターを実行する方法について説明します。これは、レポート・スキーマを使用して、ビューまたはテーブル作成スクリプトを生成します。その後、そのスクリプトを IBM アプリケーション・データベースで実行して、ビューまたはテーブルを作成します。

ステップ: レポート SQL ジェネレーターのテンプレートのロード

レポート・スキーマを持つ IBM EMM アプリケーションのレポート・パッケージには、テンプレート SQL select ステートメントを `uar_common_sql` テーブルにロードする SQL スクリプトが含まれます。レポート SQL ジェネレーターは、レポート・ビューまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成する際に、これらのテンプレートを使用します。このタスクでは、テンプレートをロードするスクリプトを実行します。

1. レポート・パック・インストール済み環境の下での `schema` ディレクトリーに移動し、`templates_sql_load.sql` スクリプトを見つけます。
2. この `templates_sql_load.sql` スクリプトを Marketing Platform データベースで実行します。

ステップ: ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成

以下のステップを実行します。

1. IBM EMM に `platform_admin` ユーザー (または「レポート SQL ジェネレーター」メニュー項目へのアクセス権限を持つ別のユーザー) としてログインします。
2. 前のステップで作成した JDBC データ・ソースにデフォルトの JNDI 名を使用しなかった場合のみ、以下を行います。
 - a. 「設定 | 構成 | レポート | スキーマ」＜製品名＞」を選択します。
 - b. 前のステップで JDBC 接続に付けた JNDI 名に対応する JNDI プロパティのデフォルト値を変更します。
3. 「設定 | レポート SQL ジェネレーター」を選択します。
4. 「製品」フィールドで、適切な IBM アプリケーションを選択します。
5. 「スキーマ」フィールドで 1 つ以上のレポート・スキーマを選択します。
6. 「データベース・タイプ」を選択します。
7. 「生成タイプ」フィールドで、適切なオプション (ビュー、実体化ビュー、またはテーブル) を選択します。

「データベース・タイプ」が MS SQL Server に設定されている場合、実体化ビューというオプションはありません。

JNDI データ・ソース名が正しくない場合または構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成する SQL スクリプトを検証できません。

8. 「Drop 文を生成しますか?」を「いいえ」に設定しておきます。

ビューまたはテーブルの作成スクリプトを初めて実行するときは、ドロップするビューまたはテーブルが存在していないので、ドロップ・スクリプトを作成する必要はありません。

9. (オプション) 生成される SQL を調べるには、「生成」をクリックします。SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ブラウザー・ウィンドウにそのスクリプトが表示されます。
10. 「ダウンロード」をクリックします。

SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ファイルを保存する場所の指定を求めるプロンプトが出されます。「スキーマ」フィールドから単一のレポート・スキーマを選択した場合、スクリプト名はスキーマの名前と一致します (例えば eMessage_Mailing_Performance.sql)。複数のレポート・スキーマを選択すると、スクリプト名には製品名のみ (Campaign.sql など) が使用されます。名前の詳細なリストについては、『データソース別の SQLスクリプト』を参照してください。

11. スクリプトを保存する場所を指定します。ファイルの名前を変更する場合は、必ず、選択したスキーマを明確に示すものを使用してください。次に、「保存」をクリックします。
12. 生成する必要があるスクリプトごとにステップ 5 から 12 を繰り返します。

注: Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

ステップ: レポート・ビューまたはテーブルの作成

前のステップで作成した SQL を使用して、レポート・ビューまたはテーブルを作成します。インストール済み環境に応じて、以下の 1 つ以上を行います。

必要に応じて、『データソース別の SQLスクリプト』を参照してください。

- 9 ページの『Campaign または eMessage 用のビューまたは実体化ビューの作成』
- 9 ページの『Interact 用のビューまたは実体化ビューの作成』
- 11 ページの『Campaign または eMessage 用のレポート・テーブルの作成とデータ設定』
- 12 ページの『Interact 用のレポート・テーブルの作成とデータ設定』

データソース別の SQLスクリプト

以下の表では、各データ・ソースについて生成する必要があるスクリプトと結果スクリプトの名前を示し、ビューまたは実体化ビューを作成する場合にどの IBM EMM アプリケーション・データベースに対してどのスクリプトを実行する必要があるかも示します。次のことに注意してください。

- この表にはデータ・ソースおよび生成スクリプトのデフォルト名をリストしていますが、これらはお客様が変更している場合があります。
- Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

レポート・スキーマ	データソース (デフォルト名)	スクリプト名 (デフォルト名)
すべての Campaign レポート・スキーマ	Campaign システム・テーブル (campaignPartitionIDS)	Campaign.sql (レポート・スキーマごとに別のスクリプトを生成していない場合)。別のスクリプトを生成している場合、各スクリプトの名前は個々のスキーマに基づいて付けられます。
eMessage メール配信パフォーマンス	eMessage は、Campaign システム・テーブルに関する表を追跡します。 (campaignPartitionIDS)	eMessage_Mailing_Performance.sql

レポート・スキーマ	データソース (デフォルト名)	スクリプト名 (デフォルト名)
対話配置履歴、対話パフォーマンス、および対話ビュー	Interact 設計時間データベース (campaignPartition1DS)	Interact.sql
対話ラーニング	Interact 学習テーブル (InteractLearningDS)	Interact_Learning.sql
対話ランタイム	Interact ランタイム・データベース (InteractRTDS)	Interact_Runtime.sql

Campaign または eMessage 用のビューまたは実体化ビューの作成

1. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけます。必要であれば、8 ページの『データソース別の SQL スクリプト』を参照してください。
2. データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当するアプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

注: DB2® データベースで実体化ビューを作成するスクリプトを実行すると、「SQL20059W マテリアライズ照会表 表名 は、照会の処理を最適化するために使用できません」というエラーがデータベースから返される場合があります。この場合でも、実体化ビューは正常に作成されます。

3. **DB2 データベースを使用する Campaign の場合のみ**、DB2 ヒープ・サイズを 10240 以上に増やします。(デフォルトのヒープ・サイズは 2048 です。) 次のコマンドを使用します。

```
db2 update db cfg for databasename using stmtheap 10240
```

databasename は、Campaign データベースの名前です。

ヒープ・サイズを増やすことで、ユーザーが収支サマリー・レポートのようなレポートの実行時にキャンペーンをすべて選択した場合でも、IBM Cognos が SQL エラー・メッセージを表示することがなくなります。

4. **eMessage の場合にのみ**、以下を実行します。
 - レポート・バック・インストール済み環境の ReportsPackCampaign¥tools ディレクトリーで、uare_lookup_create_DB_type.sql スクリプト (ここで、*DB_type* は Campaign のインストール済み環境用の該当するデータベース・タイプ) を見つけます。
 - スクリプトの該当するバージョンを編集して drop table ステートメントを除去し、スクリプトを保存します。
 - Campaign システム・テーブル・データベースに対して、スクリプトの該当するバージョンを実行します。

Interact 用のビューまたは実体化ビューの作成

1. lookup_create SQL スクリプトの実行に使用するクライアントの言語設定が UTF-8 であることを確認します。

Oracle および DB2 の場合の確認方法の例については、『Oracle および DB2 での言語の設定』を参照してください。

2. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけます。必要であれば、8 ページの『データソース別の SQLスクリプト』を参照してください。
3. データベース管理ツールを使用して、構成するレポート・パッケージに該当するアプリケーション・データベースに対して適切なスクリプトを実行します。

注: DB2 データベースで実体化ビューを作成するスクリプトを実行すると、「SQL20059W マテリアライズ照会表 表名 は、照会の処理を最適化するために使用できません」というエラーがデータベースから返される場合があります。この場合でも、実体化ビューは正常に作成されます。

4. レポート・パッケージのインストール・ディレクトリー内の tools サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに合った lookup_create スクリプトを探します。例えば、SQL Server 用のスクリプトの名前は uari_lookup_create_MSSQL.sql、というようになっています。

このスクリプトを Interact 設計時データベースで実行します。使用するデータベース・ツールが変更をコミットするようにしてください。例えば、データベースの自動コミット・オプションを true に設定しなければならない場合もあります。

5. Marketing Platform インストール・ディレクトリー内の db/calendar サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに該当する ReportsCalendarPopulate スクリプトを探します。このスクリプトはさらに 2 つのテーブル、UA_Calendar と UA_Time を作成します。
6. このスクリプトを Interact 実行時データベース (InteractRTDS) で実行します。

DB2 の場合のみ、以下のいずれかの操作を行います。

- コマンド db2 -td@ -vf ReportsCalendarPopulate_DB2.sql を使用して、コマンド・ラインからスクリプトを実行します。
- あるいは、DB2 クライアント・インターフェースを使用する場合は、「ステートメント終了文字」フィールドで終了文字を @ 文字に変更します。

Oracle および DB2 での言語の設定:

Oracle の例

例えば、Windows と Oracle の場合、以下を行います。

1. 開いている Oracle セッションがあれば、すべて閉じます。
2. 「レジストリー エディター」を開きます。
3. 「HKEY_LOCAL_MACHINE」>「SOFTWARE」>「ORACLE」と移動し、Oracle ホームのフォルダーを開きます (例えば KEY_OraDb10g_home1)。
4. NLS_LANG 設定を検索します。
5. 指定されている値の最後の部分が UTF8 であることを確認します。例えば、AMERICAN_AMERICA.UTF8 です。

DB2 の例

例えば、DB2 の場合、スクリプトを実行する (かつ DB2 クライアントがインストールされている) マシンから、DB2 コマンド・ウィンドウを実行します。その後、以下のコマンドを実行します。

```
db2set
```

出力で、変数/値のペア `DB2CODEPAGE=1208` を探します。

この変数が設定されていない場合、以下のコマンドを実行します。

```
db2 db2set db2codepage=1208
```

その後、変更を有効にするために、セッション・ウィンドウを閉じます。

Campaign または eMessage 用のレポート・テーブルの作成とデータ設定

1. 新規レポート・データベースを作成します。
2. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけます。必要であれば、8 ページの『データソース別の SQLスクリプト』を参照してください。
3. データベース管理ツールを使用して、生成されたスクリプトを新規データベースで実行します。
4. **Campaign および DB2 レポート・データベースの場合のみ**、DB2 ヒープ・サイズを 10240 以上に増やします。(デフォルトのヒープ・サイズは 2048 です。) 次のコマンドを使用します。

```
db2 update db cfg for databasename using stmtheap 10240
```

databasename は、レポート・データベースの名前です。

ヒープ・サイズを増やすことで、ユーザーが収支サマリー・レポートのようなレポートの実行時にキャンペーンをすべて選択した場合でも、Cognos が SQL エラー・メッセージを表示することがなくなります。

5. Marketing Platform インストール済み環境の `db/calendar` サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに該当するバージョンの `ReportsCalendarPopulate` スクリプトを探します。このスクリプトはさらに 2 つのテーブル、`UA_Calendar` と `UA_Time` を作成します。
6. テーブル作成スクリプトを使用して作成した新規データベースで `ReportsCalendarPopulate` スクリプトを実行します。

DB2 の場合のみ、以下のいずれかの操作を行います。

- コマンド `db2 -td@ -vf ReportsCalendarPopulate_DB2.sql` を使用して、コマンド・ラインからスクリプトを実行します。
 - あるいは、DB2 クライアント・インターフェースを使用する場合は、「ステートメント終了文字」フィールドで終了文字を @ 文字に変更します。
7. データベース管理ツールを使用して、新規テーブルに実稼働システム・データベースからの適切なデータを設定します。

注: このステップでは、独自のツールを使用する必要があります。この SQL は SQL ジェネレーターでは生成されません。

8. **eMessage の場合にのみ**、以下を実行します。
 - レポート・バック・インストール済み環境の ReportsPackCampaign¥tools ディレクトリーで、uare_lookup_create_DB_type.sql スクリプト (ここで、DB_type は Campaign のインストール済み環境用の該当するデータベース・タイプ) を見つけます。
 - スクリプトの該当するバージョンを編集して drop table ステートメントを除去し、スクリプトを保存します。
 - Campaign システム・テーブル・データベースに対して、スクリプトの該当するバージョンを実行します。

Interact 用のレポート・テーブルの作成とデータ設定

1. 新規レポート・データベースを作成します。
2. 前に生成して保存してある SQL スクリプトを見つけて、必要であれば、8 ページの『データソース別の SQLスクリプト』を参照してください。
3. データベース管理ツールを使用して、生成されたスクリプトを新規データベースで実行します。
4. レポート・パッケージのインストール・ディレクトリー内の tools サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに合った lookup_create スクリプトを探します。例えば、SQL Server 用のスクリプトの名前は uari_lookup_create_MSSQL.sql、というようになっています。

このスクリプトを Interact 設計時データベースで実行します。使用するデータベース・ツールが変更をコミットするようにしてください。例えば、データベースの自動コミット・オプションを true に設定しなければならない場合もあります。

5. Marketing Platform インストール・ディレクトリー内の db/calendar サブディレクトリーを見つけ、データベース・タイプに該当する ReportsCalendarPopulate スクリプトを探します。このスクリプトはさらに 2 つのテーブル、UA_Calendar と UA_Time を作成します。
6. このスクリプトを、Interact 設計時データベースを表すテーブルと Interact 実行時データベースを表すテーブルの両方のセットで実行します。

DB2 の場合のみ、以下のいずれかの操作を行います。

- コマンド db2 -td@ -vf ReportsCalendarPopulate_DB2.sql を使用して、コマンド・ラインからスクリプトを実行します。
 - あるいは、DB2 クライアント・インターフェースを使用する場合は、「ステートメント終了文字」フィールドで終了文字を @ 文字に変更します。
7. データベース管理ツールを使用して、新規テーブルに実稼働システム・データベースからの適切なデータを設定します。

注: このステップでは、独自のツールを使用する必要があります。この SQL は SQL ジェネレーターでは生成されません。

テーブルおよび実体化ビューのみのためのステップ: データ同期のセットアップ

実体化ビューを作成した場合、データベース管理ツールを使用して、必ず IBM EMM アプリケーションの実動データベースと実体化ビューの間の定期的なデータ同期をスケジュールしてください。

レポート・テーブルを作成した場合、スケジュールされた ETL (Extraction, Transformation and Load) または任意のカスタム・メソッドを使用して、必ず IBM EMM アプリケーションの実動データベースと新規のレポート・テーブルの間の定期的なデータ同期をスケジュールしてください。

IBM Cognos BI のインストールおよびテスト

IBM との使用許諾契約書によって IBM Cognos BI ライセンスが付与されている場合は、IBM Cognos BI インストール・メディアを IBM Customer Central Web サイトからダウンロードすることができます。

IBM Cognos BI、IBM レポート、およびドメイン

開始する前に、IBM Cognos BI を IBM EMM スイートと同じドメインにインストールするかどうかを決定してください。ベスト・プラクティスとして IBM Cognos と IBM EMM システムを同じドメインにインストールすることをお勧めします。そうしない場合は、IBM Cognos と IBM EMM の両方を、SSL を使用するように構成する必要があります。

注: IBM Cognos BI をインストールした後、Cognos Configuration を使用して Cognos URL を適切に構成してください。Windows システムの場合、これらの URL のデフォルト値では、マシン名「localhost」が使用されます。「localhost」プロセスホルダーを、ドメインを含む完全修飾ホスト名に置き換える必要があります。

IBM Cognos BI アプリケーション

IBM Cognos BI は、多階層アーキテクチャーに編成される複数のアプリケーション、サーバー、およびサービスの集合です。IBM Cognos BI を IBM EMM スイートと一緒に使用する際、以下の Cognos BI アプリケーションのサブセットを使用します。

- IBM Cognos BI Server。これは、レポートやフォルダー (および照会やメタデータ・モデル)、Content Manager などのためのストレージを提供します。
- IBM Cognos Connection。これは、レポートのインポート、構成、およびスケジュールに使用する Web アプリケーションです。このアプリケーションは、以下の追加のコンポーネントへのアクセスも提供します。
 - Cognos Viewer: レポートの表示に使用します。Cognos Viewer は、IBM EMM アプリケーションでレポートを表示するモジュールです。
 - Report Authoring: レポートのカスタマイズと新規作成に使用します。
 - Cognos Administration: データ・ソースの構成などに使用します。
- IBM Cognos Framework Manager。IBM EMM アプリケーションの IBM Cognos BI レポートをサポートする Cognos データ・モデルの構成とカスタマイズに使用するメタデータ・モデリング・ツールです。

- IBM Cognos Configuration。これは、個々の Cognos BI コンポーネントの構成に使用する構成ツールです。

IBM Cognos BI のインストール・オプション

IBM Cognos BI をインストールする前に、「*IBM Cognos BI* アーキテクチャーおよび実装ガイド」で、各種コンポーネント、インストール・オプション、および IBM Cognos が推奨する構成アプローチについて学習してください。

この IBM Cognos 資料では、分散環境にインストールするか 1 台のコンピュータに全コンポーネントをインストールするかの 2 つの一般カテゴリーでインストールを説明しています。最良の結果を得るために、PoC (概念検証) 用かデモンストレーション環境でない限り、1 台のコンピュータに全コンポーネントをインストールしないでください。

IBM レポートが使用する IBM Cognos BI アプリケーションのサブセットをインストールするためには、2 つの IBM Cognos インストーラーを使用する必要があります。1 つは IBM Cognos BI サーバー、Content Manager、Cognos Configuration、および Web ベースのユーザー・インターフェースをインストールするためのものです。別のインストーラーは、メタデータ・モデリング・ツールである Framework Manager をインストールするために使用します。このツールは Windows マシンにインストールする必要があるためです。

インストールについて詳しくは、Cognos の資料を参照してください。

IBM Cognos BI Web アプリケーションと Web サーバー

IBM は、Cognos Connection および他の IBM Cognos BI Web アプリケーションをホストする Web サーバーを提供していません。Windows の場合、IBM Cognos の資料は Microsoft IIS (Internet Information Services) を使用していることを前提としていますが、Apache HTTP も使用できます。

Apache HTTP Server を使用する場合は、Apache httpd.conf ファイルの VirtualHost 構成ディレクティブで Cognos Web アプリケーションの Web 別名を正しくセットアップするように注意してください。最も固有性の高い別名 (スクリプト別名) を最初に配列し、別名ごとにディレクトリー権限をセットアップします。

httpd.conf コード・スニペットの例

次の例は、Windows システム上の Apache インストール済み環境のものです。Apache サーバーは、デフォルト・ポート 80 で稼働しています。

```
<VirtualHost *:80>
  ScriptAlias /ibmcognos/cgi-bin "C:/cognos/cgi-bin"
  <Directory "C:/cognos/cgi-bin">
    Order allow,deny
    Allow from all
  </Directory>
  Alias /ibmcognos "C:/cognos/webcontent"
  <Directory "C:/cognos/webcontent">
```

```
Order allow,deny
Allow from all
</Directory>
</VirtualHost>
```

注: この httpd.conf ファイル・スニペットは例に過ぎません。ご使用のシステムに応じて Web 別名を構成してください。

IBM Cognos BI とロケール

IBM EMM アプリケーション・レポート・パッケージのローカライズ・バージョン(英語以外)をインストールする計画の場合は、製品ロケールをアプリケーション・レポート・パッケージの言語と一致するように設定してください。

Cognos Content Manager を実行するシステムで、IBM Cognos Configuration を開き、「操作」>「グローバル設定を編集」を選択して、IBM Cognos BI システムのロケールを構成します。詳しくは、「*IBM Cognos Configuration ユーザー・ガイド*」を参照してください。この資料は、Configuration Manager のヘルプ・メニューから利用できます。

IBM Cognos BI インストールのテスト

以下のガイドラインを使用して、IBM Cognos インストールをテストします。

- Cognos BI サーバーを停止してから再始動し、cogserver.log ファイルでエラーがあるかどうかを調べます。このファイルは Cognos インストール済み環境の logs ディレクトリーにあります。
- Cognos Content Store にデータベース表が存在することを確認します。134 前後の表があるはずです。

コンポーネントがそれぞれ異なるマシンにインストールされている分散 Cognos 環境 (例えば、Cognos BI サーバーが UNIX システム上にあり、Framework Manager が Windows マシンにインストールされている) の場合は、以下のようにします。

- Gateway がインストールされているマシンから内部ディスパッチャーと外部ディスパッチャー、および Content Manager と通信できることを検証します。ユーザー・インターフェースを持たないコンポーネントをテストするには、ブラウザーのアドレス・フィールドにコンポーネントの URI を入力します。ブラウザーに Cognos ページが表示されるはずです。
- Framework Manager を開き、プロジェクトの作成を開始します。このテストで、ログインできることを確認します。もう一度ログ・ファイルでエラーがあるかどうかを調べます。

Cognos システムへの IBM EMM 統合コンポーネントおよびレポート・モデルのインストール

IBM EMM スイートを Cognos に統合するには、以下のインストーラーが必要です。

- IBM EMM マスター・インストーラー。他のインストーラーを起動するには、常にこのインストーラーを実行します。
- Marketing Platform インストーラー。Cognos 統合コンポーネントは、このインストーラーからインストールします。

- レポート・パック・インストーラーまたはレポートを実装する対象製品のインストーラー。モデルおよびサンプル・レポートを含むレポート・アーカイブは、このインストーラーからインストールします。

インストールの実行後に、このセクションの残りの部分で説明するように、以下の構成ステップを実行します。

- IBM EMM および Cognos レポート・プロパティを Marketing Platform インターフェースで構成します。
- レポートを Cognos Connection にインポートします。
- IBM EMM 認証を使用するように Cognos を構成します。

インストール・チェックリスト: IBM Cognos 統合

以下のリストは、IBM コンポーネントおよびレポートを IBM Cognos システムにインストールして構成する方法の概要を示しています。各ステップは本セクションの後の方で詳しく説明します。

1. 『ステップ: Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手』。
2. 17 ページの『ステップ: IBM Cognos システムへのレポート・モデルおよび統合コンポーネントのインストール』。
3. 17 ページの『ステップ: IBM EMM アプリケーション・データベースに対応する IBM Cognos データ・ソースの作成』。
4. 19 ページの『オプションのステップ: E メール通知のセットアップ』。
5. 19 ページの『ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成』。
6. 20 ページの『ステップ: Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート』。
7. 21 ページの『ステップ: データ・モデルの構成および公開 (必要な場合)』。
8. 21 ページの『ステップ: レポート内の内部リンクを有効にする』。
9. 22 ページの『ステップ: データ・ソース名の確認と公開』。
10. 23 ページの『ステップ: Marketing Platform での Cognos レポート・プロパティの構成』。
11. 23 ページの『ステップ: レポート・フォルダー権限の設定』。
12. 24 ページの『ステップ: 認証を有効にしない状態での構成のテスト』。
13. 25 ページの『IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』。
14. 30 ページの『ステップ: 認証を構成した状態での構成のテスト』。

ステップ: Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手

IBM EMM システムをセットアップしたときに Marketing Platform のシステム・テーブルの JDBC データ・ソースの構成に使用した JDBC ドライバーおよび必要な関連ファイルを入手します。この章で後述するタスクで、IBM EMM 認証を使用するように Cognos を構成します。Cognos は、IBM EMM 認証を使用する場合、Marketing Platform システム・テーブルからユーザー情報を入手できるように JDBC ドライバーを必要とします。

この JDBC ドライバーは、Cognos Content Manager がインストールされているマシンの Cognos インストール済み環境にある `webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA¥lib` ディレクトリーにコピーしてください。

ステップ: IBM Cognos システムへのレポート・モデルおよび統合コンポーネントのインストール

ご使用の Cognos インストール済み環境が分散環境である場合は、どのマシンが Cognos Content Manager を実行しているかを判別して、そのマシンで IBM EMM インストーラーを実行できるようにしてください。

1. Cognos Content Manager がインストールされているマシンで、単一のディレクトリーに以下の IBM EMM インストーラーを配置します。
 - IBM EMM マスター・インストーラー
 - Marketing Platform
 - レポート・パック・インストーラーまたはレポート作成機能を実装する製品のインストーラー
2. IBM EMM マスター・インストーラーを実行して、Marketing Platform およびインストール対象のレポート・パッケージを選択します。
3. プロンプトに従い、Marketing Platform システム・テーブル・データベースの接続情報を入力します。
4. Marketing Platform インストーラーが起動して「プラットフォーム・インストール・コンポーネント (Platform Installation Components)」ウィンドウが表示されたら、「**Reports for IBM Cognos 10 BI**」オプションを選択して、その他のオプションをクリアします。
5. Marketing Platform インストーラーで JDBC ドライバーへのパスの入力を求めるプロンプトが出されたら、16 ページの『ステップ: Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手』タスク中に Cognos システムにコピーした JDBC ドライバーの完全修飾パスを入力します。
6. Marketing Platform インストーラーで IBM Cognos インストール済み環境の場所の入力を求めるプロンプトが出されたら、IBM Cognos インストール済み環境の最上位ディレクトリーを入力するか、参照します。

このフィールドで提供されるデフォルト値は、ご使用の IBM Cognos システムの実際のファイル構造に基づかない静的な値です。

7. レポート・パック・インストーラーでインストール・オプションが表示された場合、「**製品 Reports Package**」を選択して、レポート・スキーマのオプションをクリアします。

このオプションは、レポート・アーカイブを Cognos マシンにコピーします。このアーカイブは、後でインポートします。

ステップ: IBM EMM アプリケーション・データベースに対応する IBM Cognos データ・ソースの作成

IBM Cognos アプリケーションは、IBM EMM アプリケーション・データベースを表すそれぞれ専用のデータ・ソース、つまりレポートに使用されるデータのソース

を必要とします。 IBM EMM レポート・パッケージで提供される IBM Cognos データ・モデルは、以下のデータ・ソース名を使用するように構成されています。

表 1. Cognos データ・ソース

IBM EMM アプリケーション	Cognos データ・ソース名
Campaign	CampaignDS
eMessage	eMessageTrackDS
Interact	InteractDTDS (設計時データベース用) InteractRTDS (実行時データベース用) InteractLearningDS (学習データベース用)
Marketing Operations	MarketingOperationsDS
Leads	LeadsDS (データマート・テーブル用)

IBM アプリケーション・データベースに対応する Cognos データ・ソースを作成するには、以下のガイドラインを使用してください。

- Cognos Connection の「管理」セクションを使用します。
- Cognos データ・ソース・テーブル内に表示されるデフォルトのデータ・ソース名を使用します。これにより、データ・モデルを変更しなくてもよいようにすることができます。
- 選択するデータベース・タイプは、IBM アプリケーション・データベースのデータベース・タイプと一致していなければなりません。Cognos の資料およびヘルプ・トピックを使用して、データベース固有のフィールドにどのように入力するかを判別します。
- Cognos Content Store ではなく、必ず IBM EMM アプリケーション・データベースを指定してください。
- 「サインオン」セクションを構成する際に、「パスワード」オプションと「すべてのユーザー' グループで利用できるサインオンを作成」オプションを選択します。
- 「サインオン」セクションで、IBM EMM アプリケーション・データベース・ユーザーのユーザー資格情報を指定します。
- Cognos データ・ソース・テーブルを調べ、構成するレポートのデータ・モデルが必要とするすべてのデータ・ソースを作成してください。例えば、Interact 用のレポート・データは 3 つのデータベースに置かれるので、それらのデータベースごとに別々の Cognos データ・ソースを作成する必要があります。
- Campaign システムに複数のパーティションがある場合は、パーティションごとに別々のデータ・ソースを作成します。例えば、Campaign が複数パーティション用に構成されている場合は、パーティションごとに別個の Campaign データ・ソースを作成します。
- 「テスト接続」機能を使用して、各データ・ソースが正しく構成されていることを確認します。

Cognos データ・ソースの構成に関して不明な点があれば、「IBM Cognos 管理およびセキュリティ・ガイド」の『第 6 章: データ・ソースと接続』および Cognos オンライン・ヘルプを参照してください。

オプションのステップ: E メール通知のセットアップ

IBM Cognos レポートが IBM EMM インターフェースに表示される場合、ウィンドウの Cognos Viewer ツールバーには、レポートを E メール内の添付ファイルとして送信するオプションが表示されます。IBM Cognos で IBM EMM レポートを E メール添付ファイルとして送信できるようにするには、Cognos Configuration で通知を構成します。

以下のガイドラインを使用して、IBM EMM アプリケーション・レポートの E メール通知を設定します。

以下の情報を入手してください。

- SMTP サーバーのホスト名または IP アドレス
- そのサーバーのアカウントのユーザー名およびパスワード
- デフォルトの送信者の E メールアドレス

Cognos Configuration で、「データ・アクセス」>「通知」を選択して、以下の操作を行います。

- **host:port** または **IPAddress:port** という形式で、ホスト名または IP アドレスにポートを付けて、SMTP メール・サーバーを指定します。例えば、serverX:25 または 192.168.1.101:25 と指定します。（通常、デフォルトの SMTP ポートは 25 です。）
- アカウントのユーザー名とパスワードを設定するには、「値」列をクリックし、鉛筆アイコンをクリックして「値」ダイアログ・ボックスを開きます。
- user@company.com というパターンを使用してデフォルトの送信者を指定します。

E メール通知の構成について疑問がある場合は、Cognos Connection オンライン・ヘルプを参照してください。

ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成

IBM Cognos ファイアウォールを構成するには、有効なドメインまたはホストとして IBM EMM システムを指定します。

1. Cognos Configuration で、「セキュリティ」>「IBM Cognos Application Firewall」を選択します。
2. 有効なドメインまたはホストのプロパティに、Marketing Platform が稼働しているシステムの完全修飾マシン・ホスト名（ドメインおよびポートを含む）を入力します。

重要: 分散 IBM EMM 環境の場合は、Cognos レポートをレンダリングする IBM EMM 製品（例えば、ダッシュボードを備えた Marketing Platform や、Campaign、Marketing Operations）がインストールされているどのマシンについても、この操作を行う必要があります。

以下に例を示します。

serverXYZ.mycompany.com:7001

3. 構成を保存します。

4. IBM Cognos サービスを再始動します。

ステップ: Cognos Connection へのレポート・フォルダーのインポート

IBM EMM アプリケーション・レポートは、レポート・パッケージ・インストーラーによって IBM Cognos マシンにコピーされる圧縮 (.zip) ファイルに入っています。この手順のガイドラインを使用して、レポートの圧縮ファイルを Cognos Connection にインポートします。

1. IBM Cognos マシン上のレポート・パッケージ・インストール済み環境の Cognosnn ディレクトリに移動します。ここで、nn はバージョン番号を示します。
2. 圧縮レポート・アーカイブ・ファイル (例えば、IBM EMM Reports for Campaign.zip) を、Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリにコピーします。分散 IBM Cognos 環境では、これは Content Manager を実行しているシステム上にあります。

デフォルトの場所は IBM Cognos インストール済み環境の下の配置ディレクトリで、Cognos Content Manager と一緒にインストールされた Cognos Configuration ツールで指定されます。例えば、cognos%deployment です。

3. Cognos マシンでレポート・パッケージ・インストール済み環境の下の Cognosnn¥ProductNameModel サブディレクトリを見つけます。
4. サブディレクトリ全体を、Cognos Framework Manager を実行しているシステム上の、Framework Manager がアクセスできる任意の場所にコピーします。
5. Cognos Connection を開きます。
6. 「ようこそ」ページで、「Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)」をクリックします。

「ようこそ」ページがオフになっている場合は、Cognos Connection ユーザー設定でオンに戻してください。

7. 「構成」タブをクリックします。
8. 「コンテンツ管理」を選択します。



9. ツールバーで  (「インポートの新規作成」) をクリックします。
10. 「インポートの新規作成ウィザード」で一連の操作を行う際には、以下のガイドラインに従ってください。
 - a. 前の手順でコピーしたレポート・アーカイブを選択します。
 - b. パブリック・フォルダーの内容リストで、パッケージそのもの (青のフォルダー) を含む、すべてのオプションを選択します。
 - c. まだユーザーにパッケージおよびそのエントリーにアクセスさせない場合は、「インポート後に無効化」を選択します。IBM EMM アプリケーション・ユーザーがレポートを使用できるようにする前にそのレポートをテストする場合、この選択を行います。

ステップ: データ・モデルの構成および公開 (必要な場合)

17 ページの『ステップ: IBM EMM アプリケーション・データベースに対応する IBM Cognos データ・ソースの作成』で、IBM EMM システム・テーブルを Cognos データ・ソースとしてセットアップしました。使用したデータ・ソース・ログインが IBM EMM アプリケーション・システム・テーブルの所有者でない場合は、ここで説明するステップを実行してください。使用したデータ・ソース・ログインが IBM EMM アプリケーション・システム・テーブルを所有している場合は、このステップをスキップできます。

1. レポート・パッケージのインストール済み環境で、Model ディレクトリーを見つけてください。この Model ディレクトリー内のすべてのファイルを、Cognos Framework Manager インストール・ディレクトリーの下の任意の場所にコピーします。これらのファイルは、アプリケーション固有のデータ・モデルを構成します。
2. Framework Manager でプロジェクト・ファイルを開きます。プロジェクト・ファイルには拡張子 .cpf が付いていて、ファイル名に IBM EMM アプリケーション名が含まれています (例えば、*ProductNameModel.cpf*)。
3. アプリケーションのデータ・モデルを開き、以下のようになります。
 - a. プロジェクト・ビューアーで「データ・ソース」を展開します。
 - b. アプリケーションのデータ・ソースをクリックします。
 - c. 次の表の説明に従って、データ・ソースを更新します。

データベース	フィールド
SQL Server	• カタログ: IBM EMM アプリケーション・データベースの名前を入力します。 • スキーマ: IBM EMM アプリケーション・データベース・スキーマの名前を入力します。例えば、dbo と入力します。
Oracle	• スキーマ: IBM EMM アプリケーション・データベース・スキーマの名前を入力します。
DB2	• スキーマ: IBM EMM アプリケーション・データベース・スキーマの名前を入力します。

4. パッケージを保存し、再公開します。

IBM Cognos でのパッケージの公開に関する基本手順が必要な場合は、「Cognos Framework Manager ユーザー・ガイド」を参照してください。

ステップ: レポート内の内部リンクを有効にする

IBM EMM アプリケーション・レポートには、標準リンクがあります。これらのリンクが適切に機能できるようにするには、19 ページの『ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成』の説明に従って Cognos ファイアウォールを構成する必要があります。さらに、以下のようにして、IBM EMM アプリケーション・レポートの Cognos データ・モデル (.cpf ファイル) 内のリダイレクト URL を構成する必要があります。

注: このステップは、eMessage レポートの場合は不要です。

1. Cognos Framework Manager から、Framework Manager ディレクトリー構造にコピーした `<productName>Model` サブディレクトリーを参照し、`.cpf` ファイルを選択します。例えば、`CampaignModel.cpf` を選択します。
2. 「パラメーター・マップ」>「環境」を選択します。
3. 「環境」を右クリックし、「定義の編集」を選択します。
4. 「リダイレクト URL (Redirect URL)」セクションで、「値」フィールドを選択します。サーバー名とポート番号を IBM EMM システムに合わせて編集し、残りの URL はそのままにしておきます。規則として、ホスト名にはドメイン・ネームが含まれます。

例えば、Campaign の場合は次のようになります。

```
http://serverX.ABCompany.com:7001/Campaign/
redirectToSummary.do?external=true&
```

例えば、Marketing Operations の場合は次のようになります。

```
http://serverX.ABCompany.com:7001/plan/callback.jsp?
```

5. モデルを保存し、パッケージを公開します。
 - a. ナビゲーション・ツリーから、モデルの「パッケージ」ノードを展開します。
 - b. パッケージ・インスタンスを右クリックし、「パッケージを発行」を選択します。

ステップ: データ・ソース名の確認と公開

モデルを Framework Manager から Cognos Content Store に公開する際、モデルでレポートのデータ・ソースとして指定する名前は、Cognos Connection で作成したデータ・ソースの名前と一致する必要があります。17 ページの『ステップ: IBM EMM アプリケーション・データベースに対応する IBM Cognos データ・ソースの作成』で説明されているデフォルトのデータ・ソース名を使用した場合、データ・ソース名は一致します。一致しない場合、モデル内のデータ・ソースの名前を変更する必要があります。

1. Cognos Connection で、作成したデータ・ソースの名前を判別します。
2. Framework Manager で、「プロジェクトを開く」オプションを選択します。
3. Framework Manager ディレクトリー構造にコピーした `<productName>Model` サブディレクトリーを参照し、`.cpf` ファイルを選択します。例えば、`CampaignModel.cpf` を選択します。
4. 「データ・ソース」項目を展開し、データ・ソースの名前を調べます。それらが、Cognos Connection で付けた名前と一致することを確認します。
 - a. 一致する場合は、この手順は終了です。
 - b. 一致しない場合は、データ・ソース・インスタンスを選択し、「プロパティ」セクションで名前を編集します。変更を保存します。
5. パッケージを Cognos Content Store に公開します。

ステップ: Marketing Platform での Cognos レポート・プロパティの構成

IBM EMM には、レポート作成を構成するためのプロパティのセットがいくつかあります。その中には、Marketing Platform のレポート作成コンポーネントのパラメーター値を指定するものがあります。これらのプロパティは、7 ページの『ステップ: ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成』の説明に従って、これまでに既に設定しました。

その他に、IBM Cognos システムの URL やその他のシステム・パラメーターを指定するプロパティがあります。この手順では、これらの Cognos プロパティの設定方法を説明します。

1. platform_admin ユーザー、または ReportsSystem の役割を持つ別のユーザーとして IBM EMM にログインします。
2. 「設定」>「構成」>「レポート」>「統合」>「Cognos バージョン」を選択します。
3. 「有効化」プロパティの値を True に設定します。
4. 「ドメイン」プロパティの値を、IBM Cognos システムが稼働している会社のドメインの名前に設定します。

例: xyzCompany.com

会社でサブドメインを使用している場合は、このフィールドの値に会社のドメインとサブドメインが含まれている必要があります。

5. 「ポータル URL」プロパティの値を、Cognos Connection ポータルの URL に設定します。（「ドメイン」プロパティで指定した）ドメインおよびサブドメインを含む完全修飾ホスト名を使用してください。

例: <http://MyCognosServer.xyzCompany.com/cognos10/cgi-bin/cognos.cgi>

この URL は Cognos 構成ユーティリティの「ローカル構成」>「環境」の下に見つかります。

6. 「ディスパッチ URL」フィールドで、1 次 Cognos Content Manager ディスパッチャーの URL を指定します。（「ドメイン」プロパティで指定した）ドメインおよびサブドメインを含む完全修飾ホスト名を使用してください。

例: <http://MyCognosServer.xyzCompany.com:9300/p2pd/servlet/dispatch>

この URL は Cognos 構成ユーティリティの「ローカル構成」>「環境」の下に見つかります。

7. 現時点では、「認証モード」の設定を anonymous のままにします。
8. 設定を保存します。

ステップ: レポート・フォルダー権限の設定

「ユーザーごとに認証 (authenticated per user)」モードを使用するようにシステムを構成した場合、適切な IBM ユーザーが IBM EMM アプリケーションからレポートを実行できることを確認してください。これを行う最も簡単な方法は、24 ページの

『レポート・フォルダー権限の構成』の説明に従って、デフォルトの ReportsUser 役割を適切なユーザー・グループまたはユーザーに割り当てることです。

レポート・フォルダー権限の構成

「分析」メニュー項目とオブジェクト・タイプ (例えばキャンペーンやオファー) の「分析」タブへのアクセスを制御することに加えて、レポートのグループの権限を、それが物理的に保管される IBM Cognos システム上のフォルダー構造に基づいて構成することができます。

「レポート・フォルダー権限の同期」を実行する前に、以下の条件が整っていることを確認する必要があります。

- レポート作成が構成後に有効になっている。
- レポートが構成される Cognos サーバーが稼働中である。
- 1. **ReportSystem** 役割を持つ Campaign 管理者としてログインします。
- 2. 「設定」>「レポート・フォルダーの権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)」を選択します。

システムは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システムにあるフォルダーの名前を取得します。(これは、いずれかのパーティションのフォルダー権限を構成することに決めた場合、それをすべてのパーティションに対して構成する必要があることを意味します。)

- 3. 「設定」>「ユーザーの役割と権限」>「キャンペーン」と選択します。
- 4. 「キャンペーン」ノードの下で最初のパーティションを選択します。
- 5. 「役割の追加と権限の割り当て (Add Roles and Assign Permissions)」を選択します。
- 6. 「権限の保存および編集」を選択します。
- 7. 「権限」フォームで、「レポート」を展開します。

「レポート」エントリーは、「レポート・フォルダー権限の同期」オプションを初めて実行するまでは存在しません。

- 8. 「パフォーマンス・レポート」の権限を、適切な役割に付与します。
- 9. レポート・フォルダーのアクセス設定を適切に構成し、変更を保存します。
- 10. 各パーティションについて、ステップ 4 から 8 を繰り返し実行します。

ステップ: 認証を有効にしない状態での構成のテスト

レポートがインストールされて構成された後、認証を有効にする前に、いくつかのレポートを実行してセットアップをテストします。

- 1. IBM EMM が実行されていること、および IBM Cognos BI サービスが実行されていることを確認します。
- 2. アプリケーション・アクセスを持つユーザーとして IBM EMM にログインし、いくつかのデータを作成します。(そうしないと、レポートに表示されるものはありません)。
- 3. Cognos Connection を開きます。

4. インポートしたレポート・フォルダーに移動し、基本レポートへのリンクをクリックします。例えば、Campaign の場合、「共有フォルダー」>「キャンペーン」>「キャンペーン」>「キャンペーン・サマリー」を選択します。

レポートが失敗する場合、IBM EMM アプリケーション・データベース用の Cognos データ・ソースが正しく構成されていることを確認してください。 17 ページの『ステップ: IBM EMM アプリケーション・データベースに対応する IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照してください。

5. レポート内のリンクをクリックします。

レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 21 ページの『ステップ: レポート内の内部リンクを有効にする』を参照してください。

6. アプリケーション・アクセスを持つユーザーとして IBM EMM アプリケーションにログインし、「分析」ページに移動します。

IBM EMM アプリケーションの URL を指定する際、会社のドメイン (必要に応じてサブドメインも) を含めた完全修飾ホスト名を使用してください。以下に例を示します。

`http://serverX.ABCompany.com:7001/unica`

7. Cognos でテストしたものと同一レポートへのリンクをクリックします。

レポートを表示できない場合には、おそらく IBM Cognos ファイアウォールが正しく構成されていません。 19 ページの『ステップ: IBM Cognos アプリケーションのファイアウォールの構成』を参照してください。

8. レポート内のリンクをクリックします。

レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 21 ページの『ステップ: レポート内の内部リンクを有効にする』を参照してください。

9. 個々の項目を開き、「分析」タブをクリックして、レポートが正しいことを確認します。

IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する

IBM EMM Authentication Provider は、Cognos アプリケーションがスイート内の別の IBM EMM アプリケーションであるかのように IBM EMM 認証を使用して IBM EMM システムと通信できるようにします。

このセクションの手順を開始する前に、構成する予定の認証モード (「authenticated」または「authenticated per user」) が分かっているようにしておいてください。さらに情報が必要であれば、『ステップ: 構成する認証モードの決定』を参照してください。

ステップ: 構成する認証モードの決定

IBM EMM Authentication Provider はコンポーネントの 1 つであり、IBM Cognos Business Intelligence システムを IBM EMM と統合します。このコンポーネント

は、IBM Cognos BI アプリケーションがスイート内の別の IBM EMM アプリケーションであるかのように IBM 認証を使用して IBM EMM システムと通信できるようにします。

「anonymous」、「authenticated」、「authenticated per user」の 3 つの認証オプションがあります。

- **anonymous** は、認証を無効にすることを意味します。このモードは、認証設定という面倒な作業なしで構成をテストする場合に使用します。
- **authenticated** は、IBM EMM システムと IBM Cognos システムの間の通信がマシン・レベルで保護されることを意味します。1 人のシステム・ユーザーを構成し、そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。慣例的に、このユーザーには「cognos_admin」という名前が付きます。
- **authenticated per user** は、個々のユーザー資格情報をシステムが評価することを意味します。

どの認証モードを構成することが必要かを決定してください。これらのオプションについて詳しくは、56 ページの『レポートおよびセキュリティについて』を参照してください。

ステップ: 必要に応じてレポート・システム・ユーザーを作成する

注: 認証モードを「ユーザーごとに認証」に設定している場合は、この手順をスキップし、27 ページの『ステップ: IBM EMM での Cognos 認証プロパティの構成』に進みます。

レポート・システム・ユーザーを作成する際には、ユーザーを作成してから、IBM Cognos BI のログイン情報を保持するユーザーにデータ・ソース資格情報を追加します。この方法で、同じユーザーに対して 2 つのログイン・セットを次のように構成します。

- IBM システム用のログイン・セット: レポート・システム・ユーザー (cognos_admin) に指定されたユーザー名とパスワード
 - IBM Cognos BI 用のログイン・セット: レポート・システム・ユーザーのデータ・ソース資格情報として指定されたユーザー名とパスワード
1. IBM EMM に platform_admin ユーザーとしてログインします。
 2. 「設定」>「ユーザー」を選択します。
 3. 以下の属性を持つ IBM ユーザーを作成します。
 - a. ユーザー名: cognos_admin
 - b. パスワード: admin
 4. このユーザー用に、以下の属性を持つ新規データ・ソースを作成します。
 - a. データ・ソース: Cognos
 - b. データ・ソース・ログオン (Data Source Logon): cognos_admin

データ・ソースのユーザー名は、ステップ 3 で作成した IBM ユーザーのユーザー名と正確に一致するようにしてください。

- c. データ・ソース・パスワード: admin
5. レポート・システム役割をユーザーに追加します。

6. IBM EMM でユーザー・パスワードの有効期限切れが構成されている場合、ログアウトし、レポート・システム・ユーザー (cognos_admin) として再びログインします。このステップを実行すると、後のタスクでこのユーザーとして IBM Cognos にログインする前に、必ず IBM セキュリティーによる「パスワードの変更」チャレンジと対話して、パスワードを再設定することになります。

ステップ: IBM EMM での Cognos 認証プロパティの構成

1. IBM EMM に platform_admin ユーザーとしてログインします。
2. 「設定」>「構成」を選択します。
3. 「レポート」>「統合」>「Cognos version」を展開します。
4. **authenticated** または **authenticatedPerUser** のうち、ご使用のシステムに適する方を選択することによって、「認証モード」プロパティの値を設定します。
5. 「authenticated」の場合のみ。「認証ユーザー名」および「認証データ・ソース名」フィールドの値が、前のタスク（26 ページの『ステップ: 必要に応じてレポート・システム・ユーザーを作成する』）で作成したユーザーおよびデータ・ソースに一致することを確認します。
6. 「フォーム認証を有効にする」プロパティの値を設定します。

この設定値は、Cookie の代わりにフォームに基づく認証を IBM EMM セキュリティーで使用することを示します。以下のいずれかが該当する場合に、このプロパティを True に設定します。

- IBM EMM が Cognos アプリケーションと同じネットワーク・ドメインにインストールされていない場合。
- IBM EMM アプリケーションと Cognos インストール済み環境の両方が同じマシン上にあっても、Cognos が、完全修飾ホスト名 (IBM EMM アプリケーションへのアクセスに使用される) の代わりに IP アドレス (同じネットワーク・ドメイン内) を使用してアクセスされる場合。

ただし、値が True の場合、Cognos Connection へのログイン・プロセスは、ログイン名とパスワードを平文で渡すため、Cognos と IBM EMM が SSL 通信を使用するように構成されていない場合、安全ではありません。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、Cognos と IBM EMM は、同じネットワーク・ドメインにインストールする必要があります。

なお、「フォーム認証を有効にする」プロパティを True に設定した場合は、「認証モード」プロパティが自動的に、「**authenticated**」に設定されているように動作する点に注意してください。それで、26 ページの『ステップ: 必要に応じてレポート・システム・ユーザーを作成する』に説明されている、このモードに必要なステップを実行する必要があります。

7. 新しい設定を保存します。
8. 「**authenticatedPeruser**」の場合のみ。デフォルトの asm_admin ユーザーに ReportUser 役割を割り当てます。レポートのテストを可能にするために、このステップを実行します (IBM EMM アプリケーションとレポート・データの両方に

アクセスできるユーザーが必要です)。 platform_admin ユーザーは IBM EMM アプリケーション機能へのアクセス権限を持っていません。

ステップ: IBM EMM Authentication Provider を使用するための IBM Cognos の構成

このタスクでは、Cognos Configuration および Cognos Connection アプリケーションを使用して、IBM EMM Authentication Provider を使用するように IBM Cognos BI アプリケーションを構成します。

1. Cognos Content Manager を実行しているマシンで、Cognos Configuration を開きます。
2. 「ローカル構成」>「セキュリティ」>「認証」を選択します。
3. 「認証」を右クリックし、「リソースの新規作成」>「ネームスペース」を選択します。
4. フィールドに以下のように入力して、「OK」をクリックします。
 - a. 名前: Unica
 - b. タイプ: カスタム Java プロバイダー
5. 「リソース・プロパティ」ページで、以下のようにフィールドに入力し、変更内容を保存します。
 - a. ネームスペース ID: Unica
 - b. Java クラス名: com.unica.report.adapter.UnicaAuthenticationProvider
6. IBM Cognos BI サービスを停止し、再始動します。

Windows システムでは、Cognos インターフェースにおいて、サービスが停止していないのに停止していると示される場合があります。サービスを確実に停止させるには、Windows 管理ツールを使用してサービスを停止します。

7. 「ローカル構成」>「セキュリティ」>「認証」の下で、「Unica」を右クリックして「テスト」を選択します。

Cognos Connection でエラーが表示される場合、Cognos インストール済み環境の logs ディレクトリーにある cogserver.log ファイルを調べて、問題を判別してください。

8. IBM EMM Authentication Provider が正しく構成されていることを検査するために、以下のように Cognos Connection にログインします。
 - IBM EMM 構成プロパティで Cognos 認証モードを「**authenticated**」に設定した場合、cognos_admin (レポート・システム) ユーザーとしてログインします。
 - IBM EMM 構成プロパティで認証モードを「**authenticatedPerUser**」に設定した場合、asm_admin ユーザーとしてログインします。

IBM Cognos が「サード・パーティー・プロバイダーにより回復不能な例外が返されました」というエラーが表示する場合、そのエラー・メッセージを展開してください。「資格情報が無効です」と示されている場合、ユーザー資格情報の入力間違いを示します。再試行してください。しかし、「パスワードが期限切れ」という内容のメッセージが表示された場合は、IBM EMM のパスワードの有効期限が切れています。レポート作成システム・ユーザーと

して IBM EMM アプリケーションにログインし、パスワードを再設定してください。その後に、再度 Cognos Connection へのログインを試みてください。

それでも Cognos Connection にログインできない場合、Cognos インストール済み環境の logs ディレクトリーにある cogserver.log ファイルを調べて、問題を判別してください。

9. Cognos Connection に正常にログインすることができたら、再度 Cognos Configuration を開きます。
10. 「ローカル設定」>「セキュリティ」>「認証」>「Cognos」を選択します。
11. 「匿名アクセスを許可」を false に設定することにより、IBM Cognos BI への匿名アクセスを無効にします。
12. 変更を保存します。
13. IBM Cognos サービスを停止し、再始動します。

IBM Cognos サービスは、認証プロバイダーと正常に通信できない場合、開始できません。IBM Cognos サービスを開始できない場合は、この手順のステップを注意して見直して、構成を確認してください。

14. 分散システムの場合のみ。フェイルオーバー・サポートのためにバックアップ Content Manager が IBM Cognos で構成されている場合、Content Manager がインストールされているすべてのサーバーでこの手順を繰り返してください。

この時点で、Cognos システム上のアプリケーションにログインしているどのユーザーも、IBM EMM によって認証されているはずです。加えて、ログオンおよびセキュリティ管理タスク用の認証ネームスペース「Unica」が IBM Cognos ユーザー・インターフェースに表示されるようになりました。

IBM Marketing Platform を LDAP サーバーまたは Web アクセス制御システムと統合する際に必要な構成

IBM Marketing Platform を LDAP サーバー、Windows Active Directory (Windows 統合ログイン)、または Web アクセス制御システム (Tivoli® や SiteMinder など) と統合する際、以下の追加構成を実行する必要があります。

1. Cognos Configuration で、Unica® 認証ネームスペースについて、フラグ「認証で選択可能」を「false」に設定します。

このフラグを「false」に設定すると、Cognos Connection と Cognos Administration は、認証の目的で Unica ネームスペースにアクセスできません。しかし、IBM EMM アプリケーションは、引き続き Cognos SDK API を介して Unica ネームスペースにアクセスできます (ユーザーが IBM EMM アプリケーション内から Cognos レポートを表示する場合など)。

2. Cognos URL への認証アクセスが必要な場合は、以下を実行します。
 - a. Cognos Configuration で、バンドルされた適切な認証プロバイダーを使用して、ネームスペースを構成します。
 - b. 「認証で選択可能」を「true」に設定します。
 - c. この新規ネームスペースを Cognos URL 用に使用します。

ステップ: 認証を構成した状態での構成のテスト

IBM 認証を使用するように IBM Cognos を構成した後で、システムを再度テストします。

1. IBM EMM が実行されていること、および IBM Cognos サービスが実行されていることを確認します。
2. Cognos Connection を開きます。
3. インポートしたレポート・フォルダーに移動し、基本レポートへのリンクをクリックします。例えば、Campaign の場合、「共有フォルダー」>「キャンペーン」>「キャンペーン」>「キャンペーン・サマリー」を選択します。

レポートが失敗する場合、IBM アプリケーション・データベース用の IBM Cognos データ・ソースが正しく構成されていることを確認してください。 17 ページの『ステップ: IBM EMM アプリケーション・データベースに対応する IBM Cognos データ・ソースの作成』を参照してください。

4. レポート内のリンクをクリックします。

レポートの内部リンクが機能しない場合、リダイレクト URL が正しく構成されていません。 21 ページの『ステップ: レポート内の内部リンクを有効にする』を参照してください。

5. IBM EMM にログインし、「分析」ページに移動します。

IBM アプリケーションの URL を指定する際、会社のドメイン (必要に応じてサブドメインも) を含めた完全修飾ホスト名を使用してください。以下に例を示します。

`http://serverX.ABCompany.com:7001/unica`

6. IBM Cognos でテストしたものと同一レポートへのリンクをクリックします。

セキュリティに関するエラー・メッセージが表示される場合、おそらく IBM Authentication Provider が正しく構成されていません。 25 ページの『IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』を参照してください。

認証のために資格情報を入力するようプロンプトが出される場合、おそらく URL のいずれかでドメイン・ネームが欠落しています。管理権限を持つユーザーとして IBM EMM にログインしてください。次に、「設定」>「構成」を選択し、以下のプロパティ内の URL に、ドメイン・ネームと、適切なサブドメイン・ネームが含まれていることを確認してください。

- 「レポート」>「統合」>「Cognos」>「ポータル URL」および「ディスパッチ URL」
- IBM アプリケーションの URL プロパティ (例えば 「キャンペーン」>「ナビゲーション」>「サーバー URL」)

7. レポート内のリンクをクリックします。

認証のために資格情報を入力するようプロンプトが出される場合、おそらく URL のいずれかでドメイン・ネームが欠落しています。

8. 個々の項目を開き、「分析」タブをクリックして、レポートが正しいことを確認します。

セキュリティーに関するエラー・メッセージが表示される場合、おそらく IBM Application Provider が正しく構成されていません。

レポートの次のステップ

この時点では、レポートは適切に機能しており、サンプル・レポートはデフォルトの状態にあります。 IBM EMM アプリケーションの実際のデータ設計 (キャンペーン・コード、カスタム・キャンペーン属性、レスポンス・メトリックなど) の構成が終了したら、レポートまたはレポート・スキーマをカスタマイズする必要があるため、レポートに戻ります。

- Campaign または Interact を使用している場合、本書の『レポート作成の構成』を参照してください。
- Marketing Operations を使用している場合、「*IBM Marketing Operations* 管理者ガイド」にある『レポートの使用』を参照してください。
- eMessage のレポートを設定している場合、レポートの構成は完了です。

第 2 章 レポートのアップグレード

IBM EMM では、レポートは Marketing Platform が提供するコンポーネントの 1 つです。

アップグレードする際、インストーラーおよびデータベース・スクリプトによってレポート機能のアップグレードも行われます。その際、Campaign および Interact レポート・スキーマの構成設定は保持されます。この章では、その他のレポート・コンポーネントのアップグレードおよび構成方法について説明します。

アップグレード・シナリオ

ソース・バージョン	アップグレード・パス
7.5.1 より前	IBM EMM アプリケーションを 7.5.1 より前のバージョンからアップグレードする場合、レポートのためのアップグレード・パスは存在しません。代わりに、1 ページの『第 1 章 レポートのインストール』を参照してください。
7.5.1	IBM EMM アプリケーションを 7.5.1 バージョンからアップグレードする場合、以下のステップを実行します。 『レポート、すべてのサポートされているバージョン、すべての製品のアップグレードのための初期ステップ』 39 ページの『バージョン 7.5.1 からのレポートのアップグレード』 注: eMessage にはバージョン 7.5.x からバージョン 8.x 以降へのアップグレード・パスが存在しないため、eMessage レポートのためのアップグレード・パスも存在しません。
8.x	IBM EMM アプリケーションを 8.x バージョンからアップグレードする場合、以下で説明されているステップを実行します。 『レポート、すべてのサポートされているバージョン、すべての製品のアップグレードのための初期ステップ』 50 ページの『バージョン 8.x からのレポートのアップグレード』

レポート、すべてのサポートされているバージョン、すべての製品のアップグレードのための初期ステップ

レポートのアップグレードを開始するには、このセクションの準備タスクを完了してください。アップグレード元の製品またはバージョンに関係なく、これらのステップを実行します。

ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーの存在の確認

バージョン 7.x からアップグレードする場合、レポートに関して作業するために適切な権限を持つ IBM EMM ユーザーを構成する必要があります。8.x からアップグレードする場合、このユーザーはおそらく既に存在しています。

レポート作成を行うこのユーザーを構成する必要がある場合には、4 ページの『ステップ: ReportsSystem 役割を持つユーザーのセットアップ (必要な場合)』の説明を参照してください。

ステップ: 必要に応じて、IBM Cognos BI をアップグレードする

必要であれば、インストールするレポート・パックをサポートするバージョンに IBM Cognos BI をアップグレードします。

このタスクのヘルプについては、IBM Cognos BI の資料を参照してください。

Cognos のアップグレード後、本書のインストールに関する章で説明されている Cognos 構成タスクを実行してください。

ステップ: Cognos モデルおよびレポート・アーカイブのバックアップ

IBM Cognos BI システムで、以下のタスクを実行します。

- モデル・サブディレクトリーのバックアップ・コピーを作成します。つまり、IBM EMM レポート・パッケージ・インストーラーによってインストールされたアプリケーション・モデルを見つけ、モデル・サブディレクトリー全体をコピーしてバックアップを作成します。
- Cognos Connection の配置仕様エクスポート機能を使用して、アプリケーションのレポート・アーカイブのバックアップを作成します。Content Store 全体をエクスポートします。
- Cognos ユーザー・インターフェースから、古いモデルおよびフォルダーを削除します。これらは、ファイル・ディレクトリー構造や Cognos Framework Manager から削除しないでください。

テーブルを削除する SQL の生成および製品データベースでの SQL の実行

このステップでは、レポート SQL ジェネレーターを使用して、drop table SQL コマンドを生成し、それらを該当する製品システムのテーブル・データベースに対して実行します。古い SQL drop ステートメントを生成および実行するには、レポート・スキーマをアップグレードする前にこれを行います。

1. IBM EMM に platform_admin ユーザー (または「レポート SQL ジェネレーター」メニュー項目へのアクセス権限を持つ別のユーザー) としてログインします。
2. 前のステップで作成した JDBC データ・ソースにデフォルトの JNDI 名を使用しなかった場合のみ、以下を行います。
 - a. 「設定 | 構成 | レポート | スキーマ」＜製品名＞」を選択します。
 - b. 前のステップで JDBC 接続に付けた JNDI 名に対応する JNDI プロパティのデフォルト値を変更します。
3. 「設定 | レポート SQL ジェネレーター」を選択します。
4. 「製品」フィールドで、適切な IBM アプリケーションを選択します。
5. 「スキーマ」フィールドで 1 つ以上のレポート・スキーマを選択します。
6. 「データベース・タイプ」を選択します。

7. 「生成タイプ」フィールドで、適切なオプション（ビュー、実体化ビュー、またはテーブル）を選択します。

「データベース・タイプ」が MS SQL Server に設定されている場合、実体化ビューというオプションはありません。

JNDI データ・ソース名が正しくない場合または構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成する SQL スクリプトを検証できません。

8. 「Drop 文を生成しますか?」が「はい」に設定されていることを確認します。
9. (オプション) 生成される SQL を調べるには、「生成」をクリックします。
SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ブラウザー・ウィンドウにそのスクリプトが表示されます。
10. 「ダウンロード」をクリックします。

SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ファイルを保存する場所の指定を求めるプロンプトが出されます。「スキーマ」フィールドから単一のレポート・スキーマを選択した場合、スクリプト名はスキーマの名前と一致します（例えば eMessage_Mailing_Performance.sql）。複数のレポート・スキーマを選択すると、スクリプト名には製品名のみ（Campaign.sql など）が使用されます。名前の詳細なリストについては、8 ページの『データソース別の SQL スクリプト』を参照してください。

11. スクリプトを保存する場所を指定します。ファイルの名前を変更する場合は、必ず、選択したスキーマを明確に示すものを使用してください。次に、「保存」をクリックします。
12. 生成する必要があるテーブル削除スクリプトごとにステップ 5 から 12 を繰り返します。

注: Interact レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

スクリプトの検証を無効化することが必要な場合があります。例えば、おそらく Marketing Platform は IBM アプリケーション・データベースに接続できないものの、とにかくスクリプトは生成する場合などです。検証を無効にするには、データ・ソース・フィールドからデータ・ソース名を消去します（上記ステップ 3 を参照）。スクリプトを生成する際に、データ・ソースに接続できないという警告を SQL ジェネレーターが表示しますが、それでも SQL スクリプトは生成されます。

13. テーブル削除 SQL を、製品のシステム・テーブル・データベースで実行します。この作業を、レポートをアップグレードしている製品ごとに繰り返します。

ステップ: Marketing Platform でのレポート・スキーマのアップグレード

IBM EMM マスター・インストーラーをレポート・バック・インストーラーと共に実行し、レポート・スキーマおよびレポート統合構成プロパティをアップグレードする必要があります。

アップグレードのこの工程を実行するには、Marketing Platform がインストールされているマシン上で IBM EMM マスター・インストーラーと該当するレポート・パッケージ・インストーラーを実行し、「IBM EMM 製品 レポート・スキーマ」インストール・オプションを選択します。

アップグレードが実行されたことを検証する方法

アップグレードが実行されたかどうかを検証するには、以下のステップを実行します。

1. IBM EMM システムに **platform_admin** ユーザーとしてログインします。
2. 「設定」>「構成」を選択します。
3. 「レポート」>「スキーマ」>「<製品名>」を展開します。

アプリケーションのスキーマ構成カテゴリーがアップグレードされなかった場合、Marketing Platform でレポートはまだアップグレードされていません。

注: Marketing Operations をアップグレードする場合、このステップをスキップしてください (Marketing Operations にはレポート・スキーマがありません)。

4. 「レポート」>「統合」を展開します。

スキーマ構成カテゴリーがアップグレードされていて、使用している現行レポート・インストールが 8.6.0 より前である場合、Cognos 10 構成の新しいカテゴリーが表示されます。「Cognos 8」カテゴリーは無効になっていますが、Cognos 10 の構成プロパティの設定を支援するために、参照の目的で保持されています。レポートのアップグレードを完全に構成およびテストした後、「カテゴリーの削除」リンクを使用して、Cognos 8 構成カテゴリーを削除してください。

ステップ: Marketing Platform でのレポート・テンプレートのアップグレード

注: Marketing Operations をアップグレードしている場合、このステップをスキップしてください :Marketing Operations にはレポート・スキーマがありません。

レポート・パック・インストーラーを実行した後で、以下のステップを実行します。

1. Unica¥製品ReportsPack¥schema ディレクトリーにナビゲートして、**templates_sql_load.sql** スクリプトを見つけ、そのスクリプトを Marketing Platform システム・テーブル・データベースで実行します。
2. Marketing Platform が実行中であることを確認します。
3. 管理者特権を持つユーザーとして IBM EMM にログインします。
4. 「設定」>「ユーザー」の下で、自分に「**ReportsSystem**」役割を付与します。その後、ログアウトして、再びログインします。
5. Campaignの場合のみ。

新規キャンペーン属性を追加するためのデータベース・スキーマは Campaign 8.0.0 で変更されています。そのため、レポート・スキーマのカスタマイズに追加のキャンペーン属性が含まれている場合、以下を実行します。

- a. データベース管理ツールを使用して、UA_CampAttribute テーブルの各属性の AttributeID 列の値を判別します。
- b. IBM EMM で、「設定」>「構成」の順に選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・カスタム属性」>「カラム」>「キャンペーン」の順に展開します。
- c. このインストールで追加された既存のカスタム・キャンペーン属性を削除しますが、標準のカスタム・キャンペーン属性は削除しないでください。(標準カスタム・キャンペーン属性は、インストーラーによってアップグレードされたものです。)
- d. 削除した属性を再作成します。「属性 ID」フィールドに属性の ID を入力します。

ステップ: ルックアップ・テーブルの更新 (eMessage および Interact のみ)

このステップでは、データベース・クライアントを使用して、システム・テーブル・データベースに対していくつかのアップグレード・スクリプトを実行できます。

1. eMessage のみ。

- レポート・バック・インストール済み環境の ReportsPackCampaign¥tools ディレクトリーで、uare_lookup_create_DB_type.sql スクリプト (ここで、DB_type は Campaign のインストール済み環境用の該当するデータベース・タイプ) を見つけます。
- eMessage の 8.x バージョンからアップグレードしている場合、このスクリプトを編集して drop table ステートメントを削除してください。8.x バージョンにはテーブルが存在しないため、これは必須です。
- Campaign システム・テーブル・データベースに対して、スクリプトの該当するバージョンを実行します。

2. Interact のみ。

- レポート・バック・インストール済み環境の ReportsPackInteract¥tools ディレクトリーで、uari_lookup_create_DB_type.sql スクリプト (ここで、DB_type は Campaign のインストール済み環境用の該当するデータベース・タイプ) を見つけます。
- Interact 設計時データベースに対して、スクリプトの該当するバージョンを実行します。

ステップ: 新規 SQL の生成および製品データベースでのビューまたはテーブルのアップグレード

1. 7 ページの『ステップ: ビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成』の説明に従って、更新 SQL を生成します。
2. 以前に生成した SQL スクリプトを製品システム・テーブル・データベースに対して実行します。

3. 8 ページの『ステップ: レポート・ビューまたはテーブルの作成』で説明されているように、Campaign、eMessage、および Interact では、レポート・パックに付属の新しい SQL および SQL スクリプトを使用して、レポート・ビューまたはレポート・テーブルを作成します。

ステップ: Cognos Content Manager のマシンでのインストーラーの実行および IBM EMM 統合コンポーネントのアップグレード

ご使用の環境が Cognos の分散インストール済み環境の場合、Cognos Content Manager が実行されているマシンを判別してください。

1. Cognos Content Manager が実行されている IBM Cognos BI システムで、次の IBM EMM インストーラーを単一のディレクトリーにダウンロードまたはコピーします。
 - IBM EMM マスター・インストーラー
 - Marketing Platform インストーラー
 - IBM EMM アプリケーション・レポート・パッケージ・インストーラー
2. IBM EMM マスター・インストーラーを実行します。(Marketing Platform およびレポート・パッケージのサブインストーラーが順番に起動されます。)
3. 最初の「製品」ウィンドウで、Marketing Platform およびレポート・パッケージの両方のオプションが選択されていることを確認します。
4. 「Platform データベース接続」ウィンドウで、Marketing Platform システム・テーブルに接続するために必要な情報を指定します。
5. 「Platform インストール・コンポーネント (Platform Installation Components)」ウィンドウが表示されたら、「Reports for IBM Cognos」オプションを選択し、他のオプションをクリアします。
6. Marketing Platform インストーラーで、JDBC ドライバーへのパスの入力を求めるプロンプトが出されたら、レポートの初回インストール時に Cognos システムにコピーした JDBC ドライバーの絶対パスを入力してください。

詳しくは、16 ページの『ステップ: Marketing Platform システム・テーブル用の JDBC ドライバーの入手』を参照してください。

7. Marketing Platform インストーラーで IBM Cognos インストール済み環境の場所の入力を求めるプロンプトが出されたら、IBM Cognos インストール済み環境の最上位ディレクトリーを入力するか、参照します。

このフィールドで提供されるデフォルト値は、ご使用の IBM Cognos システムの実際のファイル構造に基づかない静的な値です。

8. レポート・パッケージ・インストーラーによってそのインストール・オプションが引き継がれて表示されたら、「IBM EMM [製品] 用の IBM Cognos パッケージ」オプションを選択し、レポート・スキーマのオプションをクリアします。このインストール・オプションにより、レポート・アーカイブが Cognos マシンにコピーされます。このアーカイブは、後ほど手動でインポートします。
9. インストーラーが終了したとき、Marketing Platform データベースの JDBC ドライバーを IBM Cognos の webapps¥p2pd¥WEB-INF¥AAA¥lib ディレクトリーにコピーします。ドライバは必ずコピーしてください。ドライバのカット・アンド・ペーストは行わないでください。

バージョン 7.5.1 からのレポートのアップグレード

33 ページの『レポート、すべてのサポートされているバージョン、すべての製品のアップグレードのための初期ステップ』で説明されているステップを実行した後、バージョン 7.5.1 から IBM EMM アプリケーションをアップグレードしている場合、このセクションのステップに従ってください。

バージョン 7.5.1 からのアップグレードについて

IBM EMM のレポート作成機能は、Affinium Reports 7.5.x の場合のように別個の Web アプリケーションで提供されることはなくなりました。

レポート・パッケージから IBM Cognos レポートのアーカイブをインストールする際、Cognos データ・モデルに対するカスタマイズを保持するアップグレード・スクリプトを実行しますが、7.5.1 レポートは新規レポートで置き換える必要があります。古いレポートの大多数は、アップグレードされた Cognos モデルと互換性がありますが、新しいレポート・パッケージには新規および拡張レポートが含まれています。また、ほとんどのパッケージにはダッシュボード・レポートも含まれています。新規または拡張レポートを取得する唯一の方法は新しいレポート・アーカイブをインストールすることで、これにより既存のレポートは上書きされます。

そのため、レポートをアップグレードする方法として、次の 2 つのオプションがあります。

- 古いレポートをバックアップし、新規レポートをインストールした後、古いレポートを参照用に使用しながらカスタマイズを再作成します。
- 古いレポートをバックアップし、新規レポートをインストールします。新規レポートを古いレポートと比較し、カスタマイズを調べます。カスタマイズされたレポートが新規データ・モデルで適切に機能することが確実な場合、古いカスタマイズされたレポートをレポート・フォルダーに再びコピーします。

7.5.1 バージョンの「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートと「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートは、手作業による修正がなければまったく機能しません。さらに、古いレポートの新規バージョンの多くに、拡張およびマイナー・バグ修正が含まれています。この章には、古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートおよび「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートを手動で修正して新規モデルで機能するようにする方法を説明する手順が含まれています。拡張またはマイナー修正を他の 7.5.1 レポートに手動で適用する方法については、この章で説明しません。それらの変更を入手するには、レポートの新規バージョンを使用する必要があります。

ステップ: 7.5.1 モデルのアップグレードおよび新しいレポートのインストール

新しいレポート・パッケージには、新しいレポート、変更されたレポート、およびダッシュボード・レポートがほとんどの IBM EMM アプリケーション用に提供されています。モデルのアップグレードは可能ですが、7.5.1 レポートをアップグレードすることはできません。その代わりに、新しいレポートをインストールした後、7.5.1 バージョンでのレポートのカスタマイズを再作成するか、以前のレポートを元のフォルダーにコピーする必要があります。

1. モデルおよび以前のレポートをバックアップしたことを確認してください。
2. IBM EMM 製品インストール済み環境の下の *ProductNameReportsPack¥CognosN* ディレクトリーにナビゲートします。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

3. レポート・アーカイブ .zip ファイル (例えば *Unica Reports for Campaign.zip*) を、Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリーにコピーします。

デフォルトの場所は、IBM EMM Cognos インストール済み環境の下の配置ディレクトリーで、これは Cognos Content Manager と共にインストールされる Cognos Configuration ツールで指定されます。

例: *cognosN¥deployment*。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

分散 IBM Cognos 環境では、これは Content Manager を実行しているシステム上にあります。

4. Reports Pack インストール・ディレクトリーと Framework Manager が異なるマシン上にある場合、Reports Pack インストール・ディレクトリーの下で *cognosN¥model* ディレクトリーを見つけて、それを Framework Manager がインストールされているマシン上のディレクトリーにコピーします。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

5. IBM EMM 製品をデフォルト・ディレクトリー (Windows の場合は *C:¥Unica*) にインストールしなかった場合にのみ、このステップの説明にしたがって、いくつかのアップグレード・スクリプトを更新する必要があります。

ここでリストされているスクリプトを更新する必要があります。更新する必要のあるスクリプトは、以下に示すように、レポート・パッケージによって異なります。

スクリプトはすべて、IBM EMM 製品のインストール済み環境の下の *ProductNameReportsPack¥cognosN¥ProductNameModel* ディレクトリーにあります。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

Campaign

- *upgrade80to81.xml*
- *upgrade81to85.xml*
- *upgrade85to86.xml*
- *upgrade86to90.xml*

eMessage

- *upgrade80to81.xml*
- *upgrade81to85.xml*
- *upgrade86to90.xml*

Interact

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml

Leads

- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml

Campaign と Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade86to90.xml

Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90_DB2.xml (DB2 データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Oracle.xml (Oracle データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Sqlserver.xml (SQL Server データベースの場合のみ)

各スクリプトで、ローカライズされた言語のバージョンのモデルが格納されているディレクトリーを指しているファイル・パスを編集して、製品のインストール済み環境の場所を反映するようにします。ユーザーが必要とするすべての言語について、この変更を行ってください。以下に例を示します。

```
install_directory\ReportsPackCampaign\cognos\N\CampaignModel\
translations\ L\ translations.txt
```

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

パス内の *L* は、以下の言語標識のいずれかを表します。

- fr
- de
- es
- it
- ja
- ko
- pt
- ru
- zh

6. Cognos Connection を開きます。

7. 「Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)」 > 「設定」 > 「コンテンツの管理」の順に選択します。



8. ツールバーの「インポートの新規作成」ボタン  をクリックし、レポート・フォルダーをインポートします。
9. Cognos Framework Manager を開いて、古いレポートに対応するプロジェクトを選択します。
10. 「プロジェクト」 > 「スクリプトの実行」を選択します。
11. 新しいバージョンから古いレポートに対して以下のスクリプトを実行します。

ここでリストされているスクリプトを実行する必要があります。実行する必要のあるスクリプトは、以下に示すように、レポート・パッケージによって異なります。

スクリプトはすべて、IBM EMM 製品のインストール済み環境の下の `ProductNameReportsPack¥cognosN¥ProductNameModel` ディレクトリーにあります。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

Campaign

- preUpgrade_86_fromanyversion.xml
- upgrade75to751.xml
- upgrade751to80.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml

eMessage

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml

Interact

- preUpgrade_86_fromanyversion.xml
- upgrade75to751.xml
- upgrade751to80.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml

Leads

- upgrade75to80.xml

- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml

Campaign と Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade86to90.xml

Marketing Operations

- upgrade75to80.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90_DB2.xml (DB2 データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Oracle.xml (Oracle データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Sqlserver.xml (SQL Server データベースの場合のみ)

12. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
13. レポートを実行して、正しく機能することを確認します。
14. 7.5.1 レポートをカスタマイズしていた場合には、それらのカスタマイズを再作成します。

または、アップグレード後のモデルで以前のレポートが正しく機能することを確認できる場合には、以前のレポートを元の場所にコピーします。

新しいデータ・モデルで機能するよう古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートおよび古い「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートを修正する方法については、このセクションの残りの手順を進めていくと情報が示されます。

15. 複数パーティション用のレポートがインストールされている場合、複数パーティションの構成方法を説明している章の指示に従って、追加のパーティションのレポート・パッケージを構成します。
16. オプション。新しい認証モード「ユーザーごとの認証」については、25 ページの『IBM EMM 認証を使用するように IBM Cognos を構成する』の情報を参照してください。

ステップ: 古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートの更新

Campaign モデルを 7.5.1 から 8.x にアップグレードした後、古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートは正しく機能しません。新しいレポートではなく古い「セル別のキャンペーン・パフォーマンス」レポートを使用する場合、手動で更新する必要があります。

「セル別のパフォーマンス」クロスオブジェクト・レポートの修正方法

この手順を使用して、新規データ・モデルで機能するように古いバージョンの以下のクロスオブジェクト・レポートを修正します。

- セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー
- セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益を含む)
- セルおよびイニシアチブ別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー

以下のステップを実行します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
2. ツールバーのロック・アイコンをクリックして、レポートをロック解除します。
3. 「クエリー・エクスプローラー」を参照し、「照会のレポート (Report Query)」を開いて、レポート内のすべての照会項目のリストを見ます。
4. 3 つのレポートすべてについて、以下の照会項目を再マップします。

照会項目	マッピング
提供されたオファー数	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Number of Offers Given]
レスポンス・トランザクション	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Response Transactions]
ユニーク受信者	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients]
ユニーク・レスポnder	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders]
ユニーク受信者コントロール・グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients Control Group]
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders Control Group]

5. 収益を含むレポートの場合、以下のように「総収益」項目を再マップします。

[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Gross Revenue]

6. 「レスポnder率コントロール・グループ」の式を更新し、以下のようにします。

```
IF(((Unique Responders Control Group)/([Unique Recipients Control Group]
* 1.00)) is missing)
THEN (0)
ELSE(((Unique Responders Control Group)/([Unique Recipients Control Group]
* 1.00)))
```

7. 「詳細フィルター」リストから最初の詳細フィルターを選択し、以下のように編集します。

[Campaign Performance Summary] . [Campaign] . [Campaign ID] in
(?CampaignIds?)

8. 「詳細フィルター」リストから、2 番目の次のような詳細フィルターを削除します。

[Campaign Performance Summary].[Responder Rate Control Group at Cell Level].[Campaign ID] in (?CampaignIds?)

9. レポートをロックします。
10. Report Authoring で、レポートごとに以下を行います。
 - a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
 - b. 「Unica Campaign パッケージ」を選択して、「OK」をクリックします。
 - c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
 - d. レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
11. レポートを保存して実行します。

オブジェクト固有の「セル別のパフォーマンス」レポートの修正方法

この手順を使用して、新規データ・モデルで機能するように古いバージョンの以下のオブジェクト固有レポートを修正します。

- セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー
- セル別のキャンペーン・パフォーマンス・サマリー (収益を含む)

以下のステップを実行します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
2. ツールバーのロック・アイコンをクリックして、レポートをロック解除します。
3. 「クエリー・エクスプローラー」を参照し、「照会のレポート (Report Query)」を開いて、レポート内のすべての照会項目のリストを見ます。
4. 両方のレポートについて、以下の照会項目を再マップします。

照会項目	マッピング
提供されたオファー数	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Number of Offers Given]
レスポンス・トランザクション	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Response Transactions]
ユニーク受信者	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients]
ユニーク・レスポnder	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders]
ユニーク受信者コントロール・グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell CH with Controls Summary].[Unique Recipients Control Group]
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ	[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls Summary].[Unique Responders Control Group]

5. 収益を含むレポートの場合、以下のように「総収益」照会項目を再マップします。

```
[Campaign Performance Summary].[Campaign Cell RH with Controls  
Summary].[Gross Revenue]
```

6. 「レスポnder率コントロール・グループ」の式を更新し、以下のようになります。

```
IF(([Unique Responders Control Group]/([Unique Recipients Control Group]  
* 1.00)) is missing)  
THEN (0)  
ELSE((([Unique Responders Control Group]/([Unique Recipients Control Group]  
* 1.00)))
```

7. 「詳細フィルター」リストから最初の詳細フィルターを選択し、以下のよう
に編集します。

```
[Campaign Performance Summary].[Campaign].[Campaign ID] in  
(?CampaignIds?)
```

8. 2 番目の、次のような詳細フィルターを削除します。

```
[Campaign Performance Summary].[Responder Rate Control Group at Cell  
Level].[Campaign ID] in (?CampaignIds?)
```

9. レポートをロックします。
10. Report Authoring で、レポートごとに以下を行います。
 - a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
 - b. 「Unica Campaign パッケージ」を選択して、「OK」をクリックします。
 - c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
 - d. レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックし
ます。
11. レポートを保存して実行します。

ステップ: 古い「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートの更新

Campaign モデルを 7.5.1 から 8.x にアップグレードした後、古い「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートは正しく機能しません。新しいレポートではなく古い「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートを使用する場合、手動で更新する必要があります。

「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」クロスオブジェクト・レポートを修正する方法

古いバージョンの「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」クロスオブジェクト・レポートを新しいデータ・モデルで機能させるには、この手順を使って修正します。

1. IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
2. 「クエリー・エクスプローラー」を参照し、「照会のレポート (Report Query)」を開いて、レポート内のすべての照会項目のリストを見ます。
3. 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数	なし	自動
レスポンス・トランザクション	なし	自動
ユニーク受信者	なし	自動
ユニーク・レスポnder	なし	自動
未コンタクト・レスポnder	なし	自動
満了後のレスポンス	なし	自動
ユニーク受信者コントロール・グループ	なし	自動
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ	なし	自動

4. 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率	自動	自動
レスポnder率	自動	自動
レスポnder率コントロール・グループ	自動	自動
次におけるベスト・オファーの上昇	自動	自動
最低オファーにおける上昇	自動	自動
上昇コントロール・グループ	自動	自動

5. 以下の「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数 - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポnder - オファー	なし	自動
未コンタクト・レスポnder - オファー	なし	自動
満了後のレスポンス - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ - オファー	なし	自動

6. 「レスポンス・トランザクション - オファー」照会項目の式を、以下のものに変更します。

[Offer Performance Summary].[Offer Response History Summary].
[Response Transactions] / count([Campaign Name] for [Offer ID])

7. 以下の「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス・トランザクション - オファー	合計	自動

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
ユニーク受信者 - オファー	合計	自動
ユニーク受信者コントロール・グループ - オファー	合計	自動

8. 以下の「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率 - オファー	自動	自動
レスポンド率 - オファー	自動	自動
レスポンド率コントロール・グループ - オファー	自動	自動
上昇コントロール・グループ - オファー	自動	自動

9. レポート合計レベルのカウントに関して、「合計レスポンス・トランザクション (Total Response Transactions)」の式を次のものに変更します。

total ([Response Transactions-Offer])

10. また、「合計レスポンス・トランザクション (Total Response Transactions)」に関して、「集計関数」が「自動」に設定され、「ロールアップ集計関数」が「自動」に設定されていることを確認してください。
11. レポートをロックします。
12. Report Authoring で、レポートごとに以下を行います。
- 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
 - 「Unica Campaign パッケージ」を選択して、「OK」をクリックします。
 - 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
 - レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
13. レポートを保存して実行します。

単一オブジェクトの「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートを修正する方法

古いバージョンの単一オブジェクト「キャンペーン別のオファー・パフォーマンス・サマリー」レポートを新しいデータ・モデルで機能させるには、この手順を使ってそれを修正します。

- IBM Cognos Report Authoring でレポートを開きます。
- 「クエリー・エクスプローラー」を参照し、「照会のレポート (Report Query)」を開いて、レポート内のすべての照会項目のリストを見ます。
- 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数	なし	自動
レスポンス・トランザクション	なし	自動
ユニーク受信者	なし	自動
ユニーク・レスポnder	なし	自動
未コンタクト・レスポnder	なし	自動
満了後のレスポンス	なし	自動
ユニーク受信者コントロール・グループ	なし	自動
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ	なし	自動

4. 以下の「キャンペーン・レベル・カウント (Campaign Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率	自動	自動
レスポnder率	自動	自動
レスポnder率コントロール・グループ	自動	自動
次におけるベスト・オファーの上昇	自動	自動
最低オファーにおける上昇	自動	自動
上昇コントロール・グループ	自動	自動

5. 以下の「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
提供されたオファー数 - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポnder - オファー	なし	自動
未コンタクト・レスポnder - オファー	なし	自動
満了後のレスポンス - オファー	なし	自動
ユニーク・レスポnder・コントロール・グループ - オファー	なし	自動

6. 「レスポンス・トランザクション - オファー」照会項目の式を、以下のものに変更します。

[Offer Performance Summary].[Offer Response History Summary].
[Response Transactions] / count([Campaign Name] for [Offer ID])

7. 以下の「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス・トランザクション - オファー	合計	自動

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
ユニーク受信者 - オファー	合計	自動
ユニーク受信者コントロール・グループ - オファー	合計	自動

8. 以下の「オファー・レベル・カウント (Offer Level Counts)」照会項目で、次のように集計を構成します。

照会項目	集計関数	ロールアップ集計関数
レスポンス率 - オファー	自動	自動
レスポnder率 - オファー	自動	自動
レスポnder率コントロール・グループ - オファー	自動	自動
上昇コントロール・グループ - オファー	自動	自動

9. レポートをロックします。
10. Report Authoring で、レポートごとに以下を行います。
- 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
 - 「Unica Campaign パッケージ」を選択して、「OK」をクリックします。
 - 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
 - レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。
11. レポートを保存して実行します。

バージョン 8.x からのレポートのアップグレード

33 ページの『レポート、すべてのサポートされているバージョン、すべての製品のアップグレードのための初期ステップ』で説明されているステップを実行した後、バージョン 8.x から IBM EMM アプリケーションをアップグレードしている場合、このセクションのステップに従ってください。

eMessage レポートの場合は、バージョン 8.6 からのアップグレードのみサポートされます。

ステップ: 8.x モデルのアップグレードおよび新規レポートのインストール

- Unica¥ProductNameReportsPack¥CognosN ディレクトリーに移動します。N は Cognos インストール済み環境のバージョンです。
- レポート・アーカイブ .zip ファイル (例えば Unica Reports for Campaign.zip) を、Cognos 配置アーカイブが保存されているディレクトリーにコピーします。

デフォルトの場所は IBM Cognos インストール済み環境の下の配置ディレクトリーで、Cognos Content Manager と一緒にインストールされた Cognos Configuration ツールで指定されます。例えば、cognos¥deployment です。

分散 IBM Cognos 環境では、これは Content Manager を実行しているシステム上にあります。

3. Reports Pack インストール・ディレクトリーと Framework Manager が異なるマシン上にある場合、Reports Pack インストール・ディレクトリーの下で cognos10¥model ディレクトリーを見つけて、それを Framework Manager がインストールされているマシン上のディレクトリーにコピーします。
4. IBM EMM 製品をデフォルト・ディレクトリー (Windows の場合は C:¥Unica) にインストールしなかった場合にのみ、このステップの説明にしたがって、いくつかのアップグレード・スクリプトを更新する必要があります。

ここでリストされているスクリプトを更新する必要があります。更新する必要のあるスクリプトは、以下に示すように、レポート・パッケージによって異なります。

また、アップグレードする元の 8.x バージョンを考慮に入れる必要があります。それより前のバージョンを参照するスクリプトは、更新する必要ありません。例えば、バージョン 8.5.0 から Campaign レポートをアップグレードする場合、upgrade80to81.xml スクリプトと upgrade81to85.xml スクリプトは更新する必要ありません。

スクリプトはすべて、IBM EMM 製品のインストール済み環境の下の *ProductNameReportsPack¥cognosN¥ProductNameModel* ディレクトリーにあります。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

Campaign

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml

eMessage

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml

Interact

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml

Leads

- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml

Campaign と Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade86to90.xml

Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90_DB2.xml (DB2 データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Oracle.xml (Oracle データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Sqlserver.xml (SQL Server データベースの場合のみ)

Distributed Marketing

- upgrade86to90.xml

バージョン 8.6 からのアップグレードのみサポートされます。

Interaction History

- バージョン 9.0 へのアップグレードはサポートされません。

Attribution Modeler

- バージョン 9.0 へのアップグレードはサポートされません。

各スクリプトで、ローカライズされた言語のバージョンのモデルが格納されているディレクトリーを指しているファイル・パスを編集して、製品のインストール済み環境の場所を反映するようにします。ユーザーが必要とするすべての言語について、この変更を行ってください。以下に例を示します。

```
install_directory %ReportsPackCampaign%cognos/N%CampaignModel%
translations¥L¥ translations.txt
```

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

パス内の *L* は、以下の言語標識のいずれかを表します。

- fr
- de
- es
- it
- ja
- ko
- pt
- ru

- zh
- 5. Cognos Connection を開きます。
- 6. 「**Cognos コンテンツの管理 (Administer Cognos Content)**」 > 「**設定**」 > 「**コンテンツの管理**」の順に選択します。
- 7. ツールバーの「**インポートの新規作成**」ボタン  をクリックし、レポート・フォルダーをインポートします。
- 8. Cognos Framework Manager を開いて、アップグレード元のバージョンのプロジェクトを開きます。
- 9. 「**プロジェクト**」 > 「**スクリプトの実行**」を選択します。
- 10. 新しいバージョンから以下のスクリプトを実行します。

ここでリストされているスクリプトを実行する必要があります。実行する必要のあるスクリプトは、以下に示すように、レポート・パッケージによって異なります。

また、以下のように、アップグレードする元の 8.x バージョンを考慮に入れる必要があります。

- それより前のバージョンを参照するスクリプトは、実行する必要ありません。例えば、バージョン 8.5.0 から Campaign レポートをアップグレードする場合、upgrade80to81.xml スクリプトと upgrade81to85.xml スクリプトは実行する必要がありません。
- 8.6 以外のどのバージョンからのアップグレードでも、preUpgrade_86_fromanyversion.xml スクリプトを実行する必要があります。

スクリプトはすべて、IBM EMM 製品のインストール済み環境の下の `ProductNameReportsPack¥cognosN¥ProductNameModel` ディレクトリーにあります。

パス内の *N* は、Cognos のバージョン番号を表します。

Campaign

- preUpgrade_86_fromanyversion.xml
- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml

eMessage

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml

Interact

- preUpgrade_86_fromanyversion.xml
- upgrade80to81.xml

- upgrade81to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90.xml

Leads

- upgrade81to85.xml
- upgrade86to90.xml

Campaign とMarketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade86to90.xml

Marketing Operations

- upgrade80to81.xml
- upgrade81to82.xml
- upgrade82to85.xml
- upgrade85to86.xml
- upgrade86to90_DB2.xml (DB2 データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Oracle.xml (Oracle データベースの場合のみ)
- upgrade86to90_Sqlserver.xml (SQL Server データベースの場合のみ)

Distributed Marketing

- upgrade86to90.xml

バージョン 8.6 からのアップグレードのみサポートされます。

Interaction History

- バージョン 9.0 へのアップグレードはサポートされません。

Attribution Modeler

- バージョン 9.0 へのアップグレードはサポートされません。

11. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
12. クロスオブジェクトの「セル別のパフォーマンス」レポートおよびオブジェクト固有の「セル別のパフォーマンス」レポートそれぞれに対して、Cognos Report Authoring で以下のようにします。
 - a. 「ファイル」>「レポート・パッケージ」を選択します。
 - b. 「Unica Campaign パッケージ」を選択して、「OK」をクリックします。
 - c. 必要に応じてレポートのプロンプトに入力します。
 - d. レポートを検証した後、「検証応答」ウィンドウで「閉じる」をクリックします。

これは、Attribution Modeler または eMessage では必要ありません。

13. レポートを実行して、アップグレードをテストします。

第 3 章 レポート作成の構成

この章では、各レポート・コンポーネントについて説明し、インストール後の構成に関する情報を提供します。レポート作成のインストールとアップグレードに関する情報は、本書の別の箇所に記載されています。

レポート作成機能のために、IBM EMM はサード・パーティーのビジネス・インテリジェンス・アプリケーション IBM Cognos と統合します。レポート作成は、以下のコンポーネントに依存します。

- IBM Cognos のインストール済み環境
- IBM Enterprise アプリケーションと IBM Cognos インストール済み環境を統合する IBM EMM コンポーネントのセット
- いくつかの IBM EMM アプリケーションでは、アプリケーションの IBM システム・テーブルでレポート・ビューやテーブルを作成できるようにするレポート・スキーマ
- IBM Cognos Report Authoring で作成された IBM EMM アプリケーションのレポート例

IBM EMM スイートのレポートについて

IBM EMM アプリケーションをインストールする場合、各アプリケーションは自己を Marketing Platform に登録します。登録処理時に、各アプリケーションは自己のエントリーを「分析」メニュー項目に追加します。

アプリケーションのレポート・パッケージを構成した後は、次のようにします。

- アプリケーションの「分析」メニュー項目で、クロスオブジェクト・レポートへのアクセスが提供されます。
- 次に、該当するオブジェクトの「分析」タブに単一オブジェクト・レポートが表示されます。
- アプリケーションのダッシュボード・レポートを有効にしてダッシュボードで使用するができます。

通常、IBM EMM アプリケーションのインストール時に、IBM EMM 製品のレポート・パッケージがインストールされます。レポート・スキーマは、すべてのレポート・パッケージに含まれているわけではありませんが、以下の IBM Cognos BI コンポーネントはすべてに含まれています。

- IBM EMM アプリケーション・レポート用のカスタマイズ可能な IBM Cognos レポート・メタデータ・モデル
- IBM Cognos BI Report Authoring で作成された、カスタマイズ可能な IBM EMM アプリケーション・レポート
- レポート・データ・モデルおよびレポートについて説明した参考資料

IBM Cognos モデルは、IBM EMM アプリケーション・データベース内のレポート・ビュー（またはテーブル）を参照し、また IBM EMM レポート・パッケージでも配信される IBM Cognos レポートで、そのデータを利用できるようにします。

インストール直後は、レポートはデフォルトの状態にあり、サンプルのレポートと見なされます。理由は次のとおりです。多くの IBM EMM アプリケーションには、追加やカスタマイズが可能なオブジェクト、属性、またはメトリックのセットがあります。例えば、Campaign では、レスポンス・タイプ、カスタム・キャンペーン属性、追加オーディエンス・レベルなどを追加することができます。ご使用のシステムのデータ設計を実装した後、レポートを再表示して、レポート例をカスタマイズしたり、新しいレポートを作成したりできます。

実装のデータ設計フェーズの後でレポートを構成する方法は、IBM EMM システムに組み込まれている IBM EMM アプリケーションによって異なります。

- Campaign および Interact の場合、レポート・スキーマをカスタマイズしてから、インストール時に作成されたビューまたはレポート・テーブルを更新します。その時に、Cognos データ・モデルと新しく更新されたレポート・ビューを同期化し、Cognos のコンテンツ・ストアに改訂済みのモデルを公開します。これで、新規カスタム属性が、Report Authoring で使用可能になり、それらの属性をレポート例に追加したり、属性を表示する新規レポートを作成したりすることができます。
- レポート・スキーマを提供しない IBM EMM アプリケーションおよび eMessage (カスタマイズ可能なスキーマを提供) については、Cognos IBM レポートのみを構成します。

このセクションでは、セキュリティー・モデル、スキーマ、データ・モデル、およびレポートについて説明します。

レポートおよびセキュリティーについて

レポート機能は、以下のアクセス制御機構によって制御されます。

- ユーザーが IBM EMM インターフェースからレポートを実行可能かどうかは、IBM EMM アプリケーション・アクセス設定によって付与されている権限に応じて決まります。さらに、Campaign、eMessage、および Interact の場合、IBM Cognos システム上でのフォルダー構造に基づいて、レポートのグループへのアクセス権限を付与または否認することができます。（この機能は、その他の製品には使用できません。）
- 管理者がスキーマのカスタマイズやレポート SQL ジェネレーターの実行を行えるかどうかは、Marketing Platform に構成されている権限によって決まります。
- IBM Cognos BI システムを IBM EMM 認証を使用するように構成することによって、IBM Cognos システムから IBM アプリケーション・データへのアクセスを制御することもできます。

レポート・フォルダー権限について

IBM Cognos システムにインストールする IBM Cognos レポート・パッケージには、フォルダーに編成する IBM アプリケーション用のレポートの仕様が含まれて

います。例えば、Interact 用のフォルダーには、「Interact Reports」という名前が付けられ、レポートの仕様は、IBM Cognos システム上のそのフォルダーの中に物理的に配置されます。

Campaign、eMessage、および Interact の場合、レポートのグループに対する権限を、それらが IBM Cognos システム内で物理的に格納されているフォルダー構造に基づいて構成することができます。

IBM Cognos ファイル・ディレクトリーとの同期

レポートがインストールされた後、IBM Cognos システム上のレポート・フォルダーを IBM システムに認識させるには、IBM インターフェースの「設定」メニューにある「レポート・フォルダー権限の同期」オプションを実行します。このオプションは、IBM Cognos システムに接続して、どのフォルダーが存在するのかを判別します。その後、Campaign パーティションのユーザー権限リストにエントリーを作成します。「レポート」という名前のエントリーが、「ログ」エントリーと「システム・テーブル」エントリーの間の権限リストに表示されます。これで、「レポート」エントリーを展開すると、レポート・フォルダー名がリストされ、権限が表示されています。

新規権限のデフォルト設定は「不認可」です。したがって、「レポート・フォルダーの権限の同期」オプションを実行した後で、レポート・フォルダーの権限を構成する必要があります。そうしないと、誰も IBM Cognos レポートにアクセスできなくなります。

パーティションとフォルダー・パーティション

フォルダー同期プロセスでは、すべてのパーティションについて、Cognos システムにある全フォルダーの名前を取得します。いずれかのパーティションのレポート・フォルダー権限を構成することにした場合、すべてのパーティションについて権限を構成する必要があります。

IBM Cognos BI システムの保護について

IBM EMM システムが IBM Cognos BI システムと統合されると、IBM Cognos システムは IBM EMM アプリケーション・データに 2 とおりの方法でアクセスできるようにします。

- IBM EMM アプリケーションから: 誰かが IBM EMM インターフェースからレポートを要求した場合、IBM EMM システムは IBM Cognos システムに接続し、レポート・ビューまたはテーブルに対して照会を実行してから、IBM EMM インターフェースに戻ってレポートを送信します。
- IBM Cognos アプリケーションから: Framework Manager で IBM EMM アプリケーション・データ・モデルに関する作業をする場合や、Report Authoring でレポートに関する作業をする場合は、IBM EMM アプリケーションのデータベースに接続します。

デフォルトの状態では、Cognos システムは無保護です。これは、IBM Cognos アプリケーションにアクセスできるユーザーなら誰でも、IBM EMM アプリケーションのデータベースからデータへのアクセスを持っていることを意味します。

IBM EMM Authentication Provider

IBM Cognos が IBM EMM 認証を使用するように構成されると、IBM Cognos BI システムにインストールされた IBM EMM Authentication Provider が、Marketing Platform のセキュリティー層と通信してユーザーを認証します。アクセス権限については、ユーザーは有効な IBM EMM ユーザーでなければならず、また次の権限のいずれかを付与する役割を持っている必要があります。

- **report_system**、これは IBM EMM インターフェースのレポート構成オプションへのアクセス権限も付与します。デフォルトの役割「**ReportsSystem**」は、この権限を付与します。
- **report_user**、これは IBM EMM インターフェースのレポート構成オプションではなく、レポートへのアクセス権限を付与します。デフォルトの役割「**ReportsUser**」は、この権限を付与します。

「認証」と「ユーザーごとに認証」の 2 つの認証オプションがあります。

モード = 認証

認証モードが「認証」に設定されている場合、IBM EMM システムと IBM Cognos システムとの間の通信は、マシン・レベルで保護されています。

ユーザーは単一レポートのシステム・ユーザーを構成し、レポート構成設定でそれを識別します。レポートのシステム・ユーザーを構成するには、以下を実行します。

- ユーザーを作成し、そのユーザーに、ReportsSystem の役割を割り当てます。ReportsSystem は、すべてのレポート機能へのアクセス権限をユーザーに付与します。
- ユーザーのデータ・ソースに、IBM Cognos システムのログイン資格情報を格納します。
- 規則に従って名前を付けます (必須ではありません)。cognos_admin と名前を付ける。

IBM EMM 認証プロバイダーは、次のようにしてユーザーを認証します。

- IBM EMM ユーザーがレポートを表示しようとするたびに、Marketing Platform は、Cognos システムとの通信で、レポート・システム・ユーザーのレコードに格納された資格情報を使用します。認証プロバイダーは、ユーザーの資格情報を検証します。
- レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、レポート・システム・ユーザー (cognos_admin) としてログインし、認証プロバイダーがユーザー資格情報を検証します。

モード = ユーザーごとに認証

認証モードが「ユーザーごとに認証」に設定されている場合、システムはレポート・システム・ユーザーを使用しません。代わりに、個々のユーザーのユーザー資格情報を評価します。

- IBM EMM ユーザーがレポートを表示しようとするたびに、Marketing Platform は、そのユーザー資格情報を Cognos システムとの通信に組み込みます。認証プロバイダーは、ユーザーの資格情報を検証します。

- レポート作成者が IBM Cognos アプリケーションにログインする場合は、自分自身の資格でログインし、認証プロバイダーが資格情報を検証します。

このモードでは、すべてのユーザーがレポートを参照するために ReportsUser または ReportsSystem のいずれかの役割を持っている必要があります。通常は、1 人または 2 人の管理者に ReportsSystem の役割を割り当て、IBM EMM インターフェースでレポートを参照する必要がある IBM EMM ユーザーのユーザー・グループに ReportsUser の役割を割り当てます。

認証と権限

認証プロバイダーでは、レポート権限を確認する以外に権限検査を行いません。Cognos アプリケーションにログインするレポート作成者は、レポート・フォルダー権限が IBM EMM システム上でどのように設定されていても、Cognos システム上のすべてのレポートにアクセスすることができます。

レポート権限のリファレンス

レポート構成機能にアクセスし、次の設定によってレポート自体を制御します。

ユーザー・インターフェース項目	アクセス制御
「設定」メニューの「構成」オプション（「構成」ページでレポート・スキーマを構成します）	「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」>「プラットフォーム」の下にあるプラットフォーム権限「構成へのアクセス権限 (Access to Configuration)」
「設定」メニューの「レポート SQL ジェネレーター」および「レポート・フォルダーの権限の同期」オプション	「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」>「プラットフォーム」の下にあるレポート権限「report_system」 標準の ReportsSystem 役割には、この権限があります。
分析機能のメニュー	製品ごとに異なるアプリケーションのアクセス設定は、次のとおりです。 • Campaign、eMessage、および Interact の場合は、「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」のキャンペーン・パーティション・レベルにある「管理」>「アクセス分析セクション (Access Analysis Section)」の権限です。 • Marketing Operations および Distributed Marketing については、セキュリティ・ポリシーの「分析」権限です。
「分析」タブ	個々のオブジェクトに関するセキュリティ・ポリシーの分析（または解析）権限です。
レポートで表示されるデータ	Cognos システムの認証モードが「ユーザーごとの認証」である場合、ユーザーがレポート内のデータを参照するには、ReportsSystem または ReportsUser のどちらかの役割を持っている必要があります。

レポート・スキーマについて

Campaign、Interact、および eMessage のレポートを実装する場合は、レポート・ビューおよびテーブルの作成から開始し、レポートが報告可能なデータを抽出できるようにします。これらのアプリケーションのレポート・パッケージには、レポート・ビューまたはテーブルを作成する SQL スクリプトを生成するためにレポート SQL ジェネレーターで使用されるレポート・スキーマが含まれています。

Campaign および Interact の場合は、スキーマ・テンプレートをカスタマイズして、レポートに含める予定のすべてのデータが表示されるようにします。次に、レポート SQL ジェネレーターを実行し、結果のスクリプトを取得して、アプリケーション・データベースでそのスクリプトを実行します。

eMessage レポート・スキーマをカスタマイズすることはできませんが、管理者またはインストール・チームは、同様にレポート・ビューやテーブルを作成する SQL を生成し、eMessage データベースでスクリプトを実行する必要があります。

レポート・スキーマを使用すると、サード・パーティーのレポート・ツールを使用して、より簡単に IBM アプリケーション・データを検査できるようになります。ただし、IBM EMM のユーザー・インターフェースでレポートを表示する場合は、ご使用のシステムを IBM Cognos BI と統合する必要があります。

レポート SQL ジェネレーターについて

レポート SQL ジェネレーターは、レポート・スキーマを使用して、IBM EMM アプリケーションのデータベースからデータを抽出するために必要な分析ロジックを判別します。次に、SQL を生成します。この SQL は、分析ロジックを実装するビューまたはレポート・テーブルを作成し、ビジネス・インテリジェンス・ツールを有効にして報告可能なデータを抽出します。

インストールおよび構成時に、システム実装者が IBM EMM のアプリケーション・データベースを識別するデータ・ソース・プロパティを構成済みです。レポート SQL ジェネレーターは、以下の場合にアプリケーション・データベースに接続します。

- ビューまたは実体化ビューを作成するスクリプトを検証する場合
- レポート・テーブルを作成するスクリプトで使用するための正しいデータ型を判別する場合

JNDI データ・ソース名が正しくないか欠落している場合、レポート SQL ジェネレーターは、レポート・テーブルを作成するスクリプトを検証できません。

レポート配置オプションについて

レポート SQL ジェネレーター・ツールを実行する場合は、スクリプトでビュー、実体化ビュー、またはテーブルを作成するかどうかを指定します。使用する配置オプションは、システムに含まれるデータの量によって異なります。

- 小規模な実装環境の場合は、必要に応じて、実稼働データを直接照会するレポート・ビューを効率的に実行することができます。効率がよくない場合は、実体化ビューを試してみてください。

- 中規模の実装環境の場合は、実稼働システム・データベースで実体化ビューを使用するか、またはレポート・テーブルを別のデータベースにセットアップします。
- 大規模の実装環境の場合は、別個のレポートデータベースを構成します。

すべての実装環境で、Cognos Connection Administration を使用して、大量のデータを取得するレポートを業務外の時間帯に実行するようにスケジュールすることができます。

実体化ビューおよび MS SQL Server

レポート機能は、MS SQL Server の実体化ビューをサポートしていません。

SQL Server では、実体化ビューは「インデックス・ビュー」と呼ばれています。しかし、SQL Server 上のビューにインデックスを作成する定義では、特定の集計、関数、およびレポート・ビューが含まれているオプションを使用することができません。したがって、SQL サーバー・データベースを使用している場合は、ビューまたはレポート・テーブルを使用してください。

eMessage および Oracle

ご使用のシステムに eMessage があり、データベースが Oracle である場合は、実体化ビューまたはレポート・テーブルを使用することをお勧めします。

データ同期

実体化ビューまたはレポート・テーブルと一緒に配置する場合、データを実稼働システムのデータと同期する頻度を決定します。その後、データベース管理ツールを使用して、データの同期化処理をスケジュールに入れ、定期的にレポート・データを最新表示してください。

レポートのコントロール・グループおよびターゲットグループについて

レポート・パッケージの IBM Cognos BI レポートの例には、ターゲット・グループとコントロール・グループの両方からのデータが含まれています。これらのレポートをサポートするために、レポート・スキーマには、デフォルトのコンタクトおよびレスポンス履歴メトリックとデフォルトのレスポンス・タイプそれぞれについて 2 つの列が含まれています。1 つの列には、制御グループからのレスポンスが表示され、もう一方の列には、ターゲット・グループからのレスポンスが表示されます。

サンプルのレポートの拡張や、独自の新規レポートの作成を行う予定の場合、ターゲット・グループとコントロール・グループの両方からのレスポンス情報を組み込むかどうかを決定します。組み込む場合は、メトリックまたはレスポンス・タイプを追加するため、レポート・スキーマにターゲット用と制御用の 2 つの列を作成します。組み込まない場合は、レポート・スキーマにターゲット・グループの項目用の列のみを作成します。

オーディエンス・レベルおよびレポートについて

デフォルトの状態では、レポート・スキーマは Campaign に付属の単一の定義済みオーディエンス・レベル (顧客) のシステム・テーブルを参照します。これは、パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴が、デフォルトでは顧客オーディエンス・レベルを参照することを意味します。

正しいオーディエンス・レベルのシステム・テーブルを参照するようにパフォーマンス・スキーマとレスポンス・スキーマを編集することで、レポートのオーディエンス・レベルを変更することができます。

さらに、Campaign および Interact については、追加のオーディエンス・レベル用のレポート・スキーマを追加することができます。レポート・スキーマは、「Marketing Platform の構成」ページのテンプレートから作成します。追加のレポート・ビューを Cognos データ・モデルに追加します。その後、Cognos レポートを変更して、追加のオーディエンス・レベルに対応するように変更します。

これらのタスクについては、この章で詳しく説明します。

レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キーについて

パフォーマンス・レポートとレスポンス履歴のオーディエンス・レベルを構成する場合、または追加オーディエンス・レベル用の新規レポート・スキーマを作成する場合は、オーディエンス・レベルのオーディエンス・キーを指定します。キーに複数のデータベースの列が含まれている場合 (マルチキー・オーディエンス・キーと呼ばれることがある)、列名の間にはコンマを使用してください。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

レポート・スキーマの「オーディエンス・キー」フィールドに入力できるストリングの最大長は、255 文字です。オーディエンス・キーが 255 文字より長い場合は、生成済みの SQL でこの制限を回避することができます。「オーディエンス・キー」フィールドにキーの最初の 255 文字を入力して、通常どおりに SQL スクリプトを生成します。次に、エディターで生成されたスクリプトを開き、検索と置換を使用して、切り捨てられたオーディエンス・キー参照のそれぞれを完全なストリングに置換します。

パーティションおよびレポート・スキーマについて

Campaign に複数のパーティションがある場合、システムの実装者が Cognos システム上でパーティションごとにレポート・パッケージを構成済みです。ただし、ご使用のシステムのデータ設計が実装された後で、パーティションごとにレポート・ビューまたはテーブルを再表示する必要があります。

各パーティションにレポート・スキーマを追加できます。レポート・スキーマは、「スキーマの構成」ページのテンプレートから作成します。

Framework Manager データ・モデルについて

Cognos モデルは、物理データベース・オブジェクトと、照会サブジェクトおよび照会項目に対する物理データベース・オブジェクトの関係を記述するレポート・メタデータです。IBM Cognos8 BI Report Authoring でレポートを作成する場合は、モデルに記述された照会サブジェクトおよび項目から作成します。

IBM EMM アプリケーションのデータ・モデルは、IBM EMM アプリケーション・データベース内のレポート・ビューを参照して、そのデータを IBM EMM レポート・パッケージでも提供される Cognos 8 レポートで利用できるようにします。

レポート・ビューを構成して、追加の属性、メトリック、レスポンス・タイプなどを組み込んだ場合は、Cognos レポート・モデルとレポート・ビューを同期させ、Cognos のコンテンツ・ストアに改訂済みモデルを公開します。これで、新規属性が Report Authoring で使用可能になり、それらの属性を IBM EMM レポートに追加することができます。

IBM EMM レポート・パッケージの IBM Cognos 8 モデルでは、以下の 3 つのカテゴリ（フォルダー）で IBM EMM アプリケーション・メタデータを提供しています。

- インポート・ビュー。このレベルでは、IBM EMM アプリケーション・データベース内のレポート・スキーマからデータを表示します。データ・ソース接続を介して、データ・モデルと IBM EMM データベース・ビュー、実体化ビュー、またはレポート・テーブルを同期化するには、このビューを使用します。
- モデル・ビュー。これは、基本的なメタデータ変換を実行する作業域です。照会サブジェクトによって表示されるオブジェクト・エンティティー間の関係をセットアップして、ビジネス・ビューで使用可能な構成要素を作成します。
- ビジネス・ビュー。このレベルでは、ビジネス・オブジェクトの観点から照会サブジェクトを編成して、レポート作成を単純化します。これは、Report Authoring で IBM EMM アプリケーションのレポートを開いたときに表示される情報です。

Campaign モデルおよび eMessage モデルには、モデル・ビューからビジネス・ビューへのショートカットが含まれています。Interact モデルでは、その照会サブジェクトの一部が 2 つのデータ・ソースにまたがるため、同じ方法のショートカットを使用しません。

Report Authoring レポートについて

それぞれの IBM EMM レポート・パッケージには、IBM Cognos Report Authoring で作成された、そのアプリケーション用のレポートがいくつか含まれています。それらをインストールすると、IBM EMM スイートの共通ユーザー・インターフェースで、以下の場所からサンプル・レポートを選択して実行することができます。

- 「分析」メニューから複数のオブジェクト・レポートにアクセス可能です。
- 単一オブジェクト・レポートは、キャンペーンやオファーなどの項目の「分析」タブに表示されます。
- さらに、Campaign、Marketing Operations、eMessage、および Interact では、IBM EMM ダッシュボードで使用される事前構成ポートレット（レポート）がレポート・パッケージに含まれています。ダッシュボードの扱い方については、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

フォルダー、サブフォルダー、およびアクセス設定について

インストール時に、システムの実装者が Cognos Connection にある IBM EMM アプリケーションのレポートのアーカイブをパブリック・フォルダー領域にインポート済みです。各 IBM EMM アプリケーションのレポートはフォルダーとサブフォル

ダーに編成され、フォルダーとサブフォルダーには、アプリケーションとそのパブリック・フォルダー領域でのレポートの目的の両方を表す名前が付いています。

また、これらのフォルダーとサブフォルダーは、Campaign、Interact、および eMessage のセキュリティ・アクセス制御モデルでも使用されます。セキュリティ・アクセス制御モデルには、フォルダー別のレポートのセキュリティ設定が含まれています。つまり、これらのアプリケーションのセキュリティ・ポリシーによって、ユーザーにフォルダー内のすべてのレポートに対するアクセス権限が付与されます。Marketing Operations のアクセス制御モデルはこのレベルのアクセス権限を提供しません。Marketing Operations では、すべてのレポートへのアクセス権限があるか、レポートへのアクセス権限がまったくないかのいずれかです。

ベスト・プラクティスとして、IBM Cognos Connection インターフェースのフォルダーまたはサブフォルダーを名前変更しないようにしてください。名前変更する場合は、必ず IBM アプリケーションが変更済みのフォルダー名を認識するように構成してください。

- Campaign、eMessage、および Interact の場合は、「設定」>「構成」を選択し、「Campaign」>「partition」>「partition[n]」>「reports」で、レポート・フォルダーのプロパティの値を編集して、フォルダーの実際の名前と一致するようにしてください。
- Marketing Operationsの場合は、plan_config.xml ファイルを開き、reportsAnalysisSectionHome および reportsAnalysisTabHome 構成設定の値を編集してください。

レポートのスタイルと外観について

レポート統合コンポーネントには、グローバル・スタイル・シート (GlobalReportStyles.css) が含まれています。このスタイル・シートは、すべての IBM EMM アプリケーションのレポート全体にわたって共通するレポート・スタイルを設定します。スタイルについて詳しくは、付録の 113 ページの『付録 B. Cognos レポートの書式設定』を参照してください。この付録では、さまざまな種類のレポートに関する以下の情報を提供します。

- GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル。
- レポートの作成時に手動で行う必要のあるスタイルの書式設定 (スタイル・シートを使用して実装できない特殊なスタイルがあるため)。

IBM EMM レポートでは、ダッシュ文字 (「-」) には特殊な意味があります。これは、計算が適用されないことを示します。例えば、合計を表示する行に固有のカウントを計算できない場合は、その事実を示すために「-」が表示されます。

一部のレポートは、データがほとんどまたはまったくない場合、システムで最良の状態では表示されません。例えば、データ・ポイントが 1 つの折れ線グラフは、線を表示することができないため、グラフが空のように見えることになります。また、サマリー・データのグラフィカル表現では、データの無いデータ・ポイントの日付や時刻はリストされません。例えば、指定した日付範囲にデータのある日が 1 日だけ含まれている場合、グラフにはその日付のみが表示されます。

レポートをカスタマイズして、ご使用のシステムからのデータに最適なチャートやグラフの種類を使用することができます。

レポート生成スケジュールのセットアップについて

IBM Cognos Connection では、レポートの自動実行をスケジュールすることができます。レポートごとに、実行頻度、フォーマット・オプション、配信方法、保存場所などを選択できます。

例えば、毎週月曜日の午前 9:00 にレポートを実行し、そのレポートを、指定された受信者グループに自動生成 E メールを使用して配布するようスケジュールすることができます。

レポートのスケジューリングと配布について詳しくは「*IBM Cognos Connection User Guide*」のスケジュールの章を参照してください。

レポート・スキーマのカスタマイズ

このセクションでは、カスタム・データを組み込んでそのデータをレポートに表示できるように、レポート・スキーマをカスタマイズする方法について説明します。このタスクの最初のステップは、変更するスキーマを決定することです。次に、システムのレポートの目的に応じて、このセクションの手順のステップを実行してください。

- 『使用するレポート・スキーマ』
- 『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加方法』
- 66 ページの『カスタム属性の追加方法』
- 67 ページの『レスポンス・タイプの追加方法』
- 67 ページの『コンタクト・ステータス・コードを追加するには』
- 68 ページの『パフォーマンス・レポートのカレンダー期間の指定方法』
- 68 ページの『パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴のオーディエンス・レベルを構成するには』

使用するレポート・スキーマ

変更する必要があるレポート・スキーマは、カスタマイズする予定のレポートに応じて決まります。付録の「製品別のレポートおよびレポート・スキーマ」には、レポート・パッケージで提供されているレポート例をサポートするレポート・スキーマを示す表があります。カスタマイズするレポートを決定してから、レポート・スキーマ・マップで適切なレポートを参照してください。

- 121 ページの『付録 C. 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ』
- 123 ページの『Interact レポートおよびレポート・スキーマ』
- 123 ページの『eMessage レポートおよびレポート・スキーマ』

注: eMessage レポート・スキーマをカスタマイズすることはできませんが、変更および新規 eMessage レポートの作成はできます。

コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加方法

キャンペーン・パフォーマンスおよびオファー・パフォーマンスのレポート・スキーマにコンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックを追加することができます。始める前に、以下の情報を判別してください。

- メトリックを追加したいレポートをサポートしているレポート・スキーマ。詳しくは、付録の 121 ページの『付録 C. 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ』を参照してください。
- ターゲット・グループに加えて、コントロール・グループのレポート・スキーマに列を追加する必要があるかどうか。61 ページの『レポートのコントロール・グループおよびターゲットグループについて』を参照してください。
- メトリックの計算方法。例えば、メトリックの合計、平均、カウントを出すことができます。

続いて、以下の手順を実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「適切なレポート・スキーマの名前」を展開します。
2. 「列」ノードを展開し、「コンタクト・メトリック」または「レスポンス・メトリック」のいずれかを選択します。
3. 右のフォームで、「新規カテゴリー名」をクリックして、コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの名前を入力します。
4. 「列名」には、レポート・スキーマで使用する属性の名前を入力してください。すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。
5. 「関数 (Function)」には、メトリックの計算方法または判別方法を指定します。
6. 「入力列名」には、IBM アプリケーション・データベースにある適切なテーブルから、この属性用の列の名前を入力してください。入力列名では、大文字と小文字が区別されます。
7. 「制御処理フラグ」には、数値 0 (ゼロ) を入力します。数値 0 は、レポート・スキーマではこの列がターゲット・グループを表すことを示します。
8. 「変更を保存」をクリックします。
9. 必要に応じてこの手順を繰り返して、レポート・スキーマにコントロール・グループ列を追加します。今度は、数値 1 を入力してください。数値 1 は、この列がコントロール・グループを表すことを示します。

カスタム属性の追加方法

カスタム・キャンペーン属性、オファー属性、およびセル属性をカスタム・キャンペーン属性レポート・スキーマに追加することができます。始める前に、以下の情報を判別してください。

- UA_CampAttribute、UA_CellAttribute、または UA_OfferAttribute のうちの適切なテーブルにある、属性の AttributeID 列の値。
- 属性のデータ型: スtring 値、数値、または日付/時刻値

続いて、以下の手順を実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・カスタム属性」>「列」を展開します。
2. 追加する属性のタイプに一致する列のタイプを選択します。
3. 右のフォームで、「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックしてカスタム属性の名前を入力します。
4. 「列名」には、レポート・スキーマで使用する属性の名前を入力してください。すべて大文字を使用し、スペースは入れないでください。

5. 「属性 ID」には、この属性の ID を入力します。
6. 「値タイプ」には、属性のデータ型を指定します。

注: 通貨値を保持する属性を追加する場合は、「値タイプ」フィールドに NumberValue を指定します。Campaign で、「フォーム要素タイプ」が「選択ボックス - 文字列」に設定されている属性を追加する場合は、「値タイプ」フィールドに StringValue を追加します。

7. 「変更を保存」をクリックします。

レスポンス・タイプの追加方法

キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スキーマにレスポンス・タイプを追加することができます。始める前に、以下の情報を判別してください。

- ターゲット・グループに加えて、コントロール・グループのレポート・スキーマに列を追加する必要があるかどうか。61 ページの『レポートのコントロール・グループおよびターゲットグループについて』を参照してください。
- UA_UsrResponseType テーブルからのレスポンス・タイプ・コード。

続いて、以下の手順を実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細」>「列」>「レスポンス・タイプ」を展開します。
2. 右のフォームで、「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックしてレスポンス・タイプの名前を入力します。
3. 「列名」には、レポート・スキーマで使用するレスポンス・タイプの名前を入力してください。
4. 「レスポンス・タイプ・コード」には、このレスポンス・タイプの 3 文字のコードを入力します。レスポンス・タイプ・コードでは、大文字と小文字が区別されます。
5. 「制御処理フラグ」には、数値 0 (ゼロ) を入力します。数値 0 は、レポート・スキーマではこの列がターゲット・グループを表すことを示します。
6. 「変更を保存」をクリックします。
7. 必要に応じてこの手順を繰り返して、レポート・スキーマにコントロール・グループ列を追加します。今度は、数値 1 を入力してください。数値 1 は、この列がコントロール・グループを表すことを示します。

コンタクト・ステータス・コードを追加するには

キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータス内訳スキーマにコンタクト・ステータス・コードを追加することができます。始める前に、UA_ContactStatus テーブルのコンタクト・ステータス・コードを判別してください。

続いて、以下の手順を実行します。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳」>「列」>「コンタクト・ステータス」を展開します。

2. 右のフォームで、「**新規カテゴリー名 (New category name)**」をクリックしてコンタクト・ステータス・タイプの名前を入力します。
3. 「**列名**」には、レポート・スキーマで使用するコンタクト・ステータス・タイプの名前を入力してください。
4. 「**コンタクト・ステータス・コード**」には、このコンタクト・ステータスの 3 文字のコードを入力します。コンタクト・ステータス・コードでは、大文字と小文字が区別されます。
5. 「**変更を保存**」をクリックします。

パフォーマンス・レポートのカレンダー期間の指定方法

Campaign および Interact の標準レポートには、どちらにも、カレンダーの周期でデータを要約したパフォーマンス・レポートが含まれています。これらのレポートで使用されている期間が、デフォルトの「時間経過に伴う変動」以外のものであることを指定するには、以下の手順を実行します。

1. 「**設定**」>「**構成**」を選択して「**レポート**」>「**スキーマ**」を展開し、「**キャンペーン**」または「**対話**」のいずれかを選択します。
2. 目的の実績スキーマを選択します。
3. 「**設定の編集**」をクリックします。
4. 「**スキーマ設定**」セクションで、適合する「**時間経過に伴う変動**」オプション・リストを選択します。
5. 「**変更を保存**」をクリックします。

パフォーマンス・レポートおよびレスポンス履歴のオーディエンス・レベルを構成するには

開始の前に、以下の事項を決定します。

- 目的のオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブルの名前。
- コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルに対するオーディエンス・キー。62 ページの『レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キーについて』を参照してください。

次に、該当するレポート・スキーマのそれぞれについて、このセクションの手順を実行します。

- Campaign の場合: オファー・パフォーマンス、キャンペーン・パフォーマンス、キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細、キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳
 - Interact の場合: 対話実績
1. 「**設定**」>「**構成**」を選択し、「**レポート**」>「**スキーマ**」>「**<製品名>**」>「**SchemaName**」を展開します。
 2. 右のフォームで、「**設定の編集**」をクリックします。
 3. 「**入力テーブル**」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キーのシステム・テーブルを確認します。

注: 複数のオーディエンス・キーの列名を区切るには、コンマを使用してください。詳しくは、62 ページの『レポート・スキーマにおけるオーディエンス・キーについて』を参照してください。

4. 「変更を保存」をクリックします。

追加のオーディエンス・レベルまたはパーティションのレポート・スキーマの作成

以下の理由で、追加のレポート・スキーマを作成する場合があります。

- 複数のオーディエンス・レベルでレポートを作成する必要がある。複数のオーディエンス・レベルのデータが存在するレポートを作成する場合や、ユーザーに複数のオーディエンス・レベルのいずれかを指定するよう求めるプロンプトを出すフィルターを追加する場合などです。そのため、追加の一連のコンタクトとレスポンス履歴テーブルを指すスキーマが必要です。
- 複数のパーティションにレポートを構成しており、パーティションのシステム・テーブルごとに異なるスキーマのカスタマイズを実装する必要がある。

始める前に、以下の情報を判別してください。

- 作成するレポート・スキーマ。
 - Campaign の場合: キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細、オファー・パフォーマンス、キャンペーン・パフォーマンス、オファーのコンタクト・ステータスの内訳、およびキャンペーン・カスタム属性
 - Interact の場合: 対話パフォーマンス
- このオーディエンス・レベルに関する以下のテーブルの名前。
 - Campaign の場合: コンタクト履歴テーブル、詳細なコンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブル
 - Interact の場合: 詳細なコンタクト履歴テーブルおよびレスポンス履歴テーブル
- このオーディエンス・レベルに関するオーディエンス・キー列 (複数列の場合もある) の名前
- オーディエンス・レベルの名前を表す 2 または 3 文字の短いコードを選びます。新規レポート・スキーマのテーブル名またはビュー名を指定する場合は、このコードを使用します。

レポートの目的に応じて、次の手順のステップを実行してください。

キャンペーン・オファーのレスポンスの内訳スキーマの作成方法

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スター・スキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」をクリックして、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・オファーのレスポンス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、該当のオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を入力してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

4. 新規ノードの下で、「列」>「レスポンス・タイプ」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのレスポンス・タイプを構成します。

このステップのヘルプについては、67 ページの『レスポンス・タイプの追加方法』の手順を参照してください。

5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーンのレスポンスの内訳」を選択して「設定の編集」をクリックします。
6. 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_CRBO_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、94 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

7. 「変更を保存」をクリックします。
8. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細」を選択して「設定の編集」をクリックします。
9. 「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、UARC_CORBO_HH_ と指定します。

10. 「変更を保存」をクリックします。

キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳スキーマを作成するには

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細スター・スキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリ名 (New category name)」をクリックして、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、該当のオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を入力してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

4. 新規ノードの下で、「列」>「コンタクト・ステータス・コード」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・ステータスを構成します。

このステップのヘルプについては、67 ページの『コンタクト・ステータス・コードを追加するには』の手順を参照してください。

5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーン・コンタクト・ステータスのコンタクト履歴」を選択して「設定の編集」をクリックします。
6. 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_CCSBO_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、94 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

7. 「変更を保存」をクリックします。
8. 新規ノードの下で、「SQL 構成」>「キャンペーン・オファ어의コンタクト・ステータスのコンタクト」を選択して「設定の編集」をクリックします。
9. 「テーブル/ビューの名前 (Table/View Name)」フィールドの名前を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、UARC_COCSSBO_HH_ と指定します。

10. 「変更を保存」をクリックします。

オファー実績スキーマの作成方法

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「オファー・パフォーマンス・スター・スキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」で、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、オファー・パフォーマンス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キーをサポートするテーブルを確認します。
4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションを選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

5. 構成ツリーの新規ノードの下で、「列」>「コンタクト・メトリック」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、65 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加方法』の手順を参照してください。

6. 新規ノードの下で、「列」>「レスポンス・メトリック」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのレスポンス・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、65 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加方法』の手順を参照してください。

7. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (オファ어의コンタクト履歴) を選択して「設定の編集」をクリックします。

8. 表示されるフォームで、「**テーブル/ビューの名前 (Table/View name)**」フィールドの値を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_OCH_HH_。テーブルとビューの命名規則について詳しくは、94 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

9. 「**変更を保存**」をクリックします。
10. 新規レポート・スキーマの「**SQL 構成**」セクションの下にリストされている各項目に対して、ステップ 7 から 9 を繰り返します。

キャンペーン実績スキーマの作成方法

1. 「**設定**」>「**構成**」を選択し、「**レポート**」>「**スキーマ**」>「**キャンペーン**」>「**キャンペーン・パフォーマンス・スター・スキーマ**」を展開します。
2. 「**新規カテゴリ名 (New category name)**」をクリックして、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・パフォーマンス世帯と指定します。
3. 「**入力テーブル**」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キーをサポートするテーブルを確認します。
4. 「**スキーマ設定**」セクションで、適合する「**時間経過に伴う変動**」オプションをすべて選択してから、「**変更を保存**」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

5. 新規ノードの下で、「**列**」>「**コンタクト・メトリック**」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのコンタクト・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、65 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加方法』の手順を参照してください。

6. 新規ノードの下で、「**列**」>「**レスポンス・メトリック**」を選択し、次に該当のオーディエンス・レベルのレスポンス・メトリックを構成します。

このステップのヘルプについては、65 ページの『コンタクト・メトリックまたはレスポンス・メトリックの追加方法』の手順を参照してください。

7. 新規ノードの下で、「**SQL 構成**」を展開し、最初の項目 (キャンペーンのコンタクト履歴) を選択します。
8. 表示されるフォームで、「**テーブル/ビューの名前 (Table/View name)**」フィールドの値を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARC_CCH_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、94 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

9. 「**変更を保存**」をクリックします。

10. 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各項目に対して、ステップ 8 と 9 を繰り返します。

キャンペーン・カスタム属性スキーマの作成方法

それぞれのパーティションでは、キャンペーン・カスタム属性スキーマが 1 つだけが必要です。すべてのオーディエンス・レベルに同一のスキーマが使用されます。

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「キャンペーン」>「キャンペーン・カスタム属性」を展開します。
2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」で、パーティションを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、キャンペーン・カスタム属性パーティション 2 と指定します。
3. 構成ツリーの新規ノードの下で、「列」を展開し、次に、レポート・スキーマを作成するパーティションに必要なカスタム・セル、オファー、およびキャンペーン属性を追加します。

このステップのヘルプについては、66 ページの『カスタム属性の追加方法』の手順を参照してください。

4. (オプション) 必要に応じてビューやテーブルの名前を編集できます。新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、各項目を選択してビューまたはテーブル名を調べます。名前を変更する場合、名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含めてはなりません。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、94 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。
5. 「変更を保存」をクリックします。

対話実績スキーマを作成するには

1. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「対話」>「対話パフォーマンス・スター・スキーマ」を展開します。
2. 「新規カテゴリー名 (New category name)」フィールドで、オーディエンス・レベルを示すレポート・スキーマの記述名を入力します。例えば、対話パフォーマンス世帯と指定します。
3. 「入力テーブル」セクションで、オーディエンス・レベルとオーディエンス・キーをサポートするテーブルを確認します。
4. 「スキーマ設定」セクションで、適合する「時間経過に伴う変動」オプションをすべて選択してから、「変更を保存」をクリックします。

スキーマの構成ツリーに新規ノードが表示されます。ノードの名前は変更できません。

5. 新規ノードの下で、「SQL 構成」を展開し、最初の項目 (対話式チャネル・オファーのコンタクト履歴サマリー) を選択します。
6. 表示されるフォームで、「テーブル/ビューの名前 (Table/View name)」フィールドの値を編集して、オーディエンス・レベルのコードを含めます。名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。

例えば、オーディエンス・レベルの名前が「世帯」である場合は、次のように指定します。UARI_OCH_HH_。テーブルおよびビューの命名規則について詳しくは、94 ページの『レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成』を参照してください。

7. 「変更を保存」をクリックします。
8. 新規レポート・スキーマの「SQL 構成」セクションの下にリストされている各項目に対して、ステップ 6 から 7 を繰り返します。

更新されたビューまたはテーブルの作成スクリプトの生成

このセクションでは、Campaign、eMessage、および Interact のインストールおよび構成時にセットアップされた、デフォルトのレポート・ビューまたはスキーマを更新するプロセスについて説明します。ご使用の IBM EMM システムにレポートがまだセットアップされていない場合は、このセクションの手順を使用しないでください。代わりに、本書の他の部分に記載されているインストール情報を参照してください。

ビューまたはレポート・テーブルの更新の前に

開始の前に、データ・ソースのプロパティが正しく構成されていることを確認してください。

1. 8 ページの『データソース別の SQL スクリプト』の表を参照して、更新スクリプトを実行するデータベースを検証します。
2. 「設定」>「構成」を選択し、「レポート」>「スキーマ」>「<製品名>」を展開します。
3. データ・ソース・フィールド内の値セットが適切なデータ・ソースの実際の JNDI 名と一致していることを確認します。

レポート・ビューまたはテーブルの更新済み SQL スクリプトの生成

この手順では、既存のレポート・ビューやテーブルの更新済み SQL スクリプトを生成する方法について説明します。初めてビューまたはテーブルを構成する場合は、この手順を使用しないでください。代わりに、本書のインストールに関する章を参照してください。

更新済み SQL スクリプトを生成するには、以下の手順を実行します。

1. 「設定」>「レポート SQL ジェネレーター」を選択します。「SQL ジェネレーター」ページが表示されます。
2. 「製品」フィールドで、適切な IBM アプリケーションを選択します。
3. 「スキーマ」フィールドで 1 つ以上のレポート・スキーマを選択します。8 ページの『データソース別の SQL スクリプト』の表を使用して、適切なスキーマを判別して選択します。
4. 「データベース・タイプ」を選択します。このオプションは、スクリプトを生成しているデータベースのデータベース・タイプと一致している必要があります。

5. 「生成タイプ」フィールドで、適切なオプション (ビュー、実体化ビュー、またはテーブル) を選択します。

「データベース・タイプ」が MS SQL Server に設定されている場合、実体化ビューというオプションはありません。

JNDI データ・ソース名が正しくない、または構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成するスクリプトを検証できません。

6. 「除去ステートメントの生成 (Generate Drop Statement)」フィールドの値を「Yes」に設定します。
7. (オプション) SQL を調べるには、「生成」をクリックします。SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ブラウザ・ウィンドウにそのスクリプトが表示されます。
8. 「ダウンロード」をクリックします。

SQL ジェネレーターでスクリプトが作成され、ファイルを保存する場所の指定を求めるプロンプトが出されます。単一のレポート・スキーマを「スキーマ」フィールドから選択すると、スクリプト名はスキーマの名前 (eMessage_Mailing_Execution.sql など) と同じになります。複数のレポート・スキーマを選択すると、スクリプト名には製品名のみ (Campaign.sql など) が使用されます。名前の詳細なリストについては、8 ページの『データソース別の SQL スクリプト』を参照してください。

9. スクリプトを保存する場所を指定します。ファイルの名前を変更する場合は、必ず、選択したスキーマを明確に示すものを使用してください。次に、「保存」をクリックします。
10. ステップ 7 から 10 を繰り返します。ただし、今度は「除去ステートメント (Drop Statement)」フィールドでは「No」を選択してください。
11. 生成する各スクリプトに対して、ステップ 3 から 11 を繰り返します。

注: スクリプトの妥当性検査を無効にする必要がある場合もあります。例えば、Marketing Platform で IBM アプリケーション・データベースに接続できないが、どうしてもスクリプトを生成したい場合です。妥当性検査を無効にするには、レポートのデータ・ソース構成プロパティの値を消去します。スクリプトを生成すると、レポート SQL ジェネレーターは、データ・ソースに接続できないという警告を表示しますが、引き続き SQL スクリプトを生成します。

ビューまたはレポートテーブルの更新

この手順では、既存のビューまたはレポート・テーブルの更新について説明しています。初めてビューまたはレポート・テーブルを作成する場合は、この手順を使用しないでください。代わりに、ご使用の IBM アプリケーションに関するインストール・ガイドに記載されているレポートの章を参照してください。

ビューまたはテーブルを更新する SQL スクリプトの生成とダウンロードが完了した後、アプリケーション・データベースでそれらを実行します。

1. 生成して保存した SQL スクリプトを見つけます。8 ページの『データソース別の SQL スクリプト』の表を使用して、どのスクリプトをどのデータベースに対して実行するかを決定します。

2. データベース管理ツールを使用して、除去スクリプトを実行します。
3. データベース管理ツールを使用して、作成スクリプトを実行します。
4. **レポート・テーブルについては**、データベース管理ツールを使用して、実稼働システムのデータベースから適切なデータを新規テーブルに設定します。
5. **レポート・テーブルおよび実体化ビューの場合**、データベース管理ツールを使用して、IBM アプリケーションの実稼働データベースと新規レポート・テーブルまたは実体化ビューとの間のデータの同期化処理をスケジュールに入れ、定期的に行います。

注: このステップでは、お客様所有のツールを使用する必要があります。レポート SQL ジェネレータがお客様に代わってこの SQL を生成することはありません。

データソース別の SQLスクリプト

以下の表では、各データ・ソースについて生成する必要のあるスクリプトと結果スクリプトの名前を示し、ビューまたは実体化ビューを作成する場合にどの IBM EMM アプリケーション・データベースに対してどのスクリプトを実行する必要があるかも示します。次のことに注意してください。

- この表にはデータ・ソースおよび生成スクリプトのデフォルト名をリストしていますが、これらはお客様が変更している場合があります。
- **Interact** レポート・スキーマは、複数のデータ・ソースを参照します。データ・ソースごとに別の SQL スクリプトを生成してください。

レポート・スキーマ	データソース (デフォルト名)	スクリプト名 (デフォルト名)
すべての Campaign レポート・スキーマ	Campaign システム・テーブル (campaignPartitionIDS)	Campaign.sql (レポート・スキーマごとに別のスクリプトを生成していない場合)。別のスクリプトを生成している場合、各スクリプトの名前は個々のスキーマに基づいて付けられます。
eMessage メール配信パフォーマンス	eMessage は、Campaign システム・テーブルに関する表を追跡します。 (campaignPartitionIDS)	eMessage_Mailing_Performance.sql
対話配置履歴、対話パフォーマンス、および対話ビュー	Interact 設計時間データベース (campaignPartitionIDS)	Interact.sql
対話ラーニング	Interact 学習テーブル (InteractLearningDS)	Interact_Learning.sql
対話ランタイム	Interact ランタイム・データベース (InteractRTDS)	Interact_Runtime.sql

「レポート SQL ジェネレータ」ページのリファレンス

レポート SQL ジェネレーターは、ユーザーの構成したレポート・スキーマを使用して、ビューやレポート・テーブルを作成する SQL を生成します。

項目	説明
製品	レポート・スキーマ・テンプレートがインストールされている製品をリストします。
スキーマ	ユーザーが選択した製品のレポート・スキーマをリストします。詳しくは、以下の説明を参照してください。 121 ページの『付録 C. 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ』 123 ページの『eMessageレポートおよびレポート・スキーマ』 123 ページの『Interact レポートおよびレポート・スキーマ』
データベースタイプ	生成されるスクリプトを実行する予定のアプリケーション・データベースのデータベース・タイプを示します。
生成タイプ	生成するスクリプトによって、ビュー、実体化ビュー、またはレポート・テーブルを生成するかどうかを示します。 - データベース・タイプが MS SQL Server に設定されている場合、実体化ビューというオプションはありません。 - JNDI データ・ソース名が正しくない、または構成されていない場合、SQL ジェネレーターは、テーブルを作成するスクリプトを検証できません。 4 番目のオプションの XML は、SQL スクリプトでは生成されません。代わりに、XML のスキーマの記述が作成されます。その後、必要に応じて、サード・パーティーの ETL またはインポート・ツールで XML ファイルを使用することができます。 60 ページの『レポート配置オプションについて』も参照してください。
Drop ステートメントを生成するかどうか	生成するスクリプトが除去スクリプトであるかどうかを示します。既存のビューまたはテーブルを更新する場合は、除去スクリプトおよび作成スクリプトを生成して、新しい作成スクリプトを実行する前に除去スクリプトを実行することをお勧めします。 フィールドで「Yes」を選択した場合、SQL ジェネレーターによって、スクリプトの最後に「DROP」という単語が付加されます。
生成	このオプションをクリックすると、SQL ジェネレーターがスクリプトを作成し、このウィンドウにスクリプトを表示します。その後は、必要に応じてそのスクリプトをコピーして貼り付けることができます。
ダウンロード	このオプションをクリックすると、SQL ジェネレーターがスクリプトを作成し、ご使用のシステムにスクリプトを保存するように求めるプロンプトを出します。生成されたスクリプトに使用される名前については、以下を参照してください。 8 ページの『データソース別の SQLスクリプト』。

IBM Cognos モデルのカスタマイズ

IBM EMM レポート・スキーマをカスタマイズして追加のメトリック、属性、またはオーディエンス・レベルを組み込み、レポート・ビューまたはテーブルをそのスキーマに基づいて変更する場合は、IBM Cognos BI モデルも編集する必要があります。IBM Cognos Framework Manager 機能を使用して、ビューまたはテーブルへの照会を実行し、データ・モデル内の追加項目をインポートしてください。

Cognos モデルの更新方法は、IBM EMM のレポート・ビューまたはテーブルに加えられた変更によって異なります。

- 属性、メトリック、またはレスポンス・タイプの列を追加して既存のビューを変更した場合は、関連ビューを表す照会オブジェクトを更新することによって新規列をインポートしてください。
- パフォーマンスやランタイム・レポートの時間経過に伴う変動を変更した場合、または追加オーディエンス・レベル用の新規レポート・スキーマを作成した場合、新規ビューが追加されています。この場合は、Framework Manager MetaData Wizard を使用して、ビューをデータ・モデルにインポートしてください。

このセクションでは、Cognos モデルにカスタマイズを追加するためのガイドラインとして使用できる例を示します。詳しくは、「*IBM Cognos BI Framework Manager ユーザー・ガイド*」および Framework Manager のオンライン・ヘルプを参照してください。

例: データ・モデルにある既存のビューまたはテーブルへの属性の追加

以下の例の手順では、IBM Cognos モデルの既存のビューに項目を追加する方法を示しています。この例では、Campaign データベースにカスタム・オファー属性を追加してから、レポートに含める必要があるとします。以下のタスクがすでに完了している必要があります。

- UA_OfferAttribute テーブルでオファー属性を作成する。
- オファー属性をキャンペーン・カスタム属性レポート・スキーマに追加する。
- レポート SQL ジェネレーターを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、オファー・カスタム属性レポート・ビュー (UARC_OFFEREXTATTR) を更新する。

ここで、Cognos Campaign モデルに新規オファー属性を追加するには、以下の手順を実行します。

1. Campaign モデルのバックアップを作成します。つまり、Cognos/models ディレクトリに移動し、CampaignModel サブディレクトリをコピーします。分散 Cognos 環境では、models ディレクトリは、Content Manager を実行しているシステム上にあります。
2. Framework Manager では、Campaign.cpf ファイル (プロジェクト) を開いて、「インポート・ビュー」ノードを展開します。
3. 「インポート・ビュー」の下で、カスタム・オファー属性 (「インポート・ビュー (Import View)」>「キャンペーン・カスタム属性 (Campaign Custom Attributes)」>「UARC_OFFEREXTATTR」) のレポート・ビューを表示する照会オブジェクトを選択します。

4. 「ツール」>「オブジェクトの更新 (Update Object)」を選択します。Cognos は、ビューのノードの下にリストされている列を最新表示して、Campaign データベース内の UARC_OFFEREXTATTR レポート・ビューに現在存在する列をすべて反映します。
 5. 「モデル・ビュー」を展開し、このビュー内のカスタム・オファー属性（「モデル・ビュー」>「キャンペーン・カスタム属性 (Campaign Custom Attributes)」>「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」）を表すノードを選択します。
 6. 「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」ノードをダブルクリックして、「照会サブジェクト定義 (Query Subject Definition)」ダイアログ・ボックスを開きます。
 7. 新規列を見つけて、「モデル・ビュー」に追加します。照会項目の名前を編集して、読みやすくします。例えば、Campaign データ・モデルの「インポート・ビュー」にある LASTRUNDATE という名前の列は、「モデル・ビュー」で「前回実行日」として表示されます。
- 注: 「ビジネス・ビュー」には、「モデル・ビュー」にある「オファー・カスタム属性 (Offer Custom Attributes)」ノードへのショートカットが含まれています。これは、手動で追加することなく「ビジネス・ビュー」で現在使用可能な新規照会項目です。
8. モデルを保存します。
 9. パッケージを Cognos コンテンツストアに公開します。

これで、IBM Cognos Report Authoring を使用して、適切なレポートに属性を追加することができます。

例: IBM Cognos データ・モデルへの新規ビューの追加

以下のサンプル手順は、IBM Cognos データ・モデルに新しいビューまたはテーブルを追加する方法を示します。この例では、キャンペーン実績のレポート・スキーマについての時間経過に伴う変動を変更し、ここで Cognos モデルの変更をインポートする必要があるとします。以下のタスクをすでに完了している必要があります。

- 「時間経過に伴う変動」オプションに四半期単位を追加して、キャンペーン・パフォーマンスのスキーマを変更する。
- レポート SQL ジェネレーターを使用して、ビュー作成スクリプトを生成する。このスクリプトには、次の追加レポート・ビューを作成する指示が含まれています。UARC_CCCH_QU、UARC_CCH_QU、UARC_CCRH_QU、UARC_COCH_QU、UARC_CORH_QU、および UARC_CRH_QU
- Campaign データベースで生成したスクリプトを実行して、追加レポート・ビューを作成する。

ここで、Cognos Campaign データ・モデルに新規レポート・ビューを追加するには、以下の手順を実行します。

1. Campaign モデルのバックアップを作成します。

つまり、Cognos/models ディレクトリに移動し、CampaignModel サブディレクトリをコピーします。分散 Cognos 環境では、models ディレクトリは、Content Manager を実行しているシステム上にあります。

2. Framework Manager では、キャンペーン・プロジェクトを開いて、「インポート・ビュー」ノードを展開します。
3. 「キャンペーン・パフォーマンス」フォルダーを選択して、「メタデータ・ウィザード (Metadata Wizard)」(マウスの右クリック・メニューからアクセス) を実行します。
4. メタデータ・ウィザードを使用して、新規ビューをインポートします。
5. 「モデル・ビュー」>「キャンペーン・パフォーマンス」ノードを展開して、「四半期別のキャンペーン・パフォーマンス (Campaign Performance by Quarter)」という名前の新規項目をモデル化します。

このステップのヘルプについては、リファレンスのその他のエントリを調べてください。必ず同一の構造と、他の「時間経過に伴う変動」ノードに含まれる関係を維持してください。また、以下については、「Cognos BI Framework Manager ユーザー・ガイド」を参照してください。

- 新規の名前空間の作成
 - スター・スキーマ・グループの作成
 - 結合の追加
6. 「ビジネス・ビュー」を展開して、「モデル・ビュー」にある「四半期別のキャンペーン・パフォーマンス (Campaign Performance by Quarter)」ノードへのショートカットを作成します。
 7. モデルを保存します。
 8. パッケージを Cognos Content Store に公開します。
 9. Report Authoring を開き、先ほど作成した「四半期別のキャンペーン・パフォーマンス (Campaign Performance by Quarter)」スキーマのオブジェクトを使用して、新規レポートを作成します。

IBM EMM アプリケーション用の Cognos レポートのカスタマイズまたは作成

レポート例をカスタマイズしてカスタム・データを組み込んだり、新規レポートを作成したりすることができます。Cognos Connection から、レポートのオプションを構成したり、一定の時刻にレポートを実行するようにスケジュールしたり、Report Authoring を使用してレポートをカスタマイズしたりすることができます。

レポートを計画して実装する場合は、以下のソースを参照してください。

- IBM EMM アプリケーションのユーザー・ガイドには、その製品の IBM EMM レポート・パッケージにあるすべてのレポートの簡略説明が記載されています。
- IBM EMM レポート・パッケージには、パッケージ内の各レポートの仕様と、レポートをサポートしている Framework Manager メタデータ・モデルについて説明した参考資料が付属しています。レポート・パッケージのインストール・ディレクトリ内の <Reports Pack インストール・ディレクトリ>/cognos10/<製品>Docs などの場所で、参照資料を見つけることができます。

例えば、IBM EMM Campaign レポート・パッケージの資料は、/IBM/EMM/ReportsPackCampaign/cognos10/CampaignDocs の下の Reports Pack インストール・ディレクトリーで見つかります。

モデルやレポートをカスタマイズする前に、これらの資料を調べてください。必ず、レポートの構成方法について理解してから、レポートの変更を行ってください。

- IBM Cognos レポートの作成および編集に関する詳細な資料については、IBM Cognos BI の資料 (特に「*IBM Cognos Report Authoring* プロフェッショナル ユーザー ガイド」) を参照してください。
- 使用するレポート・スタイルについては、付録の 113 ページの『付録 B. Cognos レポートの書式設定』を参照してください。
- Marketing Operations レポートのカスタマイズについては、「*Marketing Operations 管理者ガイド*」を参照してください。

新しい Campaign レポートの作成に関するガイドライン

IBM Cognos Report Authoring で Campaign の新しいレポートを作成するには、以下のガイドラインを使用してください。

- Campaign メタデータ・モデルとレポート・パッケージからのレポート例の仕様について説明している参考資料を調べます。これは、レポート・パッケージのインストール・ディレクトリーの CampaignReportPack¥cognos¥docs サブディレクトリーにあります。*N* は、Cognos インストール済み環境のバージョン番号です。
- Report Authoring を使用して、新しいレポートを作成するか、既存のレポートをコピーし、変更します。詳しくは、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。
- 既存のレポートのコピー (またはレポート自体) を変更する場合は、レポートの構成をよく理解しておいてください。その後、Report Authoring のツールバーと「プロパティ」ペインを使用して、カスタム属性およびメトリックを追加し、オブジェクトと照会項目を適切な方法で変更することができます。Report Authoring 使用方法については、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。レポート例の中のオブジェクトと照会項目については、レポート・パッケージにある参考資料を参照してください。
- 「分析」タブに表示されるオブジェクト固有のレポートを得るには、オブジェクトから渡された値を受け入れるパラメーター ID を作成します。「分析」ページに表示されるシステム全体のレポートを得るには、キャンペーンまたはオファーのすべてのオブジェクト値を含んだプロンプトを作成します。詳しくは、Cognos Report Authoring の資料を参照してください。
- 新しいレポートを Campaign で表示できるようにするには、「パブリック・フォルダー (Public Folders)」の下の適切なフォルダーにレポートを保存します。
 - 「分析」タブに表示するには、「**Campaign - Object Specific Reports**」フォルダーに保存します。
 - 「分析」ページに表示するには、「**Campaign**」フォルダーに保存します。
 - ダッシュボード・ポートレットに追加する計画の場合は、「**Unica Dashboards¥Campaign**」フォルダーに保存します。

インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードの構成

Interact には、インタラクション・ポイント別サマリーという 1 つの IBM Cognos ダッシュボード・レポートがあります。ダッシュボード・レポートは、照会パラメーターについてのプロンプトをユーザーに出さないため、インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートの対話式チャンネルのチャンネル ID は静的値です。デフォルトでは、このレポートのチャンネル ID は 1 に設定されます。チャンネル ID が実装環境に適していない場合は、レポートをカスタマイズして、レポートのフィルター式でチャンネル ID を変更することができます。

IBM Cognos レポートをカスタマイズするには、IBM Cognos レポートのオーサリング・スキルが必要です。IBM Cognos BI レポートの作成および編集についての詳しい資料については、IBM Cognos BI の資料 (特に、ご使用の Cognos のバージョンに対応した「*IBM Cognos BI Report Studio Professional Authoring User Guide*」) を参照してください。

インタラクション・ポイント・パフォーマンス・レポートの照会およびデータ項目については、Interact レポート・パッケージに含まれている参考資料を参照してください。

複数の対話式チャンネルをダッシュボードに表示する必要がある場合は、インタラクション・ポイント・パフォーマンス・ダッシュボードのコピーを作成してチャンネル ID を変更してください。そして、新規レポート用の新規ポートレットを作成し、それをダッシュボードに追加します。

新規カスタム・ダッシュボード・レポートの作成に関するガイドライン

Campaign、Interact、eMessage、および Marketing Operations の IBM EMM レポート・パッケージには、IBM EMM ダッシュボードでできるように特別に書式設定された事前構成レポート (ポートレット) が含まれています。ダッシュボードの扱いおよびこれらの事前構成ポートレットの使用について詳しくは、「*IBM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Cognos Report Authoring で新規カスタム・ダッシュボード・レポートを作成する場合は、以下のガイドラインを使用してください。

- メタデータ・モデルとレポート・パッケージからのレポート例の仕様について説明している参考資料を調べます。これは、レポート・パッケージのインストール・ディレクトリーの製品名 `ReportPack¥cognosN¥docs` サブディレクトリーにあります。N は Cognos インストール済み環境のバージョン番号です。
- メインの **Unica Dashboards** フォルダーの下に該当する製品サブディレクトリーに、すべてのダッシュボード・レポートを保存します。
- ダッシュボード・ポートレットに適切に収まるように、レポートを書式設定し、サイズを調整します。使用する書式設定の説明については、付録の『IBM Cognos BI レポートの書式設定』の 120 ページの『ダッシュボード・レポートのスタイル』を参照してください。

- ダッシュボード・レポートにはタイトルを含めないでください。ダッシュボード・レポートが表示されるポートレットによって、レポートにそのタイトルが指定されます。
- ダッシュボード・レポートにはハイパーリンクを含めないでください。
- ダッシュボード・レポートにはページ番号を含めないでください。

新規ダッシュボード・ポートレットを作成してそれにレポートを追加するには、「*IBM EMM Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

第 4 章 複数パーティション用のレポートの構成

この章の説明に従って、Campaign および eMessage に複数のパーティションが構成されている場合のレポートをセットアップします。

Campaign および eMessage におけるパーティションの構成については、「*IBM Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

複数パーティション用の IBM Cognos レポートの構成

Campaign、eMessage、または Interact (あるいはそのすべて) を複数のパーティションで使用している場合、パーティションごとに IBM Cognos レポート・パッケージを構成する必要があります。このプロセスを支援するために、ユーティリティー `partition_tool.sh` が提供されています。

`partition_tool.sh` ユーティリティーを実行すると、以下のことが行われます。

- 元のレポート zip アーカイブから XML ファイルをコピーします。
- XML ファイル内のパッケージ参照を、指定した新しいフォルダーの下にある新しいパッケージを参照するように置換します。
- 新規ファイルを新しい zip アーカイブに圧縮し、新規パーティション名をファイル名の末尾に追加します。

`partition_tool.sh` ユーティリティーの実行後、Cognos Connection 内に、指定した名前を使用してフォルダーを作成し、新しいアーカイブをそのフォルダーにインポートします。最後に、元のプロジェクト・ファイル (モデルが含まれるファイル) をコピーします。これで、新規パーティションを指すようにデータ・ソースを変更してから、新しいフォルダーにモデルを発行できます。

このセクションでは、複数パーティション用に IBM Cognos レポートを構成する方法を説明します。

始める前に

レポート・パーティション・ユーティリティー `partition_tool.sh` は、UNIX シェル・スクリプトです。このユーティリティーを実行する前に、以下を行ってください。

入力パラメーターの値の決定

レポート・パーティション・ツールには、2 つの入力パラメーターがあります。1 つは Cognos で作成するパーティション・フォルダーの名前、もう 1 つはコピーするレポート・アーカイブの場所です。

- Cognos で作成する予定の最上位パーティション・フォルダーの名前を決定します。この名前は、Cognos でパッケージ参照のために使用されます。例えば、「Partition2」とします。

- 元のレポート・アーカイブへのパスをメモします。例:
IBM¥Unica¥ReportsPacksCampaign¥cognos<version>¥IBM EMM Reports for Campaign.zip

Windows のみ: シェル・スクリプト・シミュレーターを入手します。

Cognos が Windows で実行されている場合、スクリプトをシェル・スクリプト・シミュレーター (Cygwin など) から実行する必要があります。

Cognos Content Manager を実行しているマシンにシェル・スクリプト・シミュレーターがインストールされていない場合には、この時点でダウンロードしてインストールします。

zip ユーティリティーがインストールされていることを確認します。

レポート・パーティション・ツールによって、新しいパーティション・レポート用の zip アーカイブが作成されます。この機能を有効にするには、zip ユーティリティーが Cognos システムにインストールされていなければなりません。

Cognos Content Manager を実行しているマシンに zip ユーティリティーがインストールされていない場合には、この時点でダウンロードしてインストールします。

レポート・パーティション・ツールを実行してレポート・アーカイブ .zip ファイルのコピーを作成する

システム内のパーティションごとに、この手順を実行してください。

1. シェルまたはシェル・シミュレーターで、
IBM¥Unica¥Platform¥tools¥cognos<version>¥bin ディレクトリーに移動します。
2. パーティション名およびアーカイブ・パスのパラメーターに値を指定して、
partition_tool.sh ユーティリティーを実行します。

例

Campaign レポート・アーカイブの場合

```
partition_tool.sh Partition2
"IBM¥Unica¥ReportsPacksCampaign¥cognos<version>¥Unica Reports for Campaign.zip"
```

eMessage レポート・アーカイブの場合

```
partition_tool.sh Partition2
"IBM¥Unica¥ReportsPackseMessage¥cognos10¥Unica Reports for eMessage.zip"
```

注: パラメーター値にスペースが含まれる場合は、上記のアーカイブ・パスのように、パラメーター値を引用文字で囲む必要があります。

3. 新しい各 zip ファイルを Cognos 配置ディレクトリーにコピーします。

上記の例で示したパーティション名を使用した場合、新しい zip ファイルの名前は以下ようになります。

- Campaign - Unica Reports for Campaign_Partition2.zip
 - eMessage - Unica Reports for eMessage_Partition2.zip
4. Cognos Connection を開きます。
 5. 「パブリック・フォルダー」の下に、レポート・パーティション用のフォルダーを作成します。

例えば、Campaign Partition 2 を作成します。

6. ステップ 5 で作成したフォルダーをインポート・ウィザードでターゲットの場所として選択して、新しい各 zip アーカイブをインポートします。

例に従った場合は、「Campaign Partition 2」フォルダーがターゲットになります。

Campaign 用の Cognos モデルのコピーの作成

Campaign レポートを複数パーティションで使用することを計画している場合は、このステップを実行してください。

このタスクでは、新しい Campaign レポート用に IBM Cognos データ・モデルのコピーを作成し、そのモデルが正しいデータ・ソース名を参照するようにします。

1. 目的のパーティションの IBM Cognos データ・ソースが作成されていることを確認します。そのパーティションのデータ・ソースがまだ作成されていない場合は、6 ページの『ステップ: JDBC データ・ソースの作成』を参照してください。
2. Framework Manager を使用して、Campaign プロジェクト (cpf ファイル) の CampaignModel.cpf ファイルを開きます。
3. 「名前を付けて保存」を使用して CampaignModel プロジェクトをコピーし、それが使用されるパーティションを表す新しい名前を付けます。

例えば、CampaignModelPartition2 にします。

4. 「プロジェクト・ビューアー」で、「データ・ソース」ノードを展開し、「CampaignDS」を選択します。

「プロパティ」ペインがデフォルトで表示されない場合は、「表示」>「プロパティ」を選択してください。

5. 「名前」フィールドをクリックし、値をデフォルトのデータ・ソース (CampaignDS) から、この Campaign パーティションの正しいデータ・ソース名に変更します。

例えば、CampaignDS_partition2 にします。

6. 「Content Manager データ・ソース」フィールドをクリックし、値をデフォルトのデータ・ソース (CampaignDS) から、前のステップで指定したのと同じ値に変更します。

この例では、値は CampaignDS_partition2 です。

7. 変更を保存します。

8. パッケージを Content Store に公開します。公開ウィザードで「場所タイプを選択」ウィンドウが表示されたら、前のタスクで Cognos Connection にレポート・アーカイブをインポートしたフォルダーに移動してそのフォルダーを指定します。

この例では、フォルダーは Campaign Partition 2 です。

eMessage 用の Cognos モデルのコピーの作成

eMessage レポートを複数パーティションで使用することを計画している場合は、このステップを実行してください。

このタスクでは、新しい eMessage レポート用に IBM Cognos データ・モデルのコピーを作成し、そのモデルが正しいデータ・ソース名を参照するようにします。

1. 目的のパーティションの IBM Cognos データ・ソースが作成されていることを確認します。そのパーティションのデータ・ソースがまだ作成されていない場合は、6 ページの『ステップ: JDBC データ・ソースの作成』を参照してください。
2. Framework Manager を使用して、eMessage プロジェクト・ファイルの eMessageModel.cpf を開きます。
3. 「名前を付けて保存」を使用して eMessageModel プロジェクトをコピーし、それが使用されるパーティションを表す新しい名前を付けます。

例えば、eMessageModelPartition2 にします。

4. 「プロジェクト・ビューアー」で、「データ・ソース」ノードを展開し、「eMessageTrackDS」を選択します。

「プロパティ」ペインがデフォルトで表示されない場合は、「表示」>「プロパティ」を選択してください。

5. 「名前」フィールドをクリックし、値をデフォルトのデータ・ソース (eMessageTrackDS) から、この eMessage パーティションの新しいデータ・ソース名に変更します。

例えば、eMessageTrackDS_partition2 にします。

6. 「Content Manager データ・ソース」フィールドをクリックし、値をデフォルトのデータ・ソース (eMessageTrackDS) から、前のステップで指定したのと同じ値に変更します。

この例では、値は eMessageTrackDS_partition2 です。

7. 変更を保存します。
8. パッケージを Content Store に公開します。公開ウィザードで「場所タイプを選択」ウィンドウが表示されたら、前のタスクで Cognos Connection にレポート・アーカイブをインポートしたフォルダーに移動してそのフォルダーを指定します。

この例では、フォルダーは Campaign Partition 2 です。

IBM EMM「構成」ページでのパーティションのレポート・プロパティの更新

パーティションごとに、レポート・フォルダーの場所を指定するレポート・プロパティのセットがあります。新しい最上位パーティション・フォルダーを表すストリングを挿入することにより、レポート・プロパティそれぞれの値を編集して、フォルダーへの実際のパスを反映させる必要があります。

Campaign の例

Cognos Connection の新しいパーティション・フォルダーの名前が「Campaign Partition 2」であるとする、レポート・プロパティの設定を次の例に示すように編集します。

```
folder[@name='Campaign Partition 2']/
```

例えば、offerAnalysisTabCachedFolder プロパティを更新するには、値を以下のように変更します。変更前:

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

変更後:

```
/content/folder[@name='Campaign Partition 2']/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

eMessage の例

Cognos Connection の新しいパーティション・フォルダーの名前が「Campaign Partition 2」であるとする、レポート・プロパティの設定を次の例に示すように編集します。

```
folder[@name='Campaign Partition 2']/
```

例えば、campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティを更新するには、値を以下のように変更します。変更前:

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessageReports']
```

変更後:

```
/content/folder[@name='Campaign Partition 2']/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']
```

パーティションのレポート・プロパティを更新するには

1. IBM EMM に platform_admin ユーザーとしてログインします。
2. 「設定」 > 「構成」を選択します。
3. 「キャンペーン」 > 「パーティション」 > *partitionName* > 「レポート」と展開します。

4. このセクションの各プロパティの値を上記で説明したように編集して、レポート・フォルダーへの実際のパスを反映させます。
5. 変更を保存します。
6. パーティションごとに、ステップ 3 から 5 を繰り返します。

付録 A. レポート構成プロパティ

レポート作成の場合、IBM EMM Suite は、サード・パーティーのビジネス・インテリジェンス・アプリケーションである IBM Cognos と統合します。Cognos プロパティを使用して、IBM インストールで使用する IBM Cognos システムを示します。また、Campaign、eMessage、Interact については、レポート作成スキーマをセットアップしてカスタマイズする際に使用する追加の構成プロパティがあります。

Reports | 統合 | Cognos [バージョン]

このページには、この IBM システムで使用する IBM Cognos システムの URL および他のパラメーターを指定するプロパティが表示されます。

統合名

説明

読み取り専用。IBM Cognos が、IBM EMM によってレポートを表示するために使用されるサード・パーティーのレポート作成/分析ツールであることを示します。

デフォルト値

Cognos

ベンダー

説明

読み取り専用。IBM Cognos が、「統合名 (Integration Name)」プロパティで指定したアプリケーションを提供する会社名であることを示します。

デフォルト値

Cognos

バージョン

説明

読み取り専用。「統合名 (Integration Name)」プロパティによって指定されるアプリケーションの製品バージョンを示します。

デフォルト値

<バージョン>

有効

説明

Suite で IBM Cognos を有効にするかどうかを指定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

統合クラス名

説明

読み取り専用。「統合名 (Integration Name)」プロパティで指定されたアプリケーションに接続する際に使用する統合インターフェースを作成する Java™ クラスの完全修飾名を示します。

デフォルト値

com.unica.report.integration.cognos.CognosIntegration

ドメイン

説明

Cognos サーバーが実行されている、完全修飾の会社ドメイン・ネームを示します。例えば、myCompanyDomain.com などです。

会社でサブドメインを使用している場合には、このフィールドの値には該当するサブドメインも含める必要があります。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

1024 文字以下のストリング。

ポータル URL

説明

IBM Cognos Connection ポータルの URL を指定します。「ドメイン (Domain)」プロパティで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例:

http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com/cognos<version>/cgi-bin/cognos.cgi

この URL は、IBM Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で確認できます。

デフォルト値

http://[変更してください]/cognos<バージョン>/cgi-bin/cognos.cgi

有効な値

正しい形式の URL。

ディスパッチ URL

説明

IBM Cognos Content Manager の URL を指定します。「ドメイン (Domain)」プロパティで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例:

http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com:9300/p2pd/servlet/dispatch

この URL は Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で表示できます。

デフォルト値

`http://[CHANGE ME]:9300/p2pd/servlet/dispatch`

Cognos Content Manager のデフォルトのポート番号は 9300 です。指定したポート番号が、Cognos インストール済み環境で使用されているポート番号と同じであることを確認してください。

有効な値

正しい形式の URL。

認証モード

説明

IBM Cognos アプリケーションで IBM Authentication Provider を使用するかどうか、つまり認証を Marketing Platform で行うかどうかを指定します。

デフォルト値

`anonymous`

有効な値

- `anonymous`: 認証が無効であることを意味します。
- `authenticated`: IBM システムと Cognos システムとの間の通信はマシン・レベルで保護されます。1 人のシステム・ユーザーを構成し、そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。慣例的に、このユーザーには「`cognos_admin`」という名前が付きます。
- `authenticatedPerUser`: システムによって、個別のユーザー資格情報が評価されます。

認証ネームスペース

説明

読み取り専用。IBM Authentication Provider の名前空間です。

デフォルト値

`Unica`

認証ユーザ名

説明

レポートシステムユーザーのログイン名を指定します。Unica Authentication Provider を使用するよう Cognos が構成されている場合、IBM アプリケーションはこのユーザーとして Cognos にログインします。このユーザーには IBM EMM へのアクセス権限も与えられることに注意してください。

この設定は、「認証モード」プロパティが **authenticated** に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

`cognos_admin`

認証データ・ソース名 (Authentication datasource name)

説明

Cognos ログイン資格情報を保持するレポート作成システム・ユーザーのデータ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

Cognos

フォーム認証を有効にする

説明

フォームベース認証を有効にするかどうかを指定します。以下のいずれかが該当する場合に、このプロパティを `True` に設定します。

- IBM EMM が IBM Cognos アプリケーションと同じドメインにインストールされていない。
- IBM EMM アプリケーションと IBM Cognos インストール済み環境が同じマシン上にある場合でも、(IBM EMM アプリケーションへのアクセスに使われる) 完全修飾ホスト名ではなく、(同じネットワーク・ドメイン内の) IP アドレスを使って IBM Cognos へのアクセスが行われる。

ただし、値が `True` の場合には、Cognos Connection へのログイン・プロセスによってログイン名とパスワードが平文で渡されるため、IBM Cognos と IBM EMM で SSL 通信を使用するように構成されていないと、機密保護機能がない状態になってしまいます。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、IBM Cognos と IBM EMM を同じドメインにインストールすべきです。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True` | `False`

レポート | スキーマ | [製品] | [スキーマ名] | SQL 構成

テーブル/ビュー名

説明

このレポート作成スキーマに生成される SQL スクリプトによって作成されることになるビューまたはテーブルの名前を指定します。標準またはデフォルトのテーブル名/ビュー名を変更しないのが、ベスト・プラクティスとなります。変更する場合には、IBM Cognos Framework Manager の Cognos モデルにあるビューの名前も変更する必要があります。

新しいオーディエンス・レベルに新しいレポート作成スキーマを作成する場合には、新しいレポート作成テーブル/ビューすべての名前を指定しなければなりません。

デフォルト値

スキーマによって異なります。

有効な値

以下の制限があるストリング。

- 18 文字以下でなければなりません。
- すべて大文字を使用する必要があります。

次の命名規則を使用する必要があります。

- 名前は英字「UAR」で開始します。
- IBM EMM アプリケーションを表す 1 文字のコードを追加します。下記のコードのリストを参照してください。
- アンダースコアを追加します。
- テーブル名を追加します。テーブル名には、オーディエンス・レベルを示す 1 つ以上の文字コードを含めます。
- アンダースコアで終了します。

SQL ジェネレーターは、適切な場合には時間ディメンション・コードを追加します。下記のコードのリストを参照してください。

例えば、UARC_COPERF_DY は Campaign のオファー・パフォーマンス (Offer Performance) の日単位のレポート作成ビューまたはテーブルの名前です。

以下に、IBM EMM アプリケーション・コードのリストを示します。

- Campaign: C
- eMessage: E
- Interact: I
- Distributed Marketing: X
- Marketing Operations: P
- Leads: L

以下に、ジェネレーターによって追加される時間ディメンション・コードのリストを示します。

- 時間: HR
- 日: DY
- 週: WK
- 月: MO
- 四半期: QU
- 年: YR

レポート | スキーマ | キャンペーン

入力データソース (JNDI)

説明

Campaign データベース、特にシステム・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。SQL 生成ツールを使用して、レポートテーブル

を作成するスクリプトを生成する場合は、このデータソースが存在する必要があります。SQL 生成ツールは、このデータソースがなくても、レポート・ビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはできません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、Campaign ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

レポート | スキーマ | キャンペーン | オファー実績

オファー実績スキーマは、すべてのオファーについて、およびキャンペーン別のオファーについてのコンタクトおよびレスポンス履歴メトリックを生成します。デフォルトでは、スキーマは、すべての時間にわたっての「サマリー」ビュー（またはテーブル）を生成するように構成されます。

オーディエンスキー

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、オーディエンスキーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の上にコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、詳細なコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | キャンペーン | [スキーマ名] | カラム | [コンタクト・メトリック]

このフォームを使用して、キャンペーン実績またはオファー実績のレポート・スキーマにコンタクト・メトリックを追加します。

カラム名

説明

「入力カラム名」フィールドで指定した列の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。 また、スペースを含むことはできません。

機能

説明

コンタクト・メトリックを決定または計算する方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力カラム名

説明

このレポート・スキーマに追加するコンタクト・メトリックを提供する列の名前。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブル内の列の名前。

制御処理フラグ

説明

サンプルの IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのコンタクト指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのメトリックを表し、もう 1 つの列はターゲットグループのメトリックを表します。「制御処理フラグ」の値は、ビュー内の列がコントロール・グループを表すか、それともターゲットグループを表すかを指定します。

レポートにコントロール・グループが含まれていない場合は、コントロール・グループの 2 番目の列は必要ありません。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: 列はターゲットグループを表します。
- 1: 列はコントロール・グループを表します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | [スキーマ名] | カラム | [レスポンス・メトリック]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいレスポンス・メトリックをキャンペーン実績またはオファー実績のレポート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「入力カラム名」フィールドで指定した列の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

機能

説明

レスポンス・メトリックを決定または計算する方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力カラム名

説明

このレポート・スキーマに追加するレスポンス・メトリックを提供する列の名前。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

レスポンス履歴テーブル内の列の名前。

制御処理フラグ

説明

標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス指標には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループからのレスポンスを表し、もう 1 つの列はターゲットグループからのレスポンスを表します。「**制御処理フラグ**」の値は、ビュー内の列がコントロール・グループを表すか、それともターゲットグループを表すかを指定します。

レポートにコントロール・グループが含まれていない場合は、コントロール・グループの 2 番目の列は必要ありません。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: 列はターゲットグループを表します。
- 1: 列はコントロール・グループを表します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・パフォーマンス

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマでは、キャンペーン、キャンペーン・オファー、キャンペーン・セルの各レベルにおけるコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。

オーディエンスキー

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、オーディエンスキーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の上にコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、詳細なコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細

このスキーマは、キャンペーンの詳細なレスポンスについて、レスポンス・タイプ別およびオファー・データ別に内訳を示したレポートをサポートします。このスキーマ・テンプレートは、キャンペーンとキャンペーン別にグループ化されたオファーの各カスタム・レスポンス・タイプについて、さまざまなレスポンス・カウントを提供します。

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファー・レスポンスの詳細 | カラム | [レスポンス・タイプ]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・レスポンス・タイプを追加する場合に使用します。

カラム名

説明

「レスポンス・タイプ・コード」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

レスポンス・タイプコード

説明

指定されたレスポンス・タイプのレスポンス・タイプコード。この値は、UA_UsrResponseType テーブルの ResponseTypeCode 列で保持されます。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

レスポンス・タイプコードの例を以下に示します。

- EXP (参照)
- CON (考慮)

- CMT (コミット)
- FFL (実現)
- USE (使用)
- USB (購読解除)
- UKN (不明)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのレスポンス・タイプ・コードもさらに使用できます。

制御処理フラグ

説明

IBM EMM Reports Pack で提供されている標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを使用する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス・タイプには 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンス・タイプを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンス・タイプを表します。「制御処理フラグ」の値は、ビュー内の列がコントロール・グループを表すか、それともターゲットグループを表すかを指定します。

レポートにコントロール・グループが含まれていない場合は、コントロール・グループの 2 番目の列は必要ありません。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: 列はターゲットグループを表します。
- 1: 列はコントロール・グループを表します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスの内訳

このスキーマは、キャンペーンの詳細なコンタクトについて、コンタクト・ステータス・タイプ別およびオファー・データ別に内訳を示したレポートをサポートします。このスキーマ・テンプレートは、キャンペーンとキャンペーン別にグループ化されたオファーの各カスタム・コンタクト・ステータス・タイプについて、さまざまなコンタクト・カウントを提供します。

デフォルトでは、このスキーマを使用する Campaign レポートのサンプルは存在しません。

オーディエンスキー

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、オーディエンスキーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の間にコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、詳細なコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_Dt1ContactHist

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーンオファターのコンタクト・ステータスの内訳 | カラム | [コンタクト・ステータス]

カラム名

説明

「コンタクトステータス」フィールドで指定した列の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

コンタクト・ステータス・コード

説明

コンタクトステータスコードの名前。これは、UA_ContactStatus テーブルの ContactStatusCode 列に保持される値です。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

コンタクトステータスタイプの例を以下に示します。

- CSD (キャンペーン送信)
- DLV (配信済み)
- UNDLV (未配信)
- CTR (制御)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプもさらに使用できます。

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属性 | カラム | [キャンペーン・カスタム・カラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタム・キャンペーン属性をレポート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「属性 ID」フィールドで識別した属性の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。 また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_CampAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

キャンペーン属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このキャンペーン属性が通貨値を保持している場合は、NumberValue を選択します。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属性 | カラム | [オファー・カスタム・カラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタムオファー属性をレポート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「属性 ID」フィールドで識別した属性の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_OfferAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

オファー属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このオファー属性が通貨値を保持している場合は、NumberValue を選択します。

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」が Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定されている場合は、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ | キャンペーン | キャンペーン・カスタム属性 | カラム | [セルカスタムカラム]

このフォームを使用して、レポートに組み込みたいカスタムセル属性をレポート・スキーマに追加します。

カラム名

説明

「属性 ID」フィールドで識別した属性の、レポート・ビューまたはテーブル内で使用する名前を指定します。

デフォルト値

[CHANGE ME]

有効な値

名前は、すべての文字が大文字で、18 文字以下である必要があります。また、スペースを含むことはできません。

属性 ID

説明

「UA_CellAttribute」テーブル内の、属性の AttributeID 列からの値。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

セル属性のデータ型。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

レポート | スキーマ | Interact

Interact レポート作成スキーマは、設計時、実行時、学習の 3 つの異なるデータベースを参照します。このページにあるプロパティを使用して、それらのデータベースのデータソースの JNDI 名を指定してください。

レポート SQL 生成ツールを使用して、レポートテーブルを作成するスクリプトを生成する場合は、このページで指定したデータソースが存在する必要があります。SQL 生成ツールは、これらのデータソースがなくても、レポート・ビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはできません。

これらのデータソースのデータベースタイプは、ビューまたはレポートテーブル用の SQL スクリプトを生成したときに選択したデータベースタイプに一致する必要があることに注意してください。

Interact デザイン・データソース (JNDI)

説明

Interact 設計時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このデータベースは、Campaign システム・テーブルでもあります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Interact ランタイムデータソース (JNDI)

説明

Interact 実行時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractRTDS

Interact ラーニングデータソース (JNDI)

説明

Interact 学習データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractLearningDS

レポート | スキーマ | Interact | 対話実績

インタラクト・パフォーマンス・スキーマは、チャンネル、チャンネル・オファー、チャンネル・セグメント、チャンネル・インタラクション・ポイント、対話式セル、対話式セル・オファー、対話式セル・インタラクション・ポイント、対話式オファー、対話式オファー・セル、対話式オファー・インタラクション・ポイントの各レベルにおいて、コンタクトとレスポンスの履歴指標を生成します。

オーディエンスキー

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、オーディエンスキーである列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字以下のストリング値。

キーが複数の列を含んでいる場合は、列名の間にコンマを使用します。例えば、ColumnX,ColumnY と指定します。

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、詳細なコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_Dt1ContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート・スキーマがサポートするオーディエンス・レベルの、レスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

時間経過に伴う変動

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

時間、日

有効な値

時間、日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ | eMessage

eMessage トラッキングデータソース (JNDI)

説明

eMessage トラッキング・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル内にあります。レポート SQL 生成ツールを使用して、レポートテーブルを作成するスクリプトを検証する場合は、このデータソースが存在する必要があります。SQL 生成ツールは、このデータソースがなくても、レポート・ビューを作成するスクリプトを生成できますが、それらのスクリプトを検証することはできません。

このデータソースのデータベースタイプは、ビューまたはレポートテーブル用の SQL スクリプトを生成したときに選択したデータベースタイプに一致する必要があります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Campaign | partitions | partition[n] | reports

これらの構成プロパティは、レポートのフォルダを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析」タブにリストされる、バースト (拡張) されたオファー・レポートの仕様が入っているフォ

ルダの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、セグメントの「分析 (Analysis)」タブにリストされるセグメント・レポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
```

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、オファの「分析 (Analysis)」タブにリストされるオファ・レポートが入っているフォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']
```

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析」タブにリストされる、バースト (拡張) されたセグメント・レポートの仕様が入っているフォルダの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']
```

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティは、レポートの仕様が保管されているルート・フォルダの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']
```

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析 (Analysis)」タブにリストされるキャンペーン・レポートが入っているフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']
```

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティは、「分析」タブにリストされる、バースト (拡張) されたキャンペーン・レポートの仕様が入っているフォルダーの場所を指定します。このタブは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックすると表示されます。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']
```

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定します。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']
```

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']
```

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

対話式チャネル分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリング。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific  
Reports']/folder[@name='interactive channel']
```

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

付録 B. Cognos レポートの書式設定

IBM Cognos レポート統合コンポーネントには、グローバル・レポート・スタイル・シート (GlobalReportStyles.css) が含まれています。ご使用の IBM EMM アプリケーション用の新規 IBM Cognos レポートを作成する場合、レポートでは、追加の手動書式設定をいくつか指定して、この css ファイルからスタイルを使用する必要があります。そうすれば、新規レポートのスタイルが IBM EMM レポート・パッケージで提供されているレポートで使用されるものと一致します。

この付録では、さまざまな種類のレポート (リスト、チャートなど) に関する次の情報を提供します。

- GlobalReportStyles.css ファイルを使用して実装されるスタイル。
- スタイル・シートでは提供できないスタイルがいくつかあるため、レポートを作成する場合、スタイルの書式設定の一部は手動で行う必要があります。

グローバル・レポートのスタイル

項目	CSS クラス名	スタイル
一般フォント・ファミリー	pg、pp	font-family: Arial, ...
レポート・タイトル	ta	font-size: 10pt;
ページ - ヘッダー	ph	padding-bottom:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;
ページ - フッター	pf	padding-top:10px; font-size:8pt; font-weight:bold;
フィールド・セット・ラベル	fs	font-size:8pt;
テーブル	tb	border-collapse:collapse

項目	CSS クラス名	スタイル
テーブル - リスト列の タイトル・セル	lt	text-align:left; background-color:#F2F2F2; /*ライト・グレー*/ font-weight:bold; border-top:1px solid silver; border-left:1px solid silver; border-bottom:1.5pt solid black; border-right:1px solid silver; padding-top: 13px;
テーブル - リスト列の ボディ・セル	lc、lm	border:1px solid silver;
テーブル - 外部ヘッ ダー	oh	background-color:#FFFCC; /*ライト・イエロー*/
テーブル - リスト・ フッター	of、os	border-top:1.5pt solid black;
クロス集計	xt	border-collapse:collapse;
クロス集計 - デフォ ルト測定セル	xm	border-top:1px solid silver; border-left:1px solid silver; border-bottom:1.5pt solid black; border-right:1.5pt solid black;
クロス集計 - メンバ ー・ラベル・セル	ml	background-color: transparent; border:1px solid silver;
クロス集計 - 外部レ ベルの合計	ol	background-color:#F7F7F7; /*オフホワイト*/
クロス集計 - スペー サー	xs	background-color: transparent; font-weight: bold;
チャート	ch	border:1pt solid #E4E4E4;
チャート - タイトル	ct	font-size:10pt; font-weight:bold;
チャート - 軸ラベル	al	font-size:10pt;
チャート - 軸線	at	color:#939393;

項目	CSS クラス名	スタイル
チャート - グラデーション	XML レポート仕様の 場合	XML レポート仕様のチャート・タグ (</combinationChart>) を閉じる前に、以下を貼り付けます。 <fillEffects> <chartGradient direction="up" fromColor="#F2F2F2" toColor="#FFFFFF"/> </fillEffects>
チャート - チャー ト・パレット	XML レポート仕様の 場合	XML レポート仕様のチャート・タグ (</combinationChart>) を閉じる前に、以下を貼り付けます。 <chartPalette> <chartColor value="#00508A"/> <chartColor value="#376C37"/> <chartColor value="#FB9A4D"/> <chartColor value="#B8351F"/> <chartColor value="#69817B"/> <chartColor value="#473E9A"/> <chartColor value="#5384AE"/> <chartColor value="#61C2A3"/> <chartColor value="#FF5656"/> <chartColor value="#A583BB"/> <chartColor value="#506079"/> <chartColor value="#A0A080"/> <chartColor value="#F1EDC1"/> <chartColor value="#A6A6A6"/> <chartColor value="#818181"/> </chartPalette>

レポートのページ・スタイル

項目	スタイル
テキスト	Arial フォント
レポート・タイトル・テキスト	Arial 10 ポイント
ページ・フッター・テキスト	Arial 8 ポイント
フィールド・セット・ラベル	Arial 8 ポイント

リスト・レポート・スタイル

リスト・レポートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

項目	スタイル
セル	1 px のシルバーの境界線 (特に注記がない場合)
列ヘッダー	ライト・グレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テーブルの残りの部分から列ヘッダーを分離させるためのもの)
サマリー・ヘッダー行 (リスト・ヘッダー)	ライト・イエローの背景
下部の合計行	ダーク・グレーの背景に、1.5 pt の黒線 (テーブルの残りの部分から行を分離させるためのもの)

さらに新規リスト・レポートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のレポートと一致させてください。

- リスト・ヘッダー (リスト・フッターではなく) を使用して、集計をオブジェクト・レベルで表示します。
- リスト・ヘッダーに表示されている数字を手動で右寄せにします。リスト・フッターとは異なり、リスト・ヘッダーは、外部コンポーネントとサマリー・コンポーネントに分離されることはありません (両コンポーネントではデフォルトで右寄せのスタイルが使用されます)。そのため、リスト・ヘッダーに情報を集計する場合は、この追加ステップを実行して、値を右揃えにする必要があります。
- 必要に応じて、グループ列に 1.5 pt の黒の実線で境界線を追加します。

以下は、グローバル・スタイルを使用しないリスト・レポートです。

Example List Report

Campaign Name	Offer Name	Number of Offers Given	Unique Recipients	Response Transactions	Unique Responders
Mortgage Multi-Channel Acquisition Campaign	Low Cost Refinance DM	3,973	3,973	1,239	1,117
	Low Cost Refinance TM	2,696	2,696	875	787
Multi - Wave Campaign		18,611	18,243	312	67
Multi - Wave Campaign	15 Pct Off \$75 Direct Mail	300	300		
	Buy One Get One 50 Pct Off Direct Mail	300	300		
	Money Market Savings	18,011	18,011	312	67
Multi-Channel Category Cross-Sell		19,672	19,672	4,825	2,541
Multi-Channel Category Cross-Sell	Bath Dmail	1,552	1,552	1,013	417
	Bath Email	2,260	2,260	1,281	528
	Clearance Dmail	145	145	26	16
	Clearance Email	200	200	33	22
	Electronics Dmail	207	207	47	30
	Electronics Email	270	270	59	39
	Home Care Dmail	71	71	20	12
	Home Care Email	92	92	22	13
	Home Decor Dmail	4,190	4,190	676	446
	Home Decor Email	6,250	6,250	931	605
	Juniors Dmail	11	11		
	Juniors Email	8	8		
	Kitchen Dmail	62	62	9	6
	Kitchen Email	86	86	15	11

以下は、グローバル・スタイルを使用するリスト・レポートです。

Example List Report					
Campaign Name	Offer Name	Number of Offers Given	Unique Recipients	Response Transactions	Unique Responders
1. Retention for High Value Customer - eMail		12,756	12,756	3,376	3,130
1. Retention for High Value Customer - eMail	Phone Credit \$20 (English)	1,592	1,592	420	391
	Phone Credit \$20 (Spanish)	1,596	1,596	420	396
	PPV - 5 Free (English)	4,803	4,803	1,262	1,174
	PPV - 5 Free (Spanish)	4,763	4,763	1,266	1,170
2. Targeted Acquisition		5,000	5,000	1,601	1,666
2. Targeted Acquisition	Free Webcam High Speed Internet	2,500	2,500	432	426
	Gift Certificate Offer	2,500	2,500	1,169	663
3. Direct Mail Multi-Wave		8,337	8,337	1,929	1,834
3. Direct Mail Multi-Wave	New Phone Existing Cable - Inital	8,337	8,337	1,929	1,834
Association Campaigns		150	150	9	3
Association Campaigns	DM-20 pct off Books	25	25		
	DM-20 pct off Education	25	25	3	1
	DM-Pharma Donation Match	25	25		
	EM-20 pct off Books	25	25		
	EM-20 pct off Education	25	25	6	2
	EM-Pharma Donation Match	25	25		
Casino Marketing Campaign C000007023		886	886	10,123	1,994
Casino Marketing Campaign C000007023	Free Buffet Dinner Offer	443	443	47	37
	Free Gas Card Offer	443	443	10,076	1,979
Credit Card Acquisition		364	364	44	16
Credit Card Acquisition	Credit Card Offer	364	364	44	16
Customer Winback		3,856	3,856	396	149
Customer Winback	15 Pct Off On Purchase \$100+ DM	2,961	2,961	396	149
	20 Percent Off Any Single Item Offer	895	895		
Gaming Re-Activation C000007021		2,456	2,456	1,812	353
Gaming Re-Activation C000007021	Play Multipliers Offer	2,456	2,456	1,812	353
Home Equity Cross Sell		6,941	6,937	746	268
Home Equity Cross Sell	Fee based Home Equity Line of Credit	692	692	6	6

Sample Informational Text
Aug 13, 2008
Top Page up Page down System

1

10:55:17 AM

クロス集計レポートのスタイル

クロス集計レポートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

項目	スタイル
セル	透明背景: 1 px のシルバーの境界線
測定セル (左上)	1.5 pt の黒い線 (クロス集計の残りの部分からセルを分離するためのもの)
外部レベルの合計	グレー/オフホワイトの背景

さらに新規リスト・レポートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のレポートと一致させてください。

- 1.5 pt の黒の境界線を使用して、測定値から集計を分離
- 1.5 の黒の境界線を使用して、論理列グループをグループ化
- 一般ガイドライン: 同じレポート内で列と行の両方を集計しないようにしてください。

以下は、グローバル・スタイルを使用しないクロス集計レポートです。

Example Crosstab Report

	1		2		3		4		7		9	
	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients
Cross Sell	1,263	1,263	6,941	6,637	8,404	7,157	8,337	8,337				
Loyalty	19,940	19,806	24,324	24,324					9,563	9,563		
Retention	3,856	3,856			4,414	4,414						
Acquisition	150	150			12,756	12,756					23,114	
					13,339	13,339	5,000	5,000				

以下は、グローバル・スタイルを使用するクロス集計レポートで、列のグループを示すために 1.5 ピクセルの境界線が適用されています。

	1		2		3		4		7		9		10		11		12		Total(Month)	
	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients	Number of Offers Given	Unique Recipients
Cross Sell	1,263	1,263	6,941	6,637	8,404	7,157	8,337	8,337					10,611	10,543			884	884	44,442	43,822
Loyalty	19,940	19,806	24,324	24,324					9,563	9,563									52,827	52,883
Retention	3,856	3,856			4,414	4,414									2,458	2,458			18,728	18,728
Acquisition	150	150			12,756	12,756					23,114	23,114							38,828	38,828
					13,339	13,339	5,000	5,000					384	384					18,763	18,763

チャートのスタイル

チャートは、GlobalStyleSheet.css から以下の書式設定を取得します。

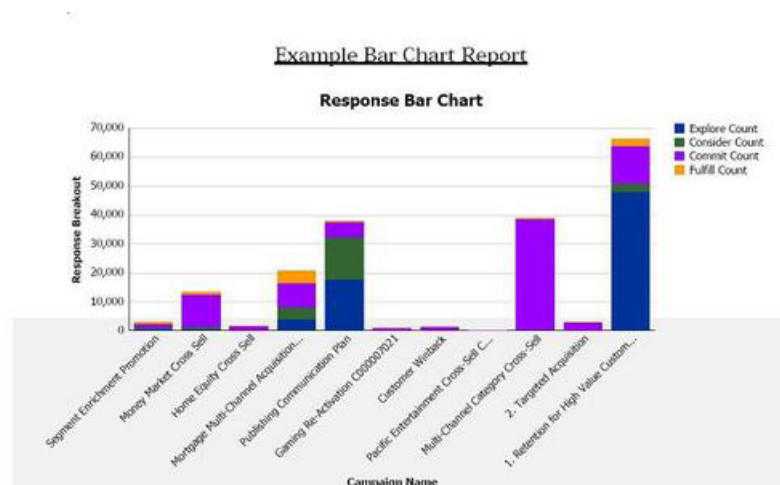
項目	スタイル
チャート	1 pt のライト・グレーの境界線
タイトルとラベル	10 ポイントの太字フォント

さらに新規チャートを作成する場合は、次の手順を実行して既存のチャート・レポートに一致させてください。

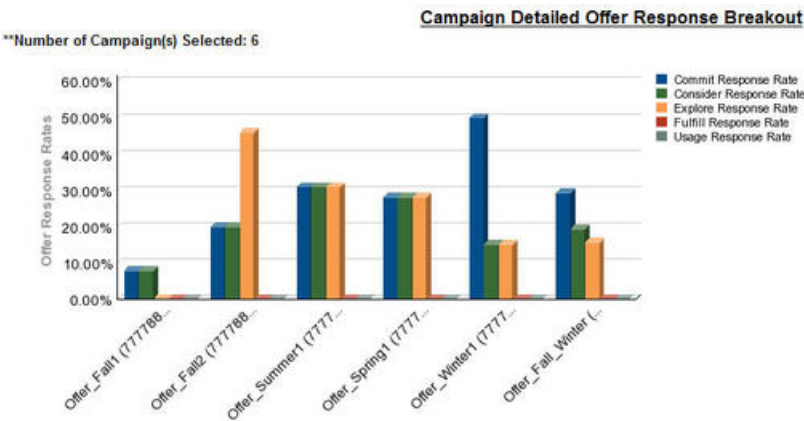
- レポートに複数のチャートがない限り、デフォルトの幅を使用します。単一のレポートに複数のチャートを組み込む場合は、チャート幅を 750px に設定します。
- グラデーションやカラー・パレットを使用するには、113 ページの『グローバル・レポートのスタイル』のテーブルからストリングをコピーして、XML レポート仕様に貼り付けます。
- 一般ガイドライン: 返されると予想されるデータに基づいてチャート・タイプを選択します。
 - レポートが連続的なデータを取得すると保証できる場合にのみ、チャート・タイプとして折れ線グラフを使用してください。
 - 複数の系列がある場合は、積み重ね棒グラフは、非積み重ね棒グラフより効果的です。
 - ベスト・プラクティスとして、パーセント合計が 100% に等しい場合にのみ、パーセントを使用してください。値が 100% に達していない場合、円グラフではユーザーを混乱させる場合があります。
-

チャートにある系列が 2 つだけであり、Y1 軸と Y2 軸の両方を表示する場合には、ベスト・プラクティスとして、色を軸ラベルの最初の 2 つのパレットの色に一致させる必要があります。

以下は、グローバル・スタイルを使用しないチャートです。



以下は、グローバル・スタイルを使用するチャートで、追加の書式設定が適用されています。



ダッシュボード・レポートのスタイル

ダッシュボード・レポートでは、手動書式設定をいくつか備えたグローバル・スタイルを使用します。必ず、ダッシュボード・ポートレットに正しく収まるように、以下のガイドラインに従って、ダッシュボードに表示される形式のレポートにしてください。

項目	スタイル
背景色	背景色は常にグレー (16 進値 F2F2F2) に設定してください。
サイズ	できる限り、パーセントを使用してサイズを指定します。パーセントのサイズ指定を使用できない場合は、サイズを幅 323 ピクセル、高さ 175 ピクセルに設定してください。
サブタイトル	左側にサブタイトルを置きます。
日付	右側に日付を置きます。
凡例	チャートの下の中央の凡例です。
線グラフの線	横線のみを表示します。縦線は表示しないでください。
軸線の色	軸線は常に黒に設定します。
グリッド線の色	グリッド線は常にグレー (16 進値 D9D9D9) に設定します。
リスト (テーブル)	最大で 10 行を表示します。

付録 C. 製品別のレポートおよびレポート・スキーマ

次の方法で、Campaign レポート・パッケージのレポート・スキーマをカスタマイズすることができます。

- コンタクトまたはレスポンス・メトリックを追加する
- カスタムのキャンペーン、オファー、またはセル属性を追加する
- レスポンス・タイプを追加する
- パフォーマンス・レポートのオーディエンス・レベルを構成する
- 追加オーディエンス・レベル用のレポート・スキーマを作成する

以下の表では、Campaign レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートするレポート・スキーマにマップしています。

	キャン ペーン ビュー スキーマ	キャン ペーン カスタム 属性 スキーマ	キャン ペーン 実績 スキーマ	オファー 実績 スキーマ	キャン ペーン オファー・レ スポンスの詳 細	オファーのコ ンタクト・ス テータスの内 訳
仮定オファー 収支サマリ ー・レポート	X	X		X		
キャンペーン 詳細オファ ー・レスポ ンスの詳細	X		X		X	
オファー・レ スポンスの詳 細 (ダッシュ ボード版)	X		X		X	
オファー別キ ャмпейン収 支サマリ (実 績)	X	X	X			
キャンペーン 投資収益率の 比較	X	X	X			
月別キャン ペーン・オファ ー実績	X		X			
キャンペーン 実績の比較	X		X			
キャンペー ン・レスポ ンス率の比較	X		X			

	キャン ペーン ビュー スキーマ	キャン ペーン カスタム 属性 スキーマ	キャン ペーン 実績 スキーマ	オファー 実績 スキーマ	キャン ペーン オファー・レ スポンスの詳 細	オファーのコ ンタクト・ス テータスの内 訳
収益を伴うキャン ペーン実績の比較	X		X			
イニシアチブ 別のキャンペ ーン実績の比 較	X		X			
セル別のキャン ペーン実績サ マリー	X		X			
収益を伴うセル 別キャンペーン 実績サマリー	X		X			
セル別および イニシアチブ 別のキャンペ ーン実績サマ リー	X		X			
オファー別の キャンペーン 実績サマリー	X		X			
収益を伴うオ ファー別キャン ペーン実績サ マリー	X		X			
オファー別キ ャンペーン収 益の比較	X		X			
キャンペー ン・サマリー	X					
オファー・キ ャンペーン・ リスト	X					
オファー実績 メトリック	X			X		
日別オファー 実績	X			X		
過去 7 日間の オファーレス ポンス	X			X		
オファー実績 の比較	X			X		

	キャン ペーン ビュー スキーマ	キャン ペーン カスタム 属性 スキーマ	キャン ペーン 実績 スキーマ	オファー 実績 スキーマ	キャン ペーン オファー・レ スポンスの詳 細	オファーのコ ンタクト・ス テータスの内 訳
オファー・レ スポンス率の 比較	X			X		
キャンペーン 別のオファー 実績サマリー	X		X	X		

次のレポートでは、Campaign で提供されるカスタムのコンタクトおよびレスポンス・メトリック属性の標準セットを使用します。

- 仮定オファー収支サマリー
- キャンペーン詳細オファー・レスポンスの詳細
- オファー別キャンペーン収支サマリー (実績)
- 収益を伴うキャンペーン・パフォーマンスの比較
- 収益を伴うセル別キャンペーン・パフォーマンス・サマリー
- 収益を伴うオファー別キャンペーン・パフォーマンス・サマリー

eMessageレポートおよびレポート・スキーマ

以下の表では、eMessage レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートする IBM レポート・スキーマにマップしています。

	メール配信パフォーマンス・スキーマ
メッセージ概要レポート	X
詳細リンク・レポート	X
セル別詳細リンク・レポート	X
詳細バウンス・レポート	X
A/B テスト・パフォーマンス・レポート	X

Interact レポートおよびレポート・スキーマ

次の方法で、Interact レポート・パッケージのレポート・スキーマをカスタマイズすることができます。

- パフォーマンス・レポートのカレンダーの時間枠を指定する
- パフォーマンス・レポートのオーディエンス・レベルを構成する
- 追加オーディエンス・レベルの追加パフォーマンス・レポート・スキーマを作成する

以下の表は、Interact レポート・パッケージで提供されている個々の IBM Cognos BI レポートを、それらをサポートする IBM レポート・スキーマにマップしています。

	対話式 ビュー・スキーマ	Interact パフ ォーマンス・ ビュー・スキ ーマ	対話 式 チャンネル/ キャンペーン 配置履歴	Interact ラン タイム・ビュー ・スキーマ	Interact ラー ニング・ビュー ・スキーマ
キャンペーン - 対話式チャ ネル配置履歴	X		X		
キャンペーン - 対話式セル・パフオー マンス	X	X		X	
キャンペーン - オファー別 対話式セル・ パフオーマン ス	X	X		X	
キャンペーン - 対話式オフ ァー・パフオー マンス	X	X		X	
キャンペーン - セル別対話 式オファー・ パフオーマン ス	X	X		X	
キャンペーン - 対話式オフ ァー学習の詳細	X				X
対話式セル・ リフト分析	X	X		X	X
対話式チャネ ル - チャンネル 配置履歴	X		X		
対話式チャネ ル - チャネル ・イベント・アクティ ビティのサ マリー・レポ ート	X			X	

	対話式 ビュー・スキ ーマ	Interact パフ ォーマンス・ ビュー・スキ ーマ	対話 式 チャンネル/ キャンペーン 配置履歴	Interact ラン タイム・ビュー ・スキーマ	Interact ラー ニング・ビュー ・スキーマ
対話式チャネル - チャネル・インタラクション・ポイント・パフォーマンス・サマリー	X	X		X	
対話式チャネル - チャネル処理ルール・インベントリ	X				
対話式セグメント・リフト分析	X	X		X	
インタラクション・ポイント・パフォーマンス	X	X		X	

IBM 技術サポートへの連絡

文書を参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM 技術サポートに電話することができます。このセクションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM 管理者にお問い合わせください。

収集する情報

IBM 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集しておいてください。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手した製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択することにより表示できます。「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリーの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM 技術サポートのコンタクト情報

IBM 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM 製品技術サポートの Web サイト (http://www-947.ibm.com/support/entry/portal/open_service_request) を参照してください。

注: サポート要求を入力するには、IBM アカウントでログインする必要があります。可能な場合、このアカウントは、IBM 顧客番号とリンクされている必要があります。アカウントを IBM 顧客番号に関連付ける方法については、Support Portal の「サポート・リソース」>「ライセンス付きソフトウェア・サポート」を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で 사용할 수 있지만、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。

プライバシー・ポリシーおよび利用条件の考慮事項

サービス・ソリューションとしてのソフトウェアも含めた IBM ソフトウェア製品（「ソフトウェア・オファリング」）では、製品の使用に関する情報の収集、エンド・ユーザーの使用感の向上、エンド・ユーザーとの対話またはその他の目的のために、Cookie はじめさまざまなテクノロジーを使用することがあります。Cookie とは Web サイトからお客様のブラウザーに送信できるデータで、お客様のコンピューターを識別するタグとしてそのコンピューターに保存されることがあります。多くの場合、これらの Cookie により個人情報が収集されることはありません。ご使用の「ソフトウェア・オファリング」が、これらの Cookie およびそれに類するテクノロジーを通じてお客様による個人情報の収集を可能にする場合、以下の具体的事項を確認ください。

このソフトウェア・オファリングは、展開される構成に応じて、セッション管理、お客様の利便性の向上、または利用の追跡または機能上の目的のために、それぞれのお客様のユーザー名、およびその他の個人情報を、セッションごとの Cookie および持続的な Cookie を使用して収集する場合があります。これらの Cookie は無効にできますが、その場合、これらを有効にした場合の機能を活用することはできません。

Cookie およびこれに類するテクノロジーによる個人情報の収集は、各国の適用法令等による制限を受けます。この「ソフトウェア・オファリング」が Cookie およびさまざまなテクノロジーを使用してエンド・ユーザーから個人情報を収集する機能を提供する場合、お客様は、個人情報を収集するにあたって適用される法律、ガイドライン等を遵守する必要があります。これには、エンドユーザーへの通知や同意取得の要求も含まれますがそれらには限られません。

お客様は、IBM の使用にあたり、(1) IBM およびお客様のデータ収集と使用に関する方針へのリンクを含む、お客様の Web サイト利用条件（例えば、プライバシー・ポリシー）への明確なリンクを提供すること、(2) IBM がお客様に代わり閲覧者のコンピューターに、Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置することを通知すること、ならびにこれらのテクノロジーの目的について説明すること、

および (3) 法律で求められる範囲において、お客様または IBM が Web サイトへの閲覧者の装置に Cookie およびクリア GIF または Web ビーコンを配置する前に、閲覧者から合意を取り付けること、とします。

このような目的での Cookie を含むさまざまなテクノロジーの使用について詳しくは、IBM の『IBM オンラインでのプライバシー・ステートメント』(<http://www.ibm.com/privacy/details/jp/ja/>) の『クッキー、ウェブ・ビーコン、その他のテクノロジー』を参照してください。



Printed in Japan